

グラブル夜の部

沼のアルマス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

団員とやりまくることになるグラン君中心のエロ書きです。息抜きで書いてるだけなのでハイパー不定期。

ハート表現に関して：心身の状態を表しています

♡↓エッチな気分やアピールしているとき

♥?↓体に快感が走ったりイっぺしているとき

ハートの数↓その度合いの強さや声量

目次

第1話	ジータと初めて覚醒セックス♡	1
第2話	元巫女アイドルディアンサのベッドステージ♡	9
第3話	バカンス中にヘルエス様の強制搾精セックス♡	20
第4話	ナルメアお姉さんとミルク搾り♡	33
第5話	レオナさんと過ごす眠れない夜の終わらせ方♡	46
第6話	特別任務：ゼタとベアトリクスの快樂調教♡	61
第7話	狂い咲くりーシャと新しい秩序♡	74
第8話	グランサイファアの夜の日常♡	84
第9話	クラリスとビターデートの後で♡	98
第10話	エウロペの恋事情♡	117
第11話	アリーザと5つの試練♡	132
第12話	コルワのハッピー審査♡	154
第13話	幼馴染みと元アイドル♡	165

第1話 ジータと初めて覚醒セックス♡

「グラン…起きてる?」

「ああ、ジータ?今寝ようとしてたところだけど、どうかした?」

「入るね…。」

ネグリジエ姿のジータは部屋に入ると、顔をほんのり赤らめてグランの側まで近寄る。女の子らしい甘い匂いがふわっと漂ってくるのに一瞬気を取られ、ジータに押し倒される。

「おわっ!?!どうしたんだよジータ!」

「私ね、もう我慢できないの…。グランと一緒に旅をし続けて、いろんな人と出会って、仲間が増えて…。私も副団長として大変なこともあるけど、毎日が楽しくて、でもね?他の子にグランのこと取られちゃうんじゃないかって最近思っちゃってダメなの。」

「そ、そんなこと…!」

「グランは気づいてないかもしれないけど、みーんなグランのこと好きなんだよ?私はザンクティンゼルにいた頃からずーっと好きだったのに。でもグランのことを好きになるのは分かるから、それはいいの。だからね、副団長として団の秩序を保つためにみんなの動きに気をつけて、誰も一線を越えないようにしてたの。」

「ジ、ジータ…そこは…!」

(グランのおちんちん、ズボン越しだけど触っちゃってる…♡大好きなグランのおちんちん…♡)

「でもそれも限界なの。明日か明後日か1週間後か分からないけど、遠くないいつか誰かがグランに迫っちゃう気がするの。だからね、その前に…♡私と初めてのエッチしよう?安心して♡私も初めてだけど、メーテラさんとかに教わって予習はしてあるから…♡」

「やめるんだ、ジータ…!僕だって、そういうことに興味が無いわけじゃないけど…。1度越えちゃったら止められなくなっちゃう気がするんだ…!」

「いいよ、私は…♡グランとだったらエッチしたいもん♡だから、脱がしちゃうね…♡」

ベチツ♡♡

「へ…？」

「ジータ、その…。僕のは…普通じゃないと思うんだ…。だから、1度越えちゃったら僕はマズイ気がするんだよ…。」

(なにこれ…♡♡おちんちん…♡♡これが…？聞いてたのより絶対大きいし、太いし、血管浮き出てるし…♡♡)

「ペろっ…♡♡」

「ジ、ジータ！」

(舐めちゃった…♡♡私、無意識のうちに舐めちゃった♡初めてなのに分かる♡これ、雄の味だ♡)

「れろっ♡えろっ♡れろっ♡グランのおちんちん、硬くて熱い…♡私の手と舌で興奮してるんだ…♡れろっ♡れろっ♡えろっ♡」

「ジータ、まだ間に合う…やめてくれ…！これ以上されると抑えきれなくなる…！」

(おちんちん、まだ大きくなってる♡熱くて、硬くて…♡匂いも頭ボーっとしてくる…♡これ、メーテラさんが言ってたやつだ♡痛いおちんちはおちんちんじゃなくておちんぽだって♡女の子をダメにしちゃうおちんぽには深入りしちゃいけないって言ってたけど、そんなの無理…♡だってグランのだもん…♡)

「ちゅぱ♡ちゅ♡じゅぷ♡じゅぷ♡じゅぶ♡じゅ♡れろろ♡グランのおちんちん、ううん、おちんぽ凄いよ♡エッチな味して、つゆもどんどん出てきて、もっと舐めたくなる♡」

「ジータ、ジータあ…！」

「じゅううう♡♡じゅ♡じゅるるる♡じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅううう♡♡じゅぽ♡♡グランのおちんぽ膨らんできてるよ♡出そうなんだよね？」

(私、おちんぽしゃぶりながら濡れちゃってる♡パンツもうびちやびちや♡このおちんぽに処女捧げる準備しちやってる♡突っ込んで掻き回して欲しいって勝手におねだりしてる♡)

「らして♡グランの精液出して♡全部私にかけていいから出して♡んじゅうう♡♡じゅるる♡♡じゅぼ♡♡じゅぼ♡♡じゅぼ♡♡じゅぼ♡」

「ああああ、出る…！」

びゅるるる♡びゅる♡びゅるるるる♡♡

「んぶううう♡♡ぶはっ♡ふあっ、ああああ♡？熱いの、いっぱい♡？んふあああ♡？匂いも凄いい♡？♡？」

（私、イっちゃってる…!?!♡♡おちんぽにたくさん精液かけられてイっちゃってる♡ホントにダメだ♡おちんぽに処女が勝てるわけない♡）

イっているのがバレないように取り繕うっているつもりだが、恍惚として赤らめた顔とへこへこしている腰を見れば、誰にでも明らかだった。

「ジータあ!!」

「きや…!グ、グラン…?」

「ジータが悪いんだからな…!あれだけ止めたのに好き放題して、責任取ってもらおうぞ…!」

「待って、私さつきイ…。」

（ダメ、言えない♡おちんぽしやぶって精液かけられてイっちゃったばかりだからなんて言えない♡そんな変態だなんてグランに思われたくない♡）

「はあ、はあ…。挿れるからな…!今突き飛ばさなかつたらもう抑えないぞ…!」

（そんなの無理♡そんなことしたら今までしてきたことが全部無駄になっちゃう♡なんとか耐えなきゃ♡そうだ、処女は痛いんだから大丈夫、それはそれで辛いけど大丈夫…!）

ずぶううう♡♡

「はあああああ♡?♡?♡?あっ♡?はああああ♡?♡?」

（うそ♡イってる♡ちよつと痛いけど、そんなの関係無い♡これがおちんぽ♡グランのおちんぽ♡やっぱり処女が勝てるわけない♡挿れられた時点で負け♡一撃でおちんぽに支配されちゃった♡♡♡）

「ジータ、エロすぎ…!挿れただけで舌だして仰け反りながらイクとか…!」

「わらし、わらしい…♡?」

(バレてる♡おちんぽに即負けしちやってるのバレてる♡でもこんな隠せるわけない♡グランのおちんぽが強すぎるせいなの♡♡)

「動くからな…!ジータがイってもやめないから…!」

「らめ、まつ、はあああ♡?あっ♡?あぐっ♡?あはあっ♡?おちんぽダメ♡?初めてだから、優しく♡?んひあ♡?あああ♡?」

「そんなエロ声で言ったってやめるわけないだろ…!」

「はひいいん♡?ごわれる♡?ごわれちやうからあ♡?おちんぽでばぢゅん♡ばぢゅん♡ってされるたびに、おまんこがあ♡?ダメになつちやうのお♡?」

「どうダメになつちやうのき…!」

「おちんぽ受け入れて、好きになつちやうのお♡?勝手にきゆう♡ってなつて、グランのこともっと欲しくなる♡?1回でも多く犯して欲しくなつちやうよお♡?」

「元々襲ってきたのはジータだろ…!僕が襲ったみたいに言う悪い副団長はこのままお仕置きされて当然だからな…!」

(そうだった♡おちんぽその気にさせたの私だった♡おちんぽには手を出しちやいけないって知ってたのに♡グランは止めてくれたのに♡だからおちんぽで躡られちやっても私のせい♡おまんこ差し出して服従させられるのも仕方ないんだ♡)

「ごめんなさい♡?私が先に襲ったのにい♡?私のおまんこ使っていいから許してえ♡?悪い副団長のぐちゅぐちゅおまんこ好きなかげばんぽんしていいからあ♡?」

「そんなこと言つて、ジータがそうして欲しいだけだろ!ジータがこんなエロい幼馴染みだなんて思つてなかったよ!」

「ほおああああ♡?♡?♡?おちんぽ激しい♡?ホントにごわれる♡?はひっ♡?はっ♡?はああああ♡?わらし、もう、イってるうう♡?♡?おちんぽ大好きになつちやってるよお♡?♡?」

「僕よりチンポのほうが好きなわけ?」

「グランが一番だから♡?大好きなグランのおちんぽが強すぎるの♡?おちんぽ好きになつちやつたの♡?ダメなのに、グランの全部欲しいよお♡?♡?」

な人のおちんちんがおちんぽな分には最高だよ♡)

ずぷっ…♡

「ふえっ…っ…」

「言ったよね？1度越えたらまずいって。抑えられなくなるってさ。僕の彼女になるっていうならまだまだ付き合ってもらうよ…！」
どちゅっ♡どちゅう♡どちゅ♡どちゅっ♡

「はひいいい♡？？なん、で♡？もう、2回♡？出したのに♡？おちんぽ大きいままなの♡？硬い♡？おまんこもうダメなの♡？お精液いっぱいのおまんこ掻き回したらダメえ♡？あひいん♡？♡？」
(またイカされてる♡おちんぽでおかしくなる♡いま、奥当たった♡子宮♡もしかしてさつきよりも大きい♡そんなの無理♡子宮コンコンされたら開いちやう♡やっぱりおちんぽダメ♡絶対最後に直中出しされる♡想像しただけでおまんこきゆうきゆうしちやう♡)

「今絶対エロいこと考えてたでしょ…！急に締めちやってさ！言ってみなよ…！」

「子宮降りてきて♡？おちんぽでコンコンされて♡？自分から開いちやっった子宮に直接中出しされるの♡？おまんこだけじゃなくて子宮までいっばいにされるの♡？」

「するからな…！僕の彼女なんですよ！だったらいくらでも中出しするぞ…！」

「そんな、そんなあ♡？」

「この大きくなったおっぱいだって好きにするぞ！旅を始めてからどンドン大きくなってさ…！」

「あはあん♡？その触り方エツチだよお♡？グランに振り向いて欲しくて、自分で揉んだの♡？マジサさんに育乳教えてもらったりもしたの♡？」

(ダメ♡言っちゃいけないことどンドン喋っちゃってる♡グランに引かれちゃう♡でも気持ちいい♡秘密バラしちゃうたびにおちんぽ激しくなっす♡い♡)

「ジータ…！」

「ちゆう♡？ちゅ♡？ちゅぱ♡？これ、ファーストキス♡？ちゅぱ

「分かったあ♥？」
？」

第2話 元巫女アイドルディアンサのベッドステーション♡

「ジータさんと団長さんが付き合ってるって本当ですか!？」

「団長ちゃん、団長ちゃん! そうなの…?」

「ここは団長室。ジータと壮絶な夜を過ごした次の日、グランとジータは女性団員達に詰め寄られていた。

「いや、まあ、うん…。 そうなんだ。 み、皆には内緒にしてただけど…。」

「そうそう、でも、私がつい口を滑らせちゃって…ごめんね?」

それに対し、二人して事前に用意していた言い訳を並べて場を収めようとしていた。 グランとしても団が自分を元に分裂しそうだと言うジータの言葉に沿わざるを得ない。

「ふうん、なるほどねえ…。 ジータ、アンタ、やったでしょ。」

「メ、メーテラさん、それって…。」

「セックスよ、セックス! 昨日ズコバコしたんじゃないかって言ってるの。」

「なななな、ふ、不純です! 団内で性行為なんて! しかも、だ、団長さんと副団長さんが…!」

メーテラのオブラートゼロの発言にリーシャが取り乱す。 勿論、それ以外の団員達もざわついている。

「で、どうなの? どっちから誘ったわけ?」

「き、昨日は確かにしましたけど! 付き合っているんですからいいじゃないですか! ね、グラン!」

「あ、ああ…! そうだよ!」

「はくん? このアタシを誤魔化せると思ってるわけだ…。 昨日まで童貞と処女だったくせに。」

「そ、そんなこと…!」

「アタシには分かるってーの。 でもって男女が付き合ったらやるのは当たり前なんだから、逆に言えば浅い付き合いよねえ? ああ、そ

れともヤっちゃったから付き合うことにしたとか?」

「ち、違います!」

「あは☆いいのいいの。若いんだから。でもねえ、他の子に一切チャンスを与えないってのはズルだとお姉さんは思っちゃうのよねえ。」

(私にもまだ、チャンスが…)

別に読心術など一切覚えがなく、昨日まで好意を向けられていることに微塵も気づいていなかったグランにもその場の全員の考えが読めてしまっていた。

「ま、そーいう訳だから、後は好き勝手やればいいとお姉さんは思うなー☆団長奪い合いてきな? がんばって〜。」

言うだけ言って場を荒らして満足したのか、メーテラは一足先に手を振って団長室を出ていってしまふ。後に残されたのは異様な空気と憂い気なグランだった。

「それじゃあ、団長さんと副団長さんが付き合っているのは一旦保留ということですよね!」

「団長さんにアピールして誰が選ばれるか勝負ってことね。」

「ちよちよちよみんな!? ね!? だから私とグランは付き合ってるんだってば!」

「それはジータさんの言い分ですよね。」

「そもそも不純異性交遊は…!」

「リーシャは静かにしようね。」

暴れかけているリーシャを抑えながら団員達はぞろぞろと団長室を後にし、グランとジータだけが残される。

「で? ジータ。何か弁解は?」

「ありません…。」

「自制できなかった僕も悪いけどさ。いろいろと加速しちゃったわけだね、これは。」

「ごめんなさい!!」



「団長さん、今、いいですか？」

「ああ、どうぞ。」

休暇にしている今日、お昼過ぎは各々が自由に行動する中でディアンサがグランの部屋を訪ねてきていた。朝にあんなことがあったグランとしては、あの場にいた一人である彼女は警戒せざるを得ない。

「何かしていましたか？」

「いや、次の行き先を考えてたところだよ。最近暑くてみんなのパフォーマンスも落ちぎみだし、アウギユステに長期で休みに行くのもありかなって。」

「わあ、凄くいいですね。島の外に出て歌ったこと思い出しちやいます。」

「うん、そうだね。また歌ってみる？」

「ふふっ、そうですね。実は新しい歌を考えているんです。」

「へえ、聞いてみたいな。巫女としてじゃないってことだよね？」

「うん…。まだ出来上がってないけど、ちよつと聞いてもらってもいいかな？」

「もちろん。最初に聞けるなんて光栄だよ。」

ディアンサはベッドに腰掛けたグランの正面で胸に手を当てて立つと、息を吸い込む。

キミとー初めてー出会ったときからー
ずーつとーその背中をー見ていたよー

憧れのーキミの姿をー追ってたー
でも本当はーキミの隣でーその顔を見たいのー

キミがー見ている世界をー一緒に見たいのー

「いい、歌だね…。」

「これが私の団長さんへの、好きな人への気持ちです。今朝あんなことがあつてずっと考えていたんですけど、全然まとまらなくて。だから、想いだけでも伝えようって…。」

「ディアンサ…。」

（僕はバカだ。団の不和だとかそれっぽい理由をつけて、目の前の

勇気を出した女の子を見捨てるどころだった。僕の選択が団の秩序を守らないものだとしても、目の前の一人に手を伸ばさないことだけはしちやいけない。」

小さく震えているディアンサの手を取ってその身を引き寄せ、隣に座らせる。

「あつ…。」

「ディアンサ。その気持ちは、僕は凄く嬉しいよ。けど、今朝言っていたことは大体本当なんだ。だから…。」

「ううん、私は団長さんのことが好き。だから、諦めません。団長さんが嫌じゃなければ、私に触れてほしいです。」

「けど、僕は…。ディアンサが傷つくようなことはしたくないんだ。後悔してほしくないんだよ。」

「私は後悔しません。団長さんはこれからいろんな子とエッチなことをすると思います。そのとき、私だけしていなかったら、その方がきつと後悔してもしきれないです。だから、私とエッチなこと、してください。」

「ディアンサ…。分かったよ。でも、嫌になったら言うんだよ。」

「はい…。ちゆ…んちゆ…：初めてのキス、あげちやいました。」

「元巫女アイドルとキスできるなんて嬉しいよ。」

「私も、団長さんとのキス、嬉しいです。」

(団長さんとキス♡ずっとしたかった♡今ならいくらでもできるんだ♡今なら団長さんを独り占め♡)

「ちゆ♡ちゆ♡んちゆ♡はあつ♡キス、ふわふわしちやいますね♡

ちゆう♡ちゆ♡んふっ♡ちゆ♡…あつ♡」

「嫌だった?」

「ううん、ちよつとビックリしただけで…胸、どうせなら直接触ってください♡」

「うん、おっぱいほぐしちやうね。」

(団長さんにキスしながら服のボタン外されてる♡見られちやうんだ、私の胸…おっぱい…♡あつ、ブラジャーずらされて…見られちやった♡)

「ディアンサのおっぱい、すごくキレイだよ。乳首もピンク色かわいい。」

「そ、そんなにじつくり見ないで…んちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡キスで誤魔化すのずるいです…♡」

(おっぱい褒められちゃった♡アイドルのとき手入れてて良かった♡あつ♡おっぱい触られてる♡キスしながら揉まれるのぼーっとする♡)

「団長さん♡団長さん♡ちゅう♡ちゆる♡んあつ♡んちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡んはあ♡」

「ディアンサはキス好き?」

「うん♡凄い幸せ♡ずつとしていたい♡んちゅう♡ちゅぶ♡ちゆる♡ちゅ♡おっぱいももつと触って♡んはあつ♡」

(体熱い…♡あそこ濡れてきちやつてる♡じゃあ、団長さんのも…やっぱり大きくなって♡触っていいのかな…でも、団長さんだつてまだあそこは触ってないし…。)

「ディアンサ、どこ見てるの?」

「あ、これはその…♡さ、触ってもいいのかなつて…♡」

(わ、私なに言っちゃつてるんだろ♡自分から触りたいなんて…♡)

「いいよ、チンポすきに触って。僕だつておっぱい触つてるしね。力入れすぎちゃだめだよ。」

「チン…!?!じゃ、じゃあ、脱がすね…♡んしよ…と…うわ、大きい♡おちんちんつてこんなに大きいんだ…♡」

「いや、僕のはかなり大きいんだ。普通はこのぐらい…らしいよ。」
「え、そうなの? 団長さんはこんなところまで凄いんだ…♡」

(団長さんのおちんちん熱い…♡これが入るんだよね…♡それにこの匂い…♡クラクラする…♡あ、なんか透明なの出てきた♡精液…じゃないよね? 舐めてみても…♡つてなに考えてるの私♡)

「そんな顔近づけて、ディアンサつて結構エッチなんだね。興味津々つて感じ?」

「ふえ!?ち、違うよ♡初めて見たからつい…♡、この透明なのつて精液じゃないよね!」

「それは我慢汁とかカウパーっていうんだよ。滑らかにするために出るんだ。興味あるなら舐めてもいいよ。」

「な、舐めても…♡ペろっ、れろっ…♡そんなに味しないんだね。これなら、口でできるかも…♡」

（っ♡♡舐めたらあそきゅん♡ってしちゃった♡団長さんのおちんちに触れてると凄い興奮しちゃう♡公演前より心臓バクバクしてる♡）

「ああ、待って。ディアンサとはもつとキスしたいからさ…。その、嫌じゃなかったらおっぱいでしてほしいかな。」

「お、おっぱいで…♡パイズリ…だよね♡」

「へえ、パイズリは知ってるんだ。」

「ハリエが前に言ってたの、おっぱいあるからやってみたって…♡」

「巫女アイドルってエッチなんだね。」

「も、団長さんさつきからちよつといじわるです♡あんまりするとパイズリしないですから♡」

「ごめんごめん、つい。ほら、服脱いで。」

（服脱いじやった♡下はまだ穿いてるからなんか変態っぽい♡団長さんのおちんちん大きいけど挟めるかな…♡）

「んっ…♡団長さんのおちんちんがおっぱいから出てる…♡おっぱい結構自信あったんだけど、全然収まらないね♡」

「そのまま押し付ける感じでやってみて。」

「うん…♡んっ♡ふっ♡んっ♡んうっ♡ふう♡ふくっ♡どうかなくて。」

「ああ、気持ちいいよディアンサ…！そのままいろいろやってみて。」

「んっ♡んっ♡んくっ♡ふうっ♡ふっ♡んふっ♡そうだ、こうやって…くちゅ、くちゅ…♡あー♡唾液使うといいらしいってハリエが言ってたんだよね♡」

ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちゅ♡ぬぶっ♡ぬちゅ♡ぴちや♡

（すごいエッチな音♡カウパーだっけ、たくさん出てきて私の唾液

と混ぜてる♡もつと混ぜるようになったら気持ちいいのかな♡両方一緒に動かすだけじゃなくて、バラバラとか、前とか、ぎゅーつてしてみたり♡あつ、おちんちんビクビクしてる♡これ、いいんだ♡)

「ディアンサ、すっぐ…！やらしい顔してるよ…！」

「うん♡だっておちんちんこんなに気持ちよさそうにしてるんだもん♡ほら、こういうのもどうかかな♡」

「そんな両側から…！くう、もう出そうだよ…！」

「いいよ、出して♡団長さんの精液、私のおっぱいに出して♡全部かけていいから♡おっぱいに水溜まり作っていいから♡出して♡出して♡」

びゅぶるるる♡びゅびゅ♡どぶぶ♡どびゅ♡びゅぶ♡びゅぶ♡

「ふあああ♡あつ、ああ♡精液あつつい…♡おっぱいでおちんちんの先っぽ抑えたのに顔まで跳ねてきてる♡こんなにいっぱい…水溜まりどころじゃないね♡」

(射精ってこんなにすごい…♡匂い濃くて、あそこきゅんきゅんしちやってる♡イキそうになっちゃった♡もう下着ぐしよぐしよ♡おっぱいもおちんちんもべちゃべちゃ♡)

「すごく良かったよ、ディアンサ。次はシちやうけど…大丈夫？」

「はい…♡団長さんのおちんちん、挿れてください♡もう、十分濡れちゃってますから♡ほら…♡ところどころになっちゃってます♡」

(スカートとパンツ脱いで、あそこのエッチな液、指につけて見せちゃった♡自分で仰向けになってどこも隠さないの恥ずかしい♡ああ、団長さんのおちんちん…♡私のあそこ大丈夫かな…♡)

「挿れるよ…！」

「はい♡きてください…♡」

ずぶ…♡ずぶぶぶぶ…♡

「あぐっ…ああああ♡ふあ、ああああ♡？おちんちん、奥までえ♡」

(痛かったけど、イってる♡団長さんのおちんちん挿れられただけで私イっちゃってる♡顔緩んでイってるのバレちゃう♡団長さんいじわるな顔してる♡これ絶対バレちゃうってる♡)

「痛かったよね、大丈夫?」

「ふあ、あ、はい…♡痛かったですけど、もう大丈夫ですから…♡」
「ちゃんとイけるように頑張るから。」

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぱちゅ♡ぐちゅ♡ぱちゅん♡ぱちゅん♡

(バレてない…♡けど、これすごい♡おちんちんすごい♡おちんちんくるたびに蕩ける♡溶かされちゃう♡キスもいい♡あ、またイっちゃった♡気持ちいいところたくさん擦れて突かれて頭ふわふわする♡)

「はひっ♡?はっ♡?ふああ♡?あん♡?ああん♡?団長さんのおちんちん気持ちいい♡?はああん♡?」

「ディアンサ、さつきから甘イキしてるでしょ。」

「ふあ♡?してない♡?してないです♡?はあああ♡?」

「ときどき強く締まるから分かつちゃうんだよね。挿れたときもさ。でも安心して。僕がさつき言った“ちゃんと”っていうのはもつとすごいやつだから。」

「ふあああ♡?あああ♡?そんなあ♡?もつとすごい…♡?もう、十分気持ちいいの♡?んはああ♡?」

(やつぱりバレてた♡♡おちんちんでぐちゅ♡ぐちゅ♡ってされるの気持ちよすぎる♡ちゃんとイクってなに♡今だって1人でシたときより全然気持ちいいの♡やつぱり射精かな♡おっぱいに出されたときすごかったもん♡あれを中で…♡♡はあああ♡)

「イイ顔になってるよ。何されるか分かつちやった?」

「うん♡?中を出すんだよね♡?さつきみたいにびゅゅ♡♡って♡団長さんの精液欲しい♡?元巫女アイドルの中にいっぱいください♡?」

「ディアンサの膣内に出すよ…!中出しするからね…!」

「はい♡?はい♡?団長さんの全部ください♡?ぜんちゅ♡?ちゅぶ♡?んちゅ♡?ちゅう♡?ちゅず♡?ちゅる♡?」

(おちんちんで突かれながらキス♡キスしながら中に♡中出し♡エッチな言い方♡興奮しちゃう♡キスもいやらしい感じ♡絶対イっちゃう♡っていかもうイってる♡いつの間にか団長さんに抱きつ

♥? 団長さん好き♥? 好き♥?」

「そんな顔真つ赤でさあ…! 男をそんな風に誘ったらどうなるか教えてあげるよ!」

「んやああ♥? はああ♥? だって、だってえ♥? 団長さんが言えつてえ♥? 団長さんともつと繋がっていたいからあ♥? おちんちんでいっばい愛してほしいからあ♥?」

「それに未だにおちんちんなんて恥ずかしがってるのも可愛いけどさ。ディアンサが今欲しいのはチンポでしょ!」

「ああああん♥? ♥? や、あああ♥? チンポ♥? チンポなんて言いかたエッチすぎるんだもん♥? アイドルが使っている言葉じゃない♥? ♥? んやああん♥?」

「チンポぐらい大したことないよ! こんなエッチな音出しといて、もうアイドルなんて関係無いって!」

ぐちゅん♥ぱちゅん♥ぱちゅん♥ぱじゅん♥ぱじゅ♥じゅぶ♥ぐちゅ♥

(こんなエッチな音してたの♥全然気づいてなかった♥チンポって普通なのかな♥団長さんが嘘ついたことなんて無いし、いいんだよね♥チンポ♥チンポ♥エッチな響き♥あそこ熱くなっちゃう♥)

「チンポ気持ちいい♥? 気持ちいいの♥? あそこぐちやぐちやつてされるの気持ちいい♥? イク♥? イっちゃう♥? ああああー♥? ♥? や、ダメ、チンポ動いちゃああ♥? ♥?」

「そう言われてやめる男はいないって!」

「やあああ♥? あ♥? あああん♥? ♥? なんかきちやう♥? きちやうよお♥? んああああ♥? ♥? ♥?」

ぷしゅ♥ぷしゅ♥

(なにこれ♥♥イキすぎてわからない♥♥チンポ好きになっちゃう♥私が好きなのは団長さんで♥チンポも団長さんで♥なんだ、じゃあ団長さんのこともつと好きになっただけだよ♥チンポ好き♥団長さん好き♥もつと好きになりたい♥)

「初セックスで潮吹きちゃうなんてディアンサ素質あるよ! 天然のエロアイドルじゃん!」

第3話 バカンス中にヘルエス様の強制搾精セツクス♡

「ヒヤッホウ！海だー！！」

「走って転ばないでよ、ジータ。」

「えっへへー、分かってるって！」

「団長さん、この水着どうですか？」

「お、ディアンサ新しい水着買ったんだ。似合ってるよ。」

「ふふっ、よかった。みんなのところに急ぎましょう！」

団員達とビーチへ急ぎ、それぞれ泳いだりビーチバレーをしたりと休暇を楽しむ。シエロカルテに無理を言ってアウギユステのビーチの一面を貸し切りにしてもらった甲斐があつた。

「1つ貸しですよ〜って言われたから後が怖いけど…。なんだかなだ報酬はくれるし、仕事取り付けたと思えば一石二鳥かな。」

「団長殿。少しよろしいですか？」

「あ、ヘルエスさん。どうかしましたか？」

「以前こちらで解決したンナギの事件について、商工会の方が再度お礼も兼ねてお昼頃にお話したいとのことですよ。」

「分かりました。ジータとリーシャあたりも呼んでおいたほうがいいかな…。」

「いえ、わたくしに直接お声掛けされてきたので、おそらくアイルストとの商取引のお話かと。団長殿だけ来ていただければ十分に思います。それに皆さんには休暇を満喫してほしいですから。」

「そうですね。それじゃあ、お昼前に商工会の方に直接向かいませう。」

「はい。よろしくお願いたします。」

アイルストの王女であるヘルエスも今日は水着で過ごしつつも立ち振舞いの高貴さは損なわれておらず、美しい体も相まってグランは顔に目線を固定するのに意識を割かざるを得ない。

（団長が胸とか見てたらダメだし…。特に今はそういう目で見たら

ヤバイ気しかしない。」

「ほら、はーやーくー！次はビーチフラッグやろうよー！」

「分かった分かった、今いくよ。」

こうして何の気兼ねもなく過ごせる時は騎空士にはなかなかない。そのためか目一杯楽しもうとする団員達に引つ張り回されるのは団長の定めである。



「お疲れ様です、ヘルエスさん。」

「おや、団長殿も丁度いらしたところですか。商工会の方は…あちらですね。」

「おお、団長さんにヘルエス様！以前はどうもお世話になりました！さ、こちらへ。いやー、今年は暑いですな！」

「アウギユステはかなり賑わっているみたいですね。」

「ええ、日差しは強いですが海で泳いでアイスにスイカにンナギの蒲焼き！日焼けして一夏の想い出作りついで連日大賑わいですよー！」

「皆さん楽しそうで何よりです。それで、お話というのは何でしょうか。」

「それじゃあ早速本題に。うちで作ってる新商品…名付けて”どこでもンナギの蒲焼き”をアイルスト王国とお取引できないかと思いついて。」

そう言つて商工会の男がそれらしき物を2つ取り出す。

「これは特殊な方法で凍らせてありますね。ここを捻ると…温まって…はい！ンナギの蒲焼きの出来上がりつてわけです。」

「見事なものですね。しかし魚は鮮度が命です。これはその点でも問題無いのでしょうか。」

「ご自身の舌でお確かめください！ささ、団長さんもー！」

「はい、それじゃあいただきます。…美味しい！本当にンナギの蒲焼きですね！」

「確かに、間違いなくンナギの蒲焼きですね。ンナギの質も良い。すぐに食べられるのも便利で扱いやすいのも素晴らしいですね。」

「ありがとうございます！」

「お、冷た……！」

「なるほど、温める機能は改善が必要そうですね。しかし大きな問題ではないでしょう。わたくしとしては紹介に値するものとお見受けしました。一筆書きますので、手紙をお出してください。あとはアイルストの専門の商人がお相手するでしょう。」

「あ、ありがとうございます!!早速みんなに相談してきます!あ、ンナギは是非食べてみてください!後で片付けておきますので!」

商工会の男は嬉しそうに奥へと引っ込んでしまい、グランはヘルエスと2人でンナギを食べるだけになった。

(あつ、ご飯粒が口元に……言ったほうがいいかな?)

「おや、わたくしに何か……?ふふつ、またご飯粒をつけてしまいました。皇族がこれではいけませんね。あら……?」

「あ、僕が拾いますよ……よいしょ……つと。」

ヘルエスが笑った拍子に緩んでいたらしい髪飾りがグランの足元に落ちてしまう。体を下げそれを拾って、軽くはたいて埃を落とし、椅子に座り直すとヘルエスが微笑んでいた。

「相変わらず優しいですね。ありがとうございます。」

「いえ、僕が近かったからです。ンナギ冷める前に食べちゃいましよう。」

「そうですね。蒲焼きは熱いうちに食べるのが良いですから。」

旨味の溢れるご馳走に舌鼓を打ちながら、あつという間に食べ終わってしまいます。

「ご馳走様でした。美味でしたね。」

「はい。ふあ……あ。ちよつと遊び過ぎたかな……食べたなら眠くなつてきちゃって。」

「ふふつ、男の子ですね。暑いですから途中で倒れたら危ないですし、部屋まで送りましょう。」

「ふあ……いや、大丈夫ですよ。少し休めば平気です。」

「夏場は油断禁物ですよ。いくら団長殿でもこれは譲れません。それに、付き合っていただいたせめてものお礼です。」

「そうですね…ふぁ…確かにちよつとやばそうです。なんかすみません。」

「いえ、いいですよ。さあ、参りましょう。」

眠い頭を振り払い、ヘルエスと共に割り当てられている部屋へと向かう。

「団長殿の部屋はこちらのようですね。窓に氷水を置いておくと、寝苦しく不是吗。」

「ありがとうございます。2、3時間寝たら大丈夫だと思うので、みんなにはそう言っておいて貰えると助かります。」

「ええ。それではわたくしはこれで。戸締まりはしておいてくださいね。」

「それじゃあ、おやすみなさい…ふぁ…。」

(鍵は閉めたし、寝よう…。あれぐらい遊んだだけで眠くなるなんて鍛練が足りてないな…。休み中もちゃんと…たん…れん…。)



ぴちや…ぴちや…

(ん…何の音だ…)

ちゅぽ…ちゅぽ…

「んん…」

「おや、ようやく起きましたね。」

「へ、ヘルエスさん!?何してるんですか!…って、なんだこれ!」

「何って夜這いですよ♡まだ昼間ですが♡団長殿は縛らせてもらいました♡」

「夜這い!?部屋の鍵は!」

「そのぐらい戸を閉めるときに紐で細工しておけばどうということはありません。送り狼には気を付けよと習いませんでしたか?」

「いや、おかしいですって!」

(ヘルエスさんはあの場にいなかったから油断してた…！っていうか一国の王女がこんな…！やばいつて！)

「わたくしも大人の女ですから、殿方を悦ばせる方法の1つや2つ心得ています♡こうして…ちゅぱ♡れろっ♡まずは大きくして差し上げます♡」

「うあぁっ！ちよ、洒落にならないですよ！」

「冗談でこのようなことは致しません♡ここまでして拒絶されてしまったら女の恥ですから、お優しい団長殿は断つたりしませんよね？」

「うっ…」

「ちゅぽ♡ちゅぱ♡ちゅぶ♡れろっ♡まさか団長殿がこのようなイチモツをお持ちとは、流石はわたくしの見込んだ殿方♡コレですセックスは格別でしょうね♡」

「うあぁっそれやば…！」

「さて、イチモツでは呼びにくいですし、どう呼んだものでしょうか…。やはり、オチンポでしょうか♡わたくしのような女から言われるのは興奮するでしょう♡ビクンってしましたよ♡」

(やばい、やられっぱなしだ…！けど、拘束されてたら抵抗できない…！)

「こういうものも用意してあるんですよ…♡とろーっ♡とわたくしの胸とオチンポに掛けて…♡いかがです♡ぬるぬるパイズリは♡まあ、聞かなくてもこれだけオチンポが反応しているは分かるというもの♡」

ぬちゅ♡ちゅぶ♡ぬちや♡ぬぷっ♡びちや♡ぐちゅ♡

(ふふふ…♡このまま骨抜きにして差し上げます♡ああ、この暑さで蒸れて匂いが♡オマンコに響く♡塞がなくては♡わたくしの胸に収まらない♡なら、これしか♡)

「ぢゅぶ♡ちゅぶ♡ぢゅぼ♡ぢゅぶぶぶ♡ぢゅぼ♡ぢゅば♡ふふっ、わたくしのパイズリフェラはお気に召しましたか♡次はこの口の中で♡舌を♡絡ませてあげます♡じゅぼ♡じゅろ♡じゅずう♡じゅろろ♡ぢゅうう♡♡」

「うあああつ…！もう、やばい…！」

(オチンポの匂い♡口から鼻に抜けてきてしまっています♡何とか
主導権だけはこちらのままにしておかなければ♡)

「ぢゅぽん♡団長殿、気持ちいいですか♡」

「それはあ…！」

「正直に答えないと射精させてあげませんよ♡」

「なっ…!?!」

「この胸と口の中で射精したくありませんか♡今なら”気持ちいい
です、射精させてください”と言えば最後までしてあげますよ♡さあ
♡」

「くうあ…そ、それは…。」

ぬじゅん♡

「うああー！」

「ダメですね♡すぐに答えないと厳しくしてしまいますよ♡”おっ
ぱいと口で射精させてください”と言いなさい♡ほら

♡ほら♡」

「くあ、ああ…！」

「強情ですね…♡これが最後です♡答えられなかったら射精できな
いまま終わりです♡夕食時まで5分置きに触ってイケないまま弄ん
でしまいますよ♡あと4時間はあります♡さあ♡”ヘルエス様、どう
か射精させてください”と言いなさい♡」

「くうう…！へ、ヘルエス様、お願いします…！」

「ダメですよ♡一字一句間違えてはいけません♡さあ♡次がラスト
チャンスです♡」

「ヘルエス様、どうか射精させてください!!」

「良くできました♡ご褒美にわたくしのパイズリフェラでイカせて
差し上げます♡ねっとり舌を絡ませて♡胸でぐちよぐちよさせて♡
極上の射精にして差し上げます♡」

(どうです団長殿♡大人の女性の魅力は♡わたくし無しでは生きら
れないようにして差し上げます♡これで射精させてしまえば…♡)

ぐじゅ♡ぬぢゅ♡ぬぶっ♡ぬぢゅ♡ぬぢゃ♡ぐじゅん♡

「ぢゅぽ♡ぢゅぶ♡ぢゅる♡ぢゅぶ♡ぢゅる♡ぢゅぽん♡ん
じゅ♡じゅじゅ♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡ぢゅう♡う♡♡」

「うあああ…！出る…！」
びゅぶぶぶぶ♡びゅく♡びゅく♡びゅる♡びゅぶ♡びゅう
う♡♡

「んるる♡♡ぎゅ♡んうう♡♡ぎゅ♡んぶっ♡ぶはっ♡
あああ♡こんなに♡飲みきれません♡んふああ♡？ああ♡？
まったく、とんでもないオチンポですね♡？出しすぎですよ♡？」

「はあ…はあ…搾り取られた…。」

（まさか口に出されてイってしまうなんて♡匂いも味も強烈でオマ
ンコが疼いてしまっています♡これだけ濃いのがたくさん♡オマン
コに出されていたら…♡♡いけない♡こんな想像をしていてはオ
マンコの疼きが止まりません♡しかし一回出させてしまえばこれほ
どではないでしょう♡）

「惚けている場合ではないですよ♡さあ、今度はオマンコの番です
♡オチンポとオマンコが繋がって初めてセックスなのですから♡こ
の大事な新品のオマンコで搾り取ってしまいますよ♡」

「はあ、はあ…流星にそれはまずいですよ…！王女がこんなただの
騎空士とセックスするなんて…。」

「何を言っているのですか。全空で一目置かれている騎空団の団長
は立派な魅力ある男性です♡わたくしの知るどの皇族よりも…♡そ
れに、王女である前にわたくしも一人の女です♡想いを寄せる殿方に
処女を捧げたいと思うのは当然でしょう♡」

「ヘルエスさん…！」
「もつとも、こんなにオチンポを硬くしては制止をしても説得
力が皆無というものです♡おとなしくわたくしとセックスしなさい
♡」

（ああ、入る♡団長殿の逞しいオチンポが♡わたくしのオマンコの
中に♡…っ♡♡オチンポが入口に当たっただけでピリツと♡♡し
かし恐れることはありません♡ただ腰を降ろすだけでいいのです♡
ゆっくり…♡ゆっくり…♡）

「んあああああ♡?♡?♡?ふうあ♡?♡?んおあああああ♡?
♡?♡?♡?♡?お、ほおおお♡?♡?♡?♡?」

(少し入っただけでイって足の力が抜けて♡♡オチンポ奥まで♡♡
処女オマンコがすぐにイキオマンコにされてしまいました♡♡動い
たらまたイってしまいそう♡顔が緩んで♡イク♡団長殿にはしたな
い顔を見られています♡)

「ヘルエスさん、もしかして…。」

「ふ、ふふっ、ええそうです♡?オチンポが入っただけでイってしま
いました♡?今からこのオマンコが貴方のオチンポの形になるので
す♡?よく噛み締めてくださいね♡?」

「ぐくっ…。」

「あっ♡?ああっ♡?はっ♡?これが、セックス♡?んっ♡?オチ
ンポが突き刺さって、気持ちいいですね♡?いやらしい音がしていま
す♡?聞こえますか?オチンポがオマンコにぶつかると音が♡?」

ばちゅん♡ばちゅん♡ばちゅ♡びちや♡ばちゅ♡ばちゅん♡

「あああん♡?♡?ああああ♡?わたくしのオマンコ、またイって
しまいました♡?イキオマンコはよく締まって気持ちいいでしょう
♡?」

「お願いです、ヘルエスさん!もうこれ以上は…!」

「止めませんよ♡?中で射精するまで終わらせません♡?上下だけ
でなく、こうして前後にも…♡?あああ♡?これもいいですね♡?」

(そもそももう止まれません♡オチンポに中出しされるまで止まれ
なさそうです♡上下は刺激が強すぎますから、前後で誤魔化せばイキ
すぎないで済みそうです♡ああ♡団長殿の気持ちよさそうな顔♡必
死に我慢しようとしても、わたくしがもつとしたくなるだけですよ
♡)

「さあ団長殿♡?今一度“ヘルエス様、中を出させてください”と言
いなさい♡?このイキオマンコに中出し種付け♡?したいでしょう
♡?中に出せばわたくしは貴方のもの♡?貴方もわたくしのもので
す♡?さあ♡?」

「へっへっへっ…!」

「はひっ♡？はっ♡？はああ♡？そんな、まだ硬いなんて♡？」
（オチンポ抜かなければ♡♡これ以上はいけません♡ああっ♡力が
入らない♡まだ中出しでイカされた余韻が♡♡まさかこれを狙って
♡なんとかしなければ♡♡）」

「ヘルエスさん、ちゃんと動きたいのでこれ外してくださいよ…！」
「い、いまは出来ません…♡？オチンポを抜いてからああん♡？♡
？ふあああ♡？♡？！」

「もつと気持ちよくなりたくないですか？今外してくれば本気で
セックスしますよ！約束します。」

「ほ、本気のセックス…♡？ダメです♡？今日はこれでおしまいで
す♡？団長殿も3回は大変でしょう♡？」

「3回ぐらい平気ですよ。ヘルエスさんこそ2回で終わりなんです
か？残念だなあ…！」

（こんなオチンポに何回も射精されていたら身が持ちません♡はや
く抜かないと♡でも、オマンコ突き上げられて♡イってしまっていて
は動けない♡子宮降りてきてしまっています♡）

「本当に終わっていいんですか？涎垂らして欲しがってるのに。突
き上げるたびに嬉しそうな顔してますよ。」

「わたくしは、そのようなこととおお♡？♡？じゆる♡？これは、振動
で口が開いただけですからあ♡？♡？」

「本気セックスしたくないんですか？ヘルエスさんがイっても止め
ずに中出しするまでノンストップですよ。」

（そんなことを言われてはオマンコと子宮が反応してしまいます♡
♡ああ♡想像してしまう♡あれを外せば…♡これを…♡な、何をして
いるのですヘルエス♡それだけはしてはいけない♡）

「ほら、外しましょうよ。もうこの紐しか見てないじゃないですか。
あとちよつとで本気の中出しセックスですよ。」

「ああ…♡本気の中出しセックス…♡これを外せば…♡本気の…♡
団長殿の本気…♡！」

（ヘルエス、手を伸ばしてはいけません♡その紐を外しては行けま
せん♡ああ♡ああ♡それ以上ほどいては…♡♡）

(わたくしと同じことを♡♡ 言えば終わってしまう♡ わたくしの立場が♡でも、言えばこのイキ狂いそうなのも終わる♡ 終わらせたい♡ わたくしがまだわたくしのままのうちに♡ 言ってしまった♡)♡

「ただ言うだけなのに全然ダメじゃないですか。じゃあ次はオチンポ大好きな卑しい雌エルーンのオマンコにたつぷり精液注いでください」で。ほら、さつきより簡単ですよ！」

「オチンポ大好きなああ♡? 卑しい雌エルーンのオマンコにいい♡? たくさん精液注いでください♡?♡? 言いました、言いましたよ 団長殿おお♡?♡?」

「たくさんじゃなくてたつぷりですよ! 一字一句間違えちゃダメって言ったのはヘルエスさんじゃないですか!」

「そんな、そう聞こえてたんですうう♡?♡? ああああ♡?♡? もう許して♡? 許してください♡?♡?」

「しょうがないですね、ほ…ら!」

「あひいいいん♡?♡?♡?」

(子宮の入口にオチンポが♡♡ グリつてきてます♡ ああつ、でも止まってる♡ 腿押さえつけられて♡ 固定されてしまっています♡ 動けません♡ こんな生殺し♡)

「これで落ち着いて言えますよね? 長いからよく聞いてくださいね…:—————です。アドリブ追加もオツケーで。言えたらご褒美の時間ですよ。」

「はあ♡? はああ♡? 団長殿を縛って無理矢理中出しセックスしたアイルスト王女ヘルエスのお♡? ぐちよぐちよオマンコの奥の子宮までこじ開けてえ♡? 子宮に直中出しでオチンポにメロメロの雌エルーンにしてくださいませ♡?♡?」

「よく言えました…!!」

ばつちゅん♡♡ ずつちゅ♡ ずつちゅ♡ ばちゅん♡ ばつちゅ♡ ぐつちゅ♡ ばつちゅ♡

「おほおほおほ♡?♡?♡?♡? オチンポおぐまでええ♡?♡?♡? 子宮に何度もぎてます♡?♡?♡? イグ♡?♡? ごれイグ♡?♡? んおほおほ♡?♡?」

第4話 ナルメアお姉さんとミルク搾り♡

「ナルメアさーん、いますかー?…うーん、いるはずなんだけど…。」

アウギユステで連日バカンスを満喫している中、2日前にナルメアが現地の割り当てられた部屋ではなく、グランサイファーに戻っていき、その後姿を見ていないという話を聞いてグランは探しにきていた。「日光は美少女の天敵なんだぞ☆」と言っていたカリオスト口の証言によれば部屋に慌てて入っていくのは見たらしい。

「別のところかな…お昼だし厨房に行ってみよう。」

果たして厨房に行くと、美味しそうな匂いが漂っている。

「あ、ナルメアさん!ここにいたんですね。みんな心配してましたよ。」

「だ、団長ちゃん!?ごめんなさい、お姉さんちよつと体調悪くてね!本当はみんなのお世話したいんだけど、迷惑かけちゃうから!」

「あ、ナルメアさん…!」

それだけ言うとナルメアは顔もろくに合わせずに出ていってしまふ。

(うーん、いつもは自分の事なんて省みずにお世話しようとしちゃうぐらいなのにな…。管理できるようになったならいいけど、本当に体調不良ならかなりやばいのかも。)

団長として団員の状態は把握しておく必要がある。何かあつては自分の責任なのだとグランは思っているし、元気の無いナルメアは見ていると辛くなってしまう。

(多分部屋だよな…。)

「ナルメアさん、大丈夫ですか?」

「団長ちゃん!?!お姉さんは大丈夫だから、みんなと遊んできていいんだよ?」

「ナルメアさんが心配なんですよ。いつも通りじゃないっていうか…。」

「あう…ごめんなさい。」

「部屋、入ってもいいですか?」

「団長ちゃんは今1人?」

「はい。」

「じゃあ、入っていいよ…。」

部屋に入ると甘ったるい匂いが少し漂い、両腕で体を抱き締めているナルメアがちよこんとベッドに座っていた。

「それで、どうしたんですか?」

「あのね、団長ちゃん…その、お姉さんのこと嫌いにならないでほしいんだけど…聞いてくれる?」

「もちろんですよ。」

「その、おっぱいが…こんなことになっちゃったの…。」

腕がどけられると、大きな双球の乳首があると思われるあたりから白っぽい染みができていた。

「え…これ、もしかして、母乳…ですか!」

「おかしいよね!?赤ちゃん出来てないんだよ!?だって、お姉さん誰ともエッチなことしてないもん!信じてくれるよね!」

「もちろんですよ!そんなに慌てなくても信じてますから!」

「お姉さんどうすればいいのかわからなくて…。母乳全然止まらなくて、気づいたら服まで染みちやうからお外出れないの。」

「うーん、困りましたね…。ドクターとして見ても原因分からないですし…。クリアハーブは使いました?」

「うん、使ったけどダメだったの。お姉さんこれからどうしよう…。これじゃお世話しようとしても迷惑かけちゃう…。」

(思ったより厄介だぞ…。早く解決しないと支障が出かねない…。あとエロくて目の保養…じゃなくて毒だ。)

「そうだ、カリオストロに相談してみませんか?船にいますし、口は固いから秘密にしてくれますよ。僕よりこういう知識ありますし。」

「カリオストロちゃんに…?でも、団長ちゃん以外に…。」

「このまま治らないままだと、それこそみんなに見られちゃいますから、ね?」

「うん、そうだよね…。分かった!お姉さん、カリオストロちゃんに

相談してみる！」

「あん？俺様に相談？」

「相談するのは僕じゃなくてナルメアさんだけだね。」

「ふうん…。ま、一段落したところだからいいけどよ。でも、錬金術師は暇じゃないんだぞ☆」

「あ、あのね、カリオストロちゃん…！おっぱいがね、こうなっちゃったの…！」

「あーこれか…。」

「え、もう分かったのか!？」

「昨日まで調査に行ってたからな。南東の離れ島のほうに近づいたか？」

「ええと、多分…流されちゃった子を助けに泳いだと思う。」

「あの辺りで特殊なクラゲが発生してな。女性が刺されると今みたいに母乳が出るようになっちまうんだ。」

「なんだそのクラゲ…。」

「どっかの馬鹿が作り出したみたいなんだよ…つたくいい迷惑だぜ。とつちめてやったけどな。幸い、被害者はそんなに多くない。治し方は分かっているから安心しろ。」

「どうすればいいの!？お姉さん治らないとみんなのお世話できないの！」

「そう慌てんなって。…ふむふむ、こういう状態か…。」

「僕にぐらい報告してくれてもよかったのに。」

「分かってねえな…。んなこととして聞いているやつがいたら被害者が増えるだろうが。…よし、他のやつと同じだ。母乳を目一杯搾ればそのうち治る。」

「よかったあ…ありがとね、カリオストロちゃん！」

「後は頑張ってね☆ナルメアお姉ちゃん☆…あー行っちゃった。グランのやつも大変だな。軽くリットルは搾らないといけないんだ

が、搾り搾られてるか？俺様のパーフェクト美少女ボディが刺されなくてよかったぜ。」



「ほ、本当にいいんですか…?」

「うん…お姉さんのおっぱい、団長ちゃんに搾ってほしいな…♡お風呂ならいくら搾っても大丈夫だから、一杯、ね?」

「ごくつ…それじゃあ、腕どけて…。ナルメアさんのおっぱいすごい大きくて綺麗ですね…。」

「お世辞でも嬉しいな♡ほ、ほら、早く搾って、ね?見られてるだけじゃ恥ずかしいから♡」

「はい…!し、失礼します…!」

「んっ…♡」

(団長ちゃんに後ろからおっぱい搾られちゃってる♡私が団長ちゃんにお世話されちゃってる♡母乳とろろ♡って出てきちゃう♡)

「ナルメアさん、搾るのってこういう感じで良さそうですか?」

「うん…♡出やすくなってる気がするよ♡団長ちゃん上手♡」

(おっぱいの下から少しずつ力入れられて…♡先の方まで両手でぎゅーってされてる♡ちよつと感じちゃうかも…♡治療だけど、触られてるからしょうがないよね♡)

「団長ちゃん♡団長ちゃん♡その…:」

「どうかしましたか?」

「おっぱいの先つぽ…♡乳首まで触って搾ってほしいな…♡そのほうがもつと出ると思うの♡」

「わ、わかりました…!」

「ぴしゃ♡ぴしゃ♡」

「んんっ♡んんっ♡んあっ♡いい感じだね♡お姉さんの母乳さつきより出てる♡このままよろしくね♡」

(エッチな声ちよつと出ちゃった♡団長ちゃんは搾ってくれてるだけなのに♡母乳どんどん出ちゃう♡私の体、もう母乳まみれになっ

ちやっってる♡お股まで流れて…♡)

「たくさん出ますね…。もう僕の手ベトベトになっちゃってますし。」

「うん…♡んっ♡団長ちゃん搾るの上手だからたくさん出ちゃうの♡ね、ねえ、団長ちゃん…♡こういうこと、聞いていいか分からないんだけどね…♡」

「なんですか?」

「ジータちゃんのエッチなことしたでしょ?多分、もう他の子とも…。私のおっぱい、どう?大きすぎないかしら…。」

「僕はナルメアさんぐらい大きいのも好きですよ。それに、おっぱいは魅力的ですけど、女性の魅力はそれだけじゃないですから。」

「私のおっぱい好き?嬉しいな♡団長ちゃんにこうして抱き締められてるとね、甘えなくなっちゃうの♡ダメなお姉さんだよね…。」

「たまにはいいじゃないですか。僕は団長なんですから。」

「んんっ…♡ありがとう、団長ちゃん♡」

(団長ちゃんに抱かれておっぱい搾られるの気持ちいい♡1人で搾ってみたときより自然にたくさん出ちゃう♡あっ♡♡お尻に硬いのが…♡もしかしてこれ、団長ちゃんの…♡)

「団長ちゃん…♡硬いのが…♡」

「ああ、すみません…!治療してるだけなのに。嫌でしたよね…。」

「いいの♡おっぱい搾ってもらってたらお姉さんもそういう気分になっちゃってるから♡おあいこだね♡」

「でも、これは治療ですから…。搾り切らないと。」

「団長ちゃんのどんどん張ってきて苦しそうだよ?私も団長ちゃんのお手伝いしたいな…♡だから、今度は前から、ね♡」

「そう言われると…。その、お願いします…。」

「うん♡団長ちゃんのおちんちん搾ってあげるね♡」

(水着脱がして…♡ああ♡団長ちゃんの大きい…♡団長ちゃんにおっぱい搾ってもらいながらおちんちん触ってる♡もうお汁出てきてる…♡あ、団長ちゃん私のおっぱい見てる♡母乳とろとろしてるとこ見られちゃってる♡)

「その、ナルメアさん、今度は僕からいいですか…?」

「なあに、団長ちゃん♡何でも言っ♡お姉さん頑張るから♡」

「おっばい…吸ってみてもいいですか?なんて…。」

「いいよ♡実はね、お姉さんも吸ってもらったらもっ♡と出るかもっ♡て思っ♡たの♡」

「それじゃあ、遠慮なく…!んっ、ちゅ、んうっ、ごくっ…。」

「んあっ♡あっ♡はあっ♡団長ちゃん赤ちゃんみたい♡でも、あ♡あっ♡吸い方はエッチ♡んっ♡舌でいじめちゃダメえ♡」

(団長ちゃんにおっばいすきにされちゃっ♡てる♡母乳たくさん出ちゃう♡飲まれるの気持ちいい♡ちゅーちゅー吸われて感じちやう♡私もおちんちんお世話しなきや♡)

「んっ♡んうっ♡おちんちんっ♡てこうやっ♡て擦ればいいんだよね…?団長ちゃんできく見えないけど、これぐらいなら…♡ひやう♡はっ♡んああっ♡」

「ナルメアさんの母乳、甘くてミルクみたいだ…。こっちも…はむっ、ちゅう、んくっ…。」

「ああんっ♡飲み比べても変わらないよお♡お姉さんのミルクおいしい?…飲みながら頷いちゃっ♡てかわいい♡やんっ♡好きなだけ飲ん♡でいいよ♡」

(母乳出ちやうの怖かったけど、団長ちゃんとうっ♡していられるの嬉しい♡もっ♡とお世話してあげたくなっ♡ちやう♡おちんちん♡どん♡ん熱くなっ♡てきてる♡もっ♡と擦らなきや♡)

「ナルメアさんの手気持ちいい…!僕も頑張りますね。」

「頑張っ♡て♡いっ♡ぱい吸っ♡てくれたらお姉さんもおちんちん♡た♡く♡さ♡ん♡ご♡いてあげる♡お姉さんの手でびゅっ♡びゅっ♡っ♡てしてあげる♡」

「ああ、それいいです…!はむっ、ちゅば、ちゅうう…!」

「お姉さんも気持ちいいよ♡おっばいジンジンしちやっ♡てるの♡ミ♡ルク出やすくなっ♡てるみたい♡んあんっ♡こっちのおっばいからも垂れてきちやっ♡てる♡そう、交互に吸っ♡て♡」

(団長ちゃんの口からも零れちやっ♡てる♡私のおっばいびゅっ♡

ぴゅっ♡ってしちやってる♡団長ちゃんのおちんちんすごく張ってきて、こつちも出そうなのかな♡)

「ナルメアさん、僕、もう…!」

「ぴゅっ♡ぴゅっ♡ってしそなんだよね♡お姉さんのミルク飲んで団長ちゃんもミルク出して♡お姉さんも、もういつちやいそうだから♡一緒にね♡」

「ああ…!出る…!」

「団長ちゃんにおっぱい吸われてイク♡?イクイク♡?」

びゅるるるる♡♡びゅるるるる♡♡どぴゅ♡どぴゅ♡

ぷしゃああ♡ぷしゃ♡ぷしゃ♡

「ふああああ♡?♡?あ、ああ…♡?おっぱいでいつちやった…♡?団長ちゃんのミルクいっぱい…♡?お姉さんの体にたくさんかけられちゃった♡?お風呂なのに匂いすごいよお♡?」

「くくくく…ナルメアさんこそ、こんなにミルク出して甘ったるいですよ…。」

「うふふ♡一緒だね♡」

「あはは、なんか変な感じですね。」

(団長ちゃんすごい頑張ってくれたから、今度は私が頑張らないと♡おちんちんまだ硬いから出しきれてないんだよね♡)

「たくさんおっぱい吸って疲れたよね?次はお姉ちゃんがしてあげるから横になって♡」

「え、でも搾らないと…。」

「おっぱいでおちんちん挟みながら自分でやってみる♡団長ちゃんもまだ出したりないみたいだし、一石二鳥だと思うの♡ほら、横になって♡こうして…♡団長ちゃんのおちんちん大きいから先っぽだけ出ちやっただけ♡」

むちゅ♡ぬちゅ♡ぬぶっ♡ぬちゅ♡ぬぢゅ♡むぎゅ♡ずちゅ♡

「お姉ちゃんのおっぱいどう?気持ちいい?」

「ナルメアさんのミルクがたくさんついて、気持ちいい…。」

「よかった♡お姉さんのミルク漬けおっぱいで気持ちよくなってね♡もうミルクだらだら出ちやっすぐミルク溜まりできちやう♡」

「うん、僕のお腹とか挟んでるところにも出来ちやつてるね。こんなこと言うのと不謹慎かもですけど、今しか出来ないですから楽しみたい…とか思ったり…。」

「うん♡ 本当に赤ちゃん出来ちやつてもここまで出来ないはずだし、今だけ、だね♡お姉さん今すつごく幸せだよ♡」

「ナルメアさん…。」

「あ、違うの、いや、違わないんだけどね!?その、お姉さんもいいけどお母さんもちよつといいなって思っただけでね…!」

(私、あんな言い方したら団長ちゃんのこと好きって言ってるみたいだよ…。好きだけど、こんな伝え方したくない…!もつとちやんと…!)

「あああ…!ナルメアさん、それ結構くる…!」

「あ、ごめんなさい…!力入れすぎちやつた…!痛くなかった?」

「いや、むしろ気持ちよかったっていうか…。僕のチンポに一生懸命になってるのが興奮する…。」

「そ、そうなんだ…♡じゃあ、お姉さんもつと頑張るね♡」

(ただ勝手に焦ってただけなのに…。団長ちゃん騙しちやつてるみたいで嫌だな…。せめて今からでも一生懸命やらないと…)

ぬじゅ♡ぐちゅ♡じゅぶ♡じゅぶ♡ぬじゅ♡ぐちゅ♡

「団長ちゃんのおちんちんまた張つてきてる…♡出したくなったらいつでも出しているよ♡全部お姉ちゃんが受け止めてあげるから♡」

「乳圧やば…!!もう、出そう…!」

「団長ちゃんのミルク出して♡さつきみたいにびゅ♡つてたくさん出して♡お姉さんのミルクと混ぜちやおう♡」

「出るう…!」

「おっぱいで、ぎゅ♡って抱き締めてあげる♡ほら、ぎゅ♡♡」

どびゅ♡う♡う♡う♡♡どぐ♡つ♡どぐ♡つ♡どぐ♡つ♡どびゅ♡

「どくんどくんって脈打って、団長ちゃんのミルクたくさん出てくる♡お姉さんのおっぱい火傷しそう♡きゃ♡ミルク顔まで跳ねてきた♡んっ…♡お姉さんのミルクと混ぜって不思議な味…♡」

「はあ、はあ…すごい気持ちよかった…。」

(団長ちゃんのまだ大きい…♡欲しくなっちゃってる♡ダメなのに♡目が離せないよ…♡)

「ナルメアさん、ずっと見てるけど…もしかして欲しいんですか?」

「ちよ、ちよつとポーつとしてただけだから♡おっぱいまだまだ搾らないと、ね?」

「ナルメアさんがシたいなら僕は…!」

「あのね、団長ちゃん…!よく聞いてほしいの。お姉さん、団長ちゃんのこと、男の人として好きなの。お姉さんのいろんなところ受け止めてくれて、ザンバとの決着もつけさせてくれたわ。」

「はい。ナルメアさんが辛いときはいつでも力を貸しますよ。だから今だって…!」

「だから、だからね…!団長ちゃんと本番までシちゃったら、きつと本気になっちゃう。いっぱい甘えてほしくなったり、甘えさせてほしくなっちゃう。皆だって団長ちゃんのこと好きなのに迷惑かけちゃう。だから…!ダメなの。」

「いいじゃないですか、それがナルメアさんのしたいことなら迷惑かけても。僕はそれでもナルメアさんが望むことを出来るだけしてあげたいんです。団長だから付き合うとかはできないですし、こんな状態で言ってもただシたいだけにしか聞こえないと思いますけど…。」

「団長ちゃん…本当にいいの…?」

「もちろんです。僕は団長ですから。」

(迷惑かけてもいいの?皆と同じように団長ちゃんを求めても…。お姉さんとしてじゃなくて、1人の女として…。)

「…どうしますか?」

「お姉さん、団長ちゃんとシたい…!抱き締めてほしいの!だから、お姉さんとエッチしよ♡」

「ナルメアさん…!」

「ちゆ…♡んちゃ♡ふふっ、お姉さんのファーストキスあげちゃった♡団長ちゃん、その、おっぱいも搾らないといけないから…♡後ろ

からしてもらってもいいかな♡」

「もう挿れちゃって大丈夫なんですか？」

「うん♡ずっと濡れちゃってたの♡途中でイっちゃったりもしたし…♡お姉さんは壁に手ついてるから、搾ってね♡」

「分かりました、それじゃあ挿れますよ…！」

じゅぷ…♡じゅぷぷ…♡

(団長ちゃんのおちんちん入ってきてる…♡本当に本番…♡嬉しくてイっちゃう♡♡団長ちゃんと本当に繋がれる♡おっぱいも張ってきちゃってる♡)

「んんんっ…♡ああああ♡?♡?おちんちん入ってきてる♡?ああ♡?まだ入るの♡?お姉さんの中いっぱいになっちゃう♡?んああ♡?♡?」

「全部入りましたよ…!そうだ、これ下に置いときますね。今更ですけど、どれぐらい搾ったか分かるように。」

「洗面器…♡これにミルク溜めちゃうんだね♡んあんっ♡?団長ちゃんに後ろからおっぱい鷲掴みにされちゃってる♡?ミルク搾ってえ♡?」

ぷしゅー♡ぷしゅー♡

「もう洗面器全体にミルク広がってますよ…！」

「そういうえば、幸せな気持ちだとたくさん出るって聞いたことあるかも♡?んああっ♡?おっぱいもおまんこも気持ちいい♡?」

「じゃあもつと気持ちよくなりますから！」

「あああんっ♡?やつ♡?ふああっ♡?おちんちん奥きてる♡?ひあんっ♡?乳首つねっっちゃああ♡?またミルク噴いちやうう♡?♡?」

ぷしゅー♡♡

「どんどん溜まっていきますね…。」

「だって、団長ちゃんがイカせるから…♡?おっぱいもおまんこも溢れてきちゃうの♡?エッチなお姉さんでごめんね♡?」

「こんなエッチなお姉さんじゃ弟は心配になっちゃうよ…！」

「いいもん♥?お姉さんが好きなのは弟だもん♥?心配してくれるならもつとイカせて♥?弟のことしか目に入らないようにして♥?」
「いっばいイカせちゃうから…!お姉さんは弟のものだって教えちゃうから…!」

「うん♥?うん♥?ああいつちやう♥?弟おちんちんで強いのきちやう♥?気持ちいいところ擦れてえ♥?イク♥?イクイクイクく♥?♥?♥?♥?ああくく♥?♥?♥?」

ぷしやーーー♡♡♡ぷしっ♡ぷしっ♡

(またすごいいつちやつた…♡♡ミルクたくさん噴いちやつた♡もう洗面器に半分ぐらい溜まつちやつてる…♡)

「お姉さん、力抜けちやつた…♥?団長ちゃんはまだイってないのにごめんなさい♥?」

「ナルメアさん、今度はこつちに…僕が支えますから。」

「ふあ…♥?これでいいの?」

「搾らないといけないので片手はおっぱい掴ませてもらいますけど…こつちはお腹を抱きしめれば、楽でしょ?」

「うん…♥?これ、ほつとするね♥?んあんっ♥?おちんちは早く動きたいみたいだね♥?いいよ♥?お姉さんのおまんこで気持ちよくなつて♥?」

(私のおまんこ、団長ちゃんの形になつてる♡たくさん刷り込まれて、覚えさせられちゃう♡団長ちゃんの手でお腹押さえられて、おまんこ狭くなつちやつてすごい♡♡またいつちやう♡)

「はっ♥?あっ♥?ああっ♥?気持ちいい♥?おちんちんがくるとミルクぴゅー♡つて出ちゃう♥?お姉さん、団長ちゃんのすきにされちやつてる♥?はあああ♥?」

「ナルメアさん、前見て…!」

「まえ…?やだ♥?お姉さん写つちやつてる♥?」

「後ろからだどナルメアさんの顔見れないから、鏡があるこつちにしたんだ。蕩けちやつてるね…!」

「お姉さんこんなエツチな顔してたの♥?団長ちゃんのおちんちんくるたびにこんな顔♥?おっぱいもこんなに掴まれてるのに、気持ち

よくなっちゃってる♥?」

(私の体、いつの間にか団長ちゃんに押し付けちゃってる♡おっぱい揺らしてミルク撒き散らしてる♡おちんちん気持ちよすぎてイっちゃう♡こんな顔見ないでほしいのに見てほしい♡団長ちゃんにだけ見せられる私の顔♡)

「ナルメアさんの膣内、うねってやばい…!」

「お姉さんもう何度もイってるから♥?団長ちゃんもイって♥?お姉さんの中に、団長ちゃんのミルク注いでほしいの♥?あっ♥?またイっちゃう♥?イク♥?イクイク♥?♥?」

「出すよ、ナルメアさんの膣内に…!」

「ああああ♥?♥?おちんちん激しい♥?出して♥?お姉さんのイってるおまんこに♥?おっぱい搾りながらたくさん注いでえ♥?♥?」

どびゅううう♡♡びゆく♡びゆく♡どちゅん♡どびゆ♡びゆ♡

ぷしやああああ♡♡♡

「イクイクイク♥?♥?イクくくく♥?♥?♥?♥?あはああくくく♥?♥?♥?♥?ああくく♥?♥?中、いっぱい♥?♥?ミルク注がれながらミルクたくさん出ちやったあ…♥?気持ちいいよお…♥?団長ちゃん好き…♥?♥?」

(おっぱい両方鷲掴みにされてびゅー♡びゅー♡ってすごいよお♡
♡団長ちゃんのミルクでおまんこ満タンにされちゃった♡♡幸せ♡
♡イキすぎてイってるのか分からない♡♡)

「ナルメアさんのミルク、止まったみたいだね。」

「ふあ…♥?本当?」

「まだちよつと出るけど、もう終わりみたい。」

「本当だ…♥?団長ちゃんにきゅっ♡ってされてもほとんど出ないね♡ちよつと寂しいかも…♡♡」

「ほら、これ見て。」

「あ…♡お姉さんのミルク、洗面器から溢れちゃってる♡♡団長ちゃんが搾ってくれたからだね♡」

「また困ったことがあったら相談してね。僕は団長だからさ。」

「うん♡…ねえ、団長ちゃん♡今日はとっても嬉しかったよ♡今度
は、普通のエッチしようね♡ちやんとベッドで♡」

第5話 レオナさんと過ごす眠れない夜の終わらせ方♡

「団長さん…」

(ん…こんな夜中に誰か部屋の前に…)

コテージの鍵をかけたグランの部屋に遠慮がちな声とノックが訪れる。寝ぼけ眼をこすりながらドアを開けると、ユカタヴィラを着た一人の女性が目の端に立っていた。

「レオナさん…。また、眠れないんですか？」

「ごめんなさい、やっぱり起こしてしまうの迷惑ですよね…。」

「眠れない夜は起こしていいって言ったのは僕ですから、遠慮しないでください。」

「ありがとうございます、団長さん…。あ、でもどう過ごすか考えてなかったな…。」

「それじゃあ、海行きましようか。浜辺で波の音を聞いてると落ち着きますし。」

無言のままゆっくりとした足取りで深夜の浜辺へと歩いていく。誰もいない夜は時間が無限のようであつという間に過ぎることもある不思議な刻で、レオナが幾度も経験している時間だった。

「本当だ、波を見ているとちよつと落ち着きますね…。」

「早朝に来たりすると誰もいなくて、独り占めできちやったりしますよ。」

「団長さんが一人で行動するなんて意外ですね。」

「あはは、僕だつてそういうときぐらいありますよ。」

二人して浜辺に足を伸ばして座って並び、ただ波の動きを眺める。それだけの音の世界はレオナの揺れる心を鎮めてくれた。

「アベル…どうしてあなたはここにいないの…。」

(こんなときに掛けるべき言葉は僕には分からない。けど、団長として団員や仲間をケアするのも役目なんだ…！)

「レオナさん…その、僕はレオナさんの大切な人の代わりにはなれ

ないですけど、今だけはこうして側についてますから。」

「団長さん…。ありがとう。あの人は、平和のために戦っていたのに…なのに、平和な時にいないのが悲しくなっちゃうの。何のためについてどうしようもなく思っちゃうの。」

「アベルさんがどう思うかという思いで戦ってきたのかは誰にも分からないですけど、少なくともイデルバに暮らす人やレオナさんを守るために戦ったんだと思います。」

「うん…そうだね。でもね、みんな忘れていつちやう。いつか私も忘れちゃうんじゃないかって思うと、怖くて、可哀想で、眠れなくなっちゃうんだ。」

体育座りで縮こまり、手をぎゅつとしてしているレオナを見かねてグランは側に近寄り優しく語りかける。

「誰も忘れないですよ。前に助けた屋台の人も、イデルバの人達も、レオナさんも。もしアベルさんその人自体を覚えていなくても、アベルさんが関わった人は何かしら影響を受けて生きていますから。」

「そうなのかな…。」

「僕はそう思ってます。言うじゃないですか、情けは人のためならずって。アベルさんの行いが巡り巡って、また誰かの善い行いの繋がります。」

「そうだといいな…。」

声色が良くなったレオナにひと安心して、そのまま隣に座り続ける。ただ無言のまま海を見つめて時が過ぎていく。

「団長さん、今日は付き合っていたありがとうございます。今夜は少し眠れそうです。」

「お役に立ててよかったです。部屋まで送りますよ。」

「それじゃあ、お言葉に甘えちゃいますね。」

再びゆつくりと歩を進めてコテージへと戻る。グランを訪ねてきたときよりもその足取りは確かだ。

「あ、あれ？鍵が…。」

「どうしました？」

「ざつき浜辺で握っちゃってて…壊しちゃったみたい…。」

「け、結構脆くなってたんですね…。あはは…。」

「今そう思ってたんですけどすよね!」

「そ、そんなことないです!」

「団長さん絶対怪力とか思ってた!」

「いや思っていないですから!」

「…ぷっ、あははは!昔もこんなやり取りしたかしら…。でも、困っちゃったな…。管理人さんまで起こすのはご迷惑ですし。」

「うーん、そうですね…。レオナさんが嫌じゃなければ、僕の部屋のベッド使ってもいいですよ。僕は床でも平気ですし。」

「ええ!?それはいくらなんでもダメですよ!夜中に起こしてしまつた上にベッドまでお借りするなんて!私こそ床で平気ですから!」

「普段から疲れが取れてないのに床で寝たりしたら痛めますよ。ほら、行きましょう!」

「わわっ、そんな引つ張らなくても…!」

(今日の団長さんちよつと強引だけど、私のことそんなに心配させちゃってるのかな…。私が風邪引いたときのアベルもこんな感じだったな…。男の人に手を引かれたのって何年ぶりだろう…。)

「ほ、本当に私がベッドで寝ていいんですか?」

「はい。僕はこうして壁に座って寝ますから。」

半ば押し込まれる形でベッドに入れられてからも何度も確認してしまう。まだほんの少し暖かみのあるシーツに気恥ずかしさを覚えているのもあった。

(貸し出されている部屋のベッドだからいいかなって思ってたけど、団長さんの匂いする…。男の人が使ってたベッドで寝るの恥ずかしいよ…。でも、団長さんは気にしてないみたいだし。うう、別の意味で眠れないよ…。)

「や、やっぱり私、床で寝ます!団長さんがベッドで…!」

「レオナさんが床で寝るとしても僕は床で寝ます。どうせ眠れないなら、付き合いますよ。」

「あーもう…!だったら、二人でベッドで寝ましょう!お互いベッ

ドで寝られればウインウインです！」

「おわっ、レオナさん!？」

「このベッド大きいですからーこれで解決です！」

(ふう、これで落ち着いて眠れそう…。団長さんもいるから一人じゃない…。…?!?!?!だ、団長さんと一緒のベッドって、一緒に寝てるってことだよ?!?!何やってるの私?!?!こんなのアベルにも団長さんにも悪いよ!。)

後から自分のしでかしたことに気づいて赤面し、背を向けて身悶えてしまう。かといって今更やっぱり別々でも言えない。さっきの堂々巡りを繰り返すだけなのは目に見えている。

(落ち着くのは私…。引き込んだときは団長さんも驚いていたけど、別に何も言わないし何もしてこないんだから、普通に寝ればいいのか。うん、それでいい。親戚の子みたいに思えばいいんだから。)



「zzzz…」

(団長さん寝ちゃったな…。少しぐらい慌てたりしてくれてもよかったのに。私を部屋に誘ったときも普通だったし、私も流石に年なのかな…。)

ちよっぴり女としていじけつつ、再び訪れた一人の夜に暇を持って余してしまふ。グランを引き込んだりしなければ眠れたかもしれないが、後の祭りである。

(団長さんも男だなあ…。すごいがつしりしてる。けど、寝顔はまだ子供みたい。アベルもそうだったっけ…。アベル…。)

「んっ…♡」

ずつとベッドに入って火照っている体と男の匂いの相乗効果で、一人遊びを始めてしまふ。

「んっ…♡んうっ…♡くっ…♡」

(こんなこといけないのに…。♡団長さんのベッドで、団長さんの横でオナニーしちゃってる…。♡)

「っ…♡ふっ…♡んくっ…♡ふうっ…♡はっ…♡」

(手、止まらない…♡ 団長さんごめんなさい…♡ 団長さんが心配してくれてるのにこんなことしてたら、台無しなのに…♡)

「んんっ…♡はあっ…♡ふくっ…♡んっ…♡んうっ…♡」

(だめ、もういつちやいそう…♡ 久々にシたから、昂つちやう♡)

「んっ♡んっ♡ふっ♡ふうっ♡んくっ♡はあっ♡」

(イク♡いつちやう、イク♡♡)

「んんくっ♡?♡ん、んんっ♡?…ふう、ふう…♡」

(はあっ、いつちやった…♡ あれ、これって…。)

いったときに悶えてしまった体を伸ばし直したときに誤って足をグランにぶつけてしまい、そこにあるはずのない高さに硬いモノがあることに気づく。

(えっ、もしかしておちんちん…!? でも、団長さんは寝てたはずじゃ…!? そういえば寝息立ててない! うそ、聞かれちゃってた!?)

「も、もしかして、起きてる…?」

「す、すみません…。寝た振りしたら落ち着いて寝れるかなって思ってた…。」

「くくくっ!? ぜ、全部聞いてたの!」

「すみません…。」

「ど、どうして言ってくれないんですか!」

「そ、それは…言わないとダメですか?」

「当然です!」

「その、聞いてみたくなっちゃって…。僕、団長失格ですね…。」

「うっ、そこまで怒ってないから…。元はと言えばこんなところで一人でシちやった私が悪いんだし…。」

(団長さんの大きくなっただままだよ…。私のせいだよね…。ごめん、アベル…!)

「うわっ、レオナさん何を!」

「何って一人でシてるの聞かせちゃったお詫びだよ。団長さんの大ききしちやったみたいだから。」

「大丈夫です、悪いですよそんなこと!」

「いいから、私に任せて。」

(団長さんのお、大きい…♡これ、まだ完全じゃないよね…♡もうアベルのより大きいかも…♡って、何考えてるの私♡)

普通の大きさを知っているが故に、一目見ただけでご無沙汰な体が疼いてしまう。

「手でしてあげる…。んっ…こんな感じかな…。」

「レ、レオナさん、それ…!」

「これぐらいの力が気持ちいいんだよね？何回かしたことあるから…。」

「あっ、くあっ…!」

「もう先走り出てきてる…こうして少しずつ全体に広げて…よくなってきたかな？」

「レオナさんうまつ…!」

(団長さんのおちんちんこんなに大きくなるの…♡形もすごいし…♡と、とにかくやらないと♡)

「こうして満遍なく優しくしごいて…♡先っぽは特に丁寧に…♡でもときどき力入れてみたり…♡どう、気持ちいい？」

「き、気持ちいいです…!」

「じゃあ、このまま続けるから…♡んっ…♡どんどん熱くなってるね…♡これとかどうかな…♡」

「ああっ…そんな根元…!」

「ここきゅってするとすぐ出やすくなるんだよね？団長さんのビクビクしてる♡先走りもたくさん溢れてきてるね♡」

(そろそろ出そうかな…♡団長さんの大きいからびっくりしちやつたけど、おちんちんはおちんちんだね…♡)

「膨らんできているから、激しくしちやうね…♡もちろんときどき力入れちやうから♡」

「ああやばっ…!」

「ほら、出しているよ♡私の手で出させてあげる♡」
「あああ…!」

びゅうううう♡♡びゅく♡びゅく♡びゅく♡びゅぶ♡びゅ♡

(団長さんの手にたくさん出てる…♡♡すごい勢い♡手で抑えてなかつたら顔まで飛んできてたかも…♡まだ出てる…♡ちよつと疼いちやうかも…♡)

「団長さん、たくさん出ましたね♡これで…ってええ!?まだ大きいままなの!?!」

「レオナさんの手、気持ちよすぎて…。」

「そ、そうだった?うーん、まだしないとだめかな…。」

「流石にこれ以上は…。その、これじゃ寝れないですし、シャワー浴びてきますね!」

「あ、団長さん…!」

グランは何とか理性を振り絞り、その場を脱出する。相手がその気が無いであろうことと、大切な人がいたという事実がいつもより冷静にさせたのかもしれない。

(危なかった…。あのまま続けてたら間違いない…。今までのものもないけど、今回は本当にやばい。団長どころか人として終わりだよ…。)

共用のシャワーを浴びながら心を落ち着かせ、火照りも収まっていなく。経緯はどうあれ、抑えることができたのは前進と言えるかもしれない。

「ふう、洗い流したし帰るか…。ふあ…‥ねむ…。」

あくびをしながら部屋の前へ行くと、中から声が漏れていた。

「んんっ…♡ふあっ…♡あっ♡はあっ♡イキそ…♡んうっ♡んあっ♡あっ♡イク♡?イク♡?イクくくっ♡?♡?」

さつきまで行為をしていた自分のベッドで女性がいやらしくオナニーをして仰け反りながらイっている。それは冷静になっていたグランの理性を狂わせるには十分だった。

(レオナさん…!?!誰を…いや、アベルさん一筋だからやつぱりアベルさんを想って…。いつまでもアベルさんを…。でもアベルさんはこんな人を残していなくなつて…。これじゃいつまでもレオナさんは前に進めないじゃないか…。だつたら僕が…。)

その淫靡な光景にあつという間に熱が集まってい。目の前の獲

物を狩りたい、猛り立ったチンポで犯したい、そんな激情のための歪んだ論理が構築されていく。そして幸か不幸かグランにはそれを現実にする力があつた。

「レオナさん…!」

「だ、団長さん!?こ、これは違うの、その、ね?なかなか眠れなくて…団長さん…?」

「どうして僕をそんなに挑発するんですか…!僕が戻ってくることをぐらい分かってましたよね…!」

「その、ちよつと出来心で…ごめんさい!だから、そういうつもりは無いの!ひゃん♡」

「こんな濡らしてるじゃないですか。本当に眠れるんですか?」

「そ、それは…」

(団長さんの匂いでシチャうなんて、私何やってるんだろ…。何もしなければ眠れたはずなのに。)

「ちよつと団長さん!脱がないでください!」

「このままだとレオナさんのこと犯しちゃいますよ…!嫌なら僕を退けてくださいよ。」

「今は力抜けちゃって…!ね?今ならまだ間に合うから!」

「力抜けちゃうぐらいイッたんですか?男の部屋でそんなことしたら犯されますよ…!」

「久しぶりにしたから加減分からなくて…ね、やめよう?」

(違う…少し踏ん張れば退かす力ぐらい出るのに…。どうしてこんな嘘ついちゃってるの…。)

「ほら、このままだとキスしちゃいますよ…こんなに近いのに退かさないんですか?」

「だ、団長さん…!んうっ!うっ、んぶっ、ちゅ、ちゃ…や、やめて、んちゅ、ちゅ、ちゅぱ、んはあ♡はあっ、ちゅ♡ちゅぱ♡んっ♡んんっ♡んはあっ♡」

「ふーん…口だけで全然抵抗しないじゃないですか。ユカタヴィラ脱がしちやおうかな。」

「んうっ♡ちゅ♡ちゅぱ♡んちゅ♡ちゅる♡ちゅう♡ちゅぱあ♡は

あつ、はあつ♡ 団長さん、もう止めようよ…♡これ以上は…♡」

「そう言う割には僕の手は抑えないんですね。僕に無理矢理犯されたってことにすれば楽ですもんね。」

「ち、ちがつ…私はただ力が入らないだけです…♡」

（団長さんキスも触り方も上手い…♡このまま流されていたらいけないのに止められない…♡私にはアベルが…）

「いいですよ、僕が無理矢理したってことにすればいいんです。僕はやめませんから。…レオナさんのおっぱいキレイですね。ツンつてしてていじりたくなっちゃいますよ。」

「んああつ♡胸だめつ♡んちゆう♡んつ♡んうつ♡んはつ♡団長さんの手やらしい…♡んるっ♡ちゆう♡ちゅぶ♡ちゅぱあ♡」

「改めてこつちも…ああ、自分でシてただけあつてかなり蕩けてますね。もうぐちよぐちですよ。」

「やああつ♡やつ♡あああつ♡そこ、クリ触っちゃだめ♡んあんっ♡はああつ♡んあああ♡」

（イカされちやう♡団長さんの手、気持ちよくてイク♡助けてアベル、私イカされちやう♡私が私じゃないみたいなの♡）

「レオナさんの感じてる顔かわいいですよ。必死に耐えてる振りしてるどころとか。このままイカせてもつとかわいくしてあげますね…！」

「やああああつ♡♡あつ♡イク♡イツちやう♡クリだめなのっ♡？ああああああつ♡？イクっ♡？イクイクっ♡？イクくくくっ♡？♡？♡？」

ぷしや♡ぷしや♡

（イカされちやう…♡♡団長さんがこんなに上手いなんて…♡ごめんなさいアベル…♡アベルじゃない人にイカされちやう…♡んん…♡団長さん何か…あそこに何か当たって…）

じゅぶううう♡♡♡

「んああああ♡？♡？♡？あつ♡？ああああ♡？」

（これ、挿れられてる♡♡団長さんのおちんちん♡あの大きいの♡ずんずん入ってきてイク♡奥まで♡♡こんなの知らない♡♡）

「レオナさんの膣内、途中から堅くて…ここまで届いたのは初めてなのかな？」

「動かないでえ♡？形変わっちゃう♡？団長さんのおちんちんの形になっちゃうから♡？はっ♡？ああああ♡？」

「僕の形にしてるんですよ！こうやってゆつつくり動いて…馴染ませてるんです。ほら、よく分かるでしょ？」

「やめ♡？やああ♡？おちんちん止めてえ♡？んあああ♡？ああゝゝ♡？♡？はあ♡？はあ♡？んくうう♡？♡？」

（おちんちんいろんなところに擦れて気持ちいい♡大きいのでこんなに違うの♡ううん、大きいだけじゃなくて、これ多分団長さんの動きもすごい♡）

「レオナさんの絡み付いてきて、僕のチンポ気に入りました？気持ちよさそうな声もたくさん出てますし。」

「ちが、う♡？んあ♡？そんなこと、ないですから♡？んあああ♡？♡？そこはあ♡？ああああ♡？」

（認めたくないのに♡アベルのときと全然違う♡またいつちやう♡）

「顔隠しちゃってかわいいなあ。見せてくださいよ。」

「見ないで♡？やめ、んあああ♡？♡？おちんちん一気に♡？ずるいい♡？」

「いい感じに蕩けてますね。このまま最後までいきますよ。」

（中だけは♡中だけではだめ♡それだけは止めさせないと♡なんとか…アベル…！）

「団長さんお願い♡？抜いて♡？抜いてください♡？ああ♡？♡？」

「言っただじやないですか。これは僕が無理矢理してるんですって。だからそんな抵抗する振りじゃ止めませんよ。」

「振りじゃない♡？んあああ♡？だから…！」

「僕に足絡ませて何言ってるんですか。無理矢理中出しされてる風なプレイが好きなんですな。」

「そんな♡？私、どうして♡？足離れない♡？んいい♡？おち

す。レオナさんはないんですか?」

「わ、私は別に…。」

「本当ですか?…アベルさんを想うのも、誰かに愛してもらうのも、たくさん食べるのも、いっぱい寝るのも。全部欲しがっていいんですよ。だってレオナさんが幸せそうにしてるほうが皆嬉しいんですから。」

「私が幸せなんて…。」

「…アベルさんだって、笑ってるレオナさんが好きだったんじゃないですか?」

(さっきまで悪い顔してた団長さんが涙流してる…。そっか…。私、アベルを想うことが一番で…それ以外のことをするのがいけないことだって思ってたんだ…。そんなふうにしたって誰も喜ばない。…アベルも。そんなのただの自己満足じゃない…。)

「うっ…ぐすっ…。だって、だって怖かったから…。アベルのことを想ってる私じゃないといけないって…ぐすっ…。」

いつの間にか力が抜けて足も外れたレオナを、グランは何も言わずあやすように抱きしめる。そのままグランはレオナがひとしきり泣き止むまで背中を優しくポンポンと叩いていた。

「…とところで、まだシたりないんですけど。」

「な、なんでここでそういう…! デリカシーつてもものが無いんですか!?!」

「あんまりしんみりし過ぎるのもなって…。それはそれとして僕はレオナさんとシたいですし。」

「はあ…ずるいですよ、団長さんのそういうところ。無理矢理シたくせに。」

「す、すみません…。」

「…ぶっ、あはは! いいですよ。どうせ無理矢理されたらさつきみたいに抵抗できないんですから。でも条件があります。」

「条件ですか?」

「ちゃんと気持ちよくしてください。団長さんのおちんちん…チンポで♡そうしたら寝られる気がします。それと明日は食べ歩きです。」

もちろん団長さんの奢りで。」

「お安い御用ですよ…!」

じゅぷうう♡♡

「んあああつ♡?♡?チンポ入ってきたあ♡?団長さんのチンポ奥まで届いて気持ちいいよお♡?団長さんの形になってる♡?」

「レオナさんの膣内きゆうきゆうして…!そんなに僕のチンポ好きなんですか?」

「好き♡?好きにされちゃったの♡?こんなに気持ちよくされちゃったら好きになっちゃいますよ♡?形覚えさせられて中に出されてイカされて♡?悪いチンポです♡?」

「じゃあもつといっぱい突いて中出ししてイカせまくっちゃいますよ!無理矢理しちやいますからね!」

「んいいいい♡?奥きてるう♡?団長さんがこんな人だなんて思っ
てませんでした♡?そんなことされたらもつと好きになっちゃうか
ら♡?夢中になっちゃうからあ♡?ああああ♡?」

端から見たらバカップルかのようなやり取りをして繋がりを深く
していく。それが壊れかけだったレオナの心を直すのに有効だと互
いに本能的に理解していた。

(私、もう何回もイってる♡団長さんのこと本気で好きになってる
♡アベルとどっちか分からないけど、今私のことを本気で見つめてく
れる団長さんが愛しくてたまらない♡)

「レオナさん、口開けて…!」

「はい…♡?んじゅ♡?じゅぶ♡?ちゅう♡?んちゅ♡?ちゅぶ♡
?ちゅぶ♡?んぢゅ♡?んはあつ…♡?こんな悪いキスされたら
もつと好きになっちゃうじゃないですか♡?」

「やつと僕のこと好きって言ってくれましたね…!」

「チンポだけ好きなわけじゃないじゃないですか♡?そんなこと心配し
てたなんて可愛い♡…んああんつ♡?いきなり強くう♡?チンポは
凶悪なんですからああ♡?♡?」

「そうやって挑発するなら僕も乗っちゃいますから!」

「やつ♡?はつ♡?ああああ♡?イク♡?またイク♡?強いとき

長さん、ありがとうございました…♡」
最後にそれだけ言うと、2人して眠りにつくのだった。

第6話 特別任務：ゼタとベアトリクスの快樂調教♡

「あくく疲れたくく…ユーステスのやつ、私のことコキ使いやがって…。服破けちやったじゃん…。」

グランサイファーに夜の帳が訪れたころ、ベアトリクスが長い任務から戻ってきていた。

（みんなこの間までアウギユステで満喫してたんだよなあ…。私も行きたかった…。せつかくお気に入りの水着用意してたのに…。）

長い廊下を歩いてゼタと共用の部屋へと向かっていく。

（あくあ、ゼタも楽しんでたらしいし、なんで私だけ…。こういうときだけは組織辞めたくなっちゃうよなあ。）

ちよつぴりブルーな気持ちでようやく部屋まで辿り着くと、ドアノブに手を掛ける。

（部屋暗いしもう寝てるよな…そつと入るか。）

「ゼタただいまー…：…ああああ!!?!」

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

部屋に入ると、そこには男の上に跨がって腰を振るゼタの姿があった。

「ぢゆる♡？ぢゆる♡？ぢゅう♡？んはあっ♡？団長のチンポ良すぎっ…：こんなの嵌まつちやうじやん♡？んはっ♡？あつ、はああ♡？」

「ゼタさん、もう…！」

「いいわよ、またあたしの中に出しなさい♡？団長のどろどろザーメン♡？あたしが絞り取ってあげる♡？」

（は…：？何が起こってるんだ…：？ゼタがエッチしてるんだよな？私たちの部屋で？誰と？団長…：？なんで…：？付き合ってたのか？それともアウギユステで…：？私の応援してるって…：は…：？）

びゆるるるる♡♡びゅううう♡♡びゆる♡びゆく♡びゆく♡びゆく♡びゅぶ♡

「あああああ♡？♡？♡？♡？♡？これ、すつご…♡？♡？んつくうう♡？♡？あゝくこれやっばいわ…♡？♡？マジになっちゃい

そう♥?」

そのとき、ボタンツ!とドアが自然に閉まった音が室内に響く。

「あれ、ベア…?帰ってたの…?」

「なんなんだよ…なんなんだよこれはあ…!!意味わかんないしっ…!どういふことなんだよこれ…!」

「ベアさん…?」

「なんだよ…なんなんだよ…。」

ドアの前で立ち尽くしたまま俯いたベアトリクスの顔はよく見えないが、声色から泣いているのは明らかだった。

「こ、これは違うのよ…!ほら、団長も…!この子何も知らないんだから…!」

「何もってなんだよ…。二人は付き合ってるんだろ…!私のことなんかほっとけよ…!」

「あーもう、そうじゃないんだってば…!いいから座る!あんたがいない間に大変なことになってるんだから!」

ベアトリクスを無理矢理座らせ、今までの経緯——グランの争奪状態を説明する。

「——で、まあ要するに団長はやりチン状態になっちゃったわけなのよ。ただ、いくらモテても持たなきゃ意味無いから試してたってわけ。コレの具合をね。」

「はあ…。」

完全に頭がショートしてしまったのか、ベアトリクスの反応は薄い。怒って泣いてを少なくとも5回は繰り返しもすれば仕方がない。

「そんでさっきまでやってたわけなんだけど、まーこれが凄くてさ…♡甲斐性ばっちり…ってか、むしろ女1人じゃとてもじゃないけど足りないのよ。」

「はあ…。」

そんな風に言われるとグランも勃ってきてしまう。自身の意思とは関係無くやりたいという衝動が首をもたげてくる。

「ここからは提案なんだけど…ベアも団長とやってみない?ベアだって団長としてみたかったんでしょ?どうせ団長が誰か1人と、な

んてなるわけ無いし参戦しとかないと。」

「だ、団長と…?」

ようやく感情が戻ってきたのか、ベアトリクスが目には生気が宿る。

「むむむむ無理だつて！私だつて心の準備つてもものがあるんだよ！出来るわけ無いだろ!?!」

「ふーん…ベアの気持ちつてそんなもんだつたんだ…。じゃー、あたしがこのバキバキのチンポ貰っちゃおーっ♡」

「ぬあああ!?!なんでそうなるんだよ!?!」

「いやだつてあたしもこのチンポ気に入っちゃつたし♡目の前でおっ勃てたら欲しくなっちゃうつて♡あたしもこれからはライバルつてとこね♡」

「あああ分かつたよ!!やればいいんだろ！やれば！それしかないならやつてやる！」

「べ、ベアさん無理しなくても…。」

「なんだよ、団長は私とじゃ嫌なのかよ…!」

「そうじゃないですけど…。」

「まーいーじゃんいーじゃん♡この子あたしよりもおっぱい大きいし、団長だつて大きいのが好きでしょ?それに…♡処女だからチンポハメて自分好みにできちゃうかもね♡」

「ぐくっ…!」

ゼタが最後だけベアトリクスに聞こえない声で囁き、煽ってくる。

「そんじゃ、あたしはちよつとシャワー浴びてくるから、後は2人で楽しみなよ♡」

「あ、ゼタ…!つたく、ゼタのやつ…。」

「…本当にするんですか?」

「当たり前だろ！私だつてその…なんだ…。」

『ベアの気持ちつてそんなもんだつたんだ』

「だあああ!うじうじすんのはやめ！私だつて団長のこと好きだから！私にもチャンスがあるなら諦めないからな！だから私とエ、エ、エツチ…してくれ!」

顔を真っ赤にして肩を震わせているベアトリクスを抱き寄せ、顔を

近づける。

「い、いきなりキスするのか…?」

「初めてならちゃんと良くしてあげたいからさ…嫌だった?」

「ううん、ちよつと驚いただけだから…! そうだよな、エッチするならこれぐらい普通だよな…。よし、こい…!」

「あはは、そんな身構えなくても…。でも、ベアさんのこと絶対気持ちよくするって約束しますよ。」

「は、恥ずかしいこと言う…ちゅ…んちゅ…ちゅう♡ちゅる♡ちゅん♡♡はあ♡♡はあ…♡♡」

(これがキス…♡ふわふわして、力抜けてく…♡私、団長とキスしてるんだ…♡いろいろありすぎてわけ分かんないけど、まあいつか…♡)

「このまま脱がしますから。」

「あ、ああ…やっぱ慣れてるんだな。」

「流石にね。経験しちゃったものは活かさないと勿体無いですし。」

「私こういうのあんまり分かんないからさ。全部団長に任せるよ…ちゅ…んちゅ…♡」

キスでベアトリクスを溶かしながら服を脱がしていき、下着だけにしてベッドに押し倒す。

「はあ…♡はあ…♡もう、入れるのか…?」

「まだまだ。初めてなんだからちゃんとほぐさないと。下着だって着けたままだし。」

「そ、そつか…全部脱ぐんだよな…。」

「まずは上から、つと…ベアさんの大きいですね。触りますよ。」

「い、いちいち断らなくていいから…! 恥ずかしくなるだろ…!んっ…はあ…♡はくっ♡ふあん♡いきなり吸うなあ…!」

ツンと張った先端を舌で弄びながら徐々に下へと手を伸ばしていく。

「ふっ♡あっ♡ああ♡ふああ♡さつきから胸ばっかり♡あっ♡はあっ♡くうっ♡ひあああん♡?♡?♡いま、ビリッてきて…♡」

「ベアさんの、もう濡れてますね。」

「当たり前だろ！団長とこんなことしてるんだし…♡そろそろ入れるのか？」

「そんな焦らないでください。まだまだですよ。でもパンツはもう脱がしちやいますね。」

「ああ…つて何して、ひあああ♡？ちよ、ふああ♡？そんなとこ舐めるなよお…♡ふあつ♡ああああ♡やめ、んあああ♡」

「恥ずかしがって抵抗するベアトリクスを抑えながら弱点を探り当てる。その程度はグランにはもうお手のものだ。」

「んあああ♡？♡？いま、なんか凄いのがあ…♡？」

「ベアさんここが弱いんですね。じゃあクリと一緒に…！」

「やめ、やめやめやめ♡♡イク♡？イっちゃうからあ♡？だんちよお、ああああーっ♡♡？」

（イカされた…♡団長こんなに上手いのかよお…♡♡私のほうが年上なのにこんなにいいようにされるなんて…♡）

「それじゃあ、挿れますね…！」

「ふあつ…？あつ、ぐうう…！」

「今ならそんなに痛くないはずですから…！」

じゅずううう♡♡♡

（入ってきてる♡団長のが私の中に…♡痛いけど、痛いのは慣れてるし…それより団長と繋がってることのほうがやばい♡こんな気持ちになるのかよお…♡）

「大丈夫ですか？」

「全然へいき…♡それより、私いまやばい…♡顔見せらんない…♡」

「ベアさんのそういうところ、可愛くて好きだなあ。」

「なな、何いきなり言ってるんだよ…！」

「おっと、隙あり…♡ベアさんの手掴んじやいましたから、これで見放題ですね。」

「ちよおつ、あつ♡？ああああ♡？動くなあ♡私まだ一応痛いんだぞ…！」

「ベアさんならすぐ慣れますって。たくさん気持ちよくしてイカせてあげますよ。僕のチンポで…！」

ずちゅ♡ずちゅ♡ずじゅ♡じゅぶ♡じゅず♡

「あぐっ♡?あつ♡?ああつ♡?これ、やば♡?はぐっ♡?はっ♡?あああ♡?いきなり激しすぎだろおっ♡?♡?ああああ♡?」

(これだめだ♡団長に顔見られてる♡初めてなのに滅茶苦茶気持ちいい♡想像してたのと全然違う♡またすぐイっちゃう♡)

「イツ♡?はっ♡?あああ♡?ちよつと、休ませっ、んあああ♡?♡?」

「あんまり気持ちよくなかったですか?」

「そうじゃなくて…ああもう、分かってやってるだろお…♡私の顔見たら分かるだろ…♡」

「あはは、まあ…♡チンポ欲しがってる女の子の顔かな。」

「そういう言い方、恥ずかしいからやめてくれよお…♡」

「僕はベアさんにも言っただけだ。恥ずかしいのも分かるけど、素直に言っちゃったほうがお互いに気持ちいいですよ。」

「し、知るかよ…!」

「ま、ベアさんが言わないのも僕が言うのも自由ですからね。…ベアさんの処女おまんこを貫いた僕のチンポでぐちゃぐちゃに掻き回して中に出してあげますよ。」

耳元で囁くと面白いぐらい顔を真っ赤にして文句を言おうとするベアトリクスの口を塞いでしまう。

「んうううう♡?♡?んじゅ♡?んうっ♡?ぢゅ♡?ぢゅう♡?ぢゆる♡?んうう♡?んぢゅ♡?ぢゅうう♡?♡?」

(だめだ♡ぐちゃぐちゃにされながらキスで溶かされて♡こんな好き勝手されてるのに気持ちよすぎる♡これで中に出されたりしたらどうなっちゃうんだよお…♡)

「じゅう♡?じゅ♡?じゆる♡?ぢゅば♡?ちゅ♡?ぢゅ♡?んぶっ♡?むぢゅ♡?じゅう♡?じゅず♡?じゅう♡?」

(息全然できない…♡頭ほーつとしてきた…♡気持ちいい…♡団長と一つになってる…♡)

「んじゅ♡?じゅぶ♡?じゅぶ♡?じゅううう♡?♡?ぶはっ♡?はっ♡?はっ♡?はあっ♡?あああ♡?♡?んあああ♡?」

「なんでこんな♥？はひっ♥？奥押し込むなあ♥？ゼタにも出してたくせに何でこんな硬いんだよお♥？」

「ベアさんにもつと気持ちよくなってもらいたいですから。奥までかき混ぜて深くキスしながら中出しとか…どうですか？」

「ばっ、ばっかじゃないのか♥そんなこと、そんなこと…♥♥」

(そんなことされたらダメになるのぐらい私にも分かるって♥自分の女にする気まんまんじゃん♥いくら私でもそんなのに引っ掛からないっての♥)

ガチャ！と突然ドアが開くと、タオル姿のゼタが入ってきた。

「おーっ、やってるじゃん♥どう？」

「ゼゼゼゼタあ!?なんで!？」

「いや、ここ私とあんたの部屋でしょうが。シャワー浴びたから戻ってきただけよ。団長、今どういう感じ？」

「2回目をしようとしてたところです。ベアさんすっかり嵌まっちゃったみたいで。」

「嵌まってない!」

「おまんこから精液溢れさせながら言われてもねえ…♥ベッドびちやびちやだし、どう見てもイキまくってたでしょ♥」

「そ、それは…汗だ!」

「ぶっ、そんなの無理あるでしょ。団長のチンポでおまんこ可愛がられちゃったら誰でもそうなるんだから、誤魔化さなくていいっての♥」

ベアトリクスをからかいながらゼタもタオルを捨ててベッドに乗って来る。

「で？女の子選び放題な団長はエロいことの一つも言えない上に素直じゃないベアと、セックス大歓迎のあ♥た♥し♥どっちに生ハメ中出ししたいわけ？」

「うーん、やっぱりゼタさんかなあ。」

「ちよ、なんでだよゼタ!」

「あたしもライバルって言ったじゃん。言っとくけど、あたし以外にもたくさんいるのよ？皆多かれ少なかれこうやってアピールして

るだろうし。でしょ？団長。」

「あー、まあそうですね。。。」

(くそう…私も言わないとダメなのか…？チンポとかおまんことか…
♡何でみんな平気で言えるんだよお…♡)

「ほら、団長♡いつまでもウジウジしてるベアなんかほつといて、チンポ挿れてよ♡あたしのおまんこ団長専用にしたいでしょ♡」

ゼタは仰向けのベアトリクスの横で四つん這いになり、自分の手でおまんこをくぱあ♡と開けて誘ってくる。今魅力的な方は明らかだった。

「よっし…じゃあこのベアさんの愛液と僕の精液つきのチンポ挿れちゃいますからね…！」

「きてきて♡あたしのおまんこにずぶずぶ…つて♡んっ、ああ…♡？きたあ…♡？♡？これホント反則…♡？いきなり子宮の入り口まで届くとか、あ…♡？はあっ♡？」

(ゼタのやつあんな幸せそうな顔して…♡いいなあ…♡)

「あっ♡？はあっ♡？これ、いい♡？チンポ動くとおまんこ全部刺激されて気持ちいい♡？はっ♡？んっ♡？あんっ♡？ああん♡？」

「ゼタさんの中締まって気持ちいい…！」

「鍛えてるからね♡？そこらの女より自在よく？ほら、ほら♡」

「うわっ、これやつば…！中がうねってきて…！ならこっちも！」

「あああん♡？あっ♡？はあああ♡？あっ♡？あっ♡？はああ♡？これすぐイっちゃう♡？ああ…♡？♡？」

ゼタの腰前まで腕を伸ばし、上体を引き寄せて膝の上に乗る形にし、背中を預けさせる体勢にすると、一段と甘い声が漏れる。

「ちよっとお♡？これ、あたしのこと本気で墮とす気じゃん…♡？♡？あああん♡？あああ♡？おっぱい挿んじやだめえ♡？んじゅぶ♡？じゅぶ♡？じゅば♡？ベアが見てるからあ♡？」

ぐちゅぐちゅの結合部も驚掴みにされたおっぱいもキスで蕩けた顔も仰向けのベアトリクスには丸見えだ。あまりにも淫靡な光景にベアトリクスも自然と鼓動が早くなり息が上がって無意識に自分をまさぐり始める。

(この体勢まずい♡マジで墮とされる♡ベアの後押しついでに楽しむぐらいのつもりだったのに♡話違う♡ダメなところにガンガン当たって気持ち良すぎる♡)

「イク♡?イク♡?イっちゃう♡?はあああゝ♡?♡?はっ♡?あっ♡?あひっ♡?やめっ♡?団長♡?それだめっ♡?ああゝ♡?♡?んむうっ♡?んじゅ♡?じゅるふ♡?じゅうう♡?」

(子宮降りてきちやてる♡あたしの身体、団長のものになりたがってる♡あっっ♡今チンポが子宮挟じ開けようとして♡キスしてるうちにヤル気だ♡ヤラレちやう♡っっ♡今入りかけっ♡たああああ♡♡あっ♡もうダメ♡♡)

「ぶはっ…ゼタさん、最後はどうしたいですか?」

がっちりと突き刺したままグランがゼロ距離で囁く。あらゆるジョブを極められる才能の持ち主は夜の戦場の能力に完全に目覚めていた。

「はひっ♡?はひっ♡?はっ♡?子宮の中に直接中出し♡?♡?団長の精液でいっぱい♡?あたしが団長の女になるところベアに見せてあげて♡?♡?」

ゼタは心底幸せそうな蕩けた顔でたどたどしく答える。いつものどこか余裕そうなからかうような雰囲気は一切無い。ただ強い雄に媚びる雌の姿でしかなかった。

「じゃあ動きますから、ベアさんに報告してくださいね。報連相は基本ですよ。」

「はひいん♡?ごめん、ベアあ♡?ああん♡?あたし、これから団長の女になるからあ♡?ああっ♡?あんたの後押しするつもりだったけどお♡?おひっ♡?先越しちゃうからあああ♡?」

「あっ♡あっ♡ゼタ…♡ゼタあ…♡」

「チンポもキスも触り方も上手くてえ♡?あひい♡?でも安心してえ♡?ベアもすぐこうなるからあ♡?チンポにズボズボしてもらうのが幸せの女にい♡?なるからああ♡?ああああん♡?」

ベアトリクスの自身のおまんこを弄る手も早くなり、ラストスパ―トにかかる。

「チンポ膨らんできたあ♡?ねえ見てて♡?あたしが種付けされてイクところお♡?んいい♡?♡?もういつてるけどお♡?ベアも中出しでイカされたらどうけどお♡?あれよりもっと凄いやからあ♡?次にされるときの参考にしてえ♡?」

どびゅうううう♡♡びゅううう♡♡びゆるるる♡びゅーー♡びゆく♡びゆく♡

「あゝゝゝゝ♡?♡?♡?♡?♡?はあゝゝゝ♡?♡?♡?♡?イツツクうゝゝゝ♡?♡?♡?♡?あゝゝゝ♡?♡?」

「凄いやてる…♡私もイク♡イツちやう♡あぁーっ♡?♡?」

(子宮の中に入りきらない♡♡どんだけ出すのよ♡あーあ、もう他の男とシたってダメね♡まあ団長のチンポ専用でいつか♡こんなセックス団長じゃないと無理だし♡)

「ふー、出した出した…っ。ゼタさん、大丈夫ですか?」

「大丈夫なわけ、ないでしょ…♡♡こんなに出されたら団長の女になるしかないじゃん♡♡どうしてくれんのよ…♡」

「これからもセックスすれば許してくれます?」

「とーぜん♡♡ほら、そこにもう一つおまんこが待ってるんだからハメてあげなよ♡勝手にオナってトロトロになってるみたいだからさ♡」

「そうですね。」

ゼタの膣内から引き抜いてドロドロになったソレをベアトリクスに見せつけて甘く声をかける。

「次はベアさんですよ。このチンポで奥の奥まで突いて中にたくさん出してあげますからね。そしたらゼタさんと同じようになっちゃうかもしれないですけど、いいですか?」

「ゼタと…同じ…?」

横を見やれば、かろうじて顔だけ横に向けてうつ伏せで倒れているゼタのおまんこから大量の精液が溢れ出てきていた。

「くっ…♡」

「はあっ…♡んっ…♡あたしのセックス散々見てたんだから、チンポ入れてもらうのにどうすればいいか分かるでしょ♡」

「うん…♡団長のチ、チンポ…♡私のおまんこに入れてほしい…♡
おまんこの奥でたくさん射精して、私も団長の女にしてほしいんだ
♡」

じゅぶううう♡♡

「くああああっ♡？♡？チンポ入ってきたあ♡？いつたばつかだと
効くうう♡？はあくくっ♡？あっ、はあああっ♡？♡？」

「ベアさんの中ほぐれててあっさり奥まで入っちゃいましたよ。ど
れだけ自分でやってたんですか。」

「い、言うなよお…♡？♡？あんな激しいの見てたら私だつてシた
くなるに決まってるだろ…♡？んあああっ♡？」

じゅこ♡じゅこ♡つと既にいやらしい音が鳴り、その度に男に媚び
る嬌声が響く。

「イク♡？イック♡？ああああっ♡？んぢゅ♡？ぢゅう♡？ぢゅず
♡？ぢゅぶ♡？んはあっ♡？激しっ♡？もう少しゆっくり♡？」

「ごめん、ベアさん…！ベアさんの膣内きつくて、それに今日何回も
出したから感覚おかしくてもう出そう…！」

「そんなっ♡？早すぎるだろ♡？ああでもチンポ速すぎて私も強い
のきそう♡？んああああっ♡？♡？」

びゅるるるる♡びゅー♡びゅぶ♡びゅぶ♡びゅ

「んああああー♡♡？♡？♡？♡？なかつ♡？出てるう♡？
♡？ああー♡♡？♡？」

ばじゅ♡ばじゅ♡ばっぢゅ♡ぼぢゅ♡ぼぢゅ♡

「ほおっ♡♡？♡？♡？♡？はっ♡？なんで動いて♡？やめっ♡？
おっ♡♡？おぐっ♡？」

「すぐ出ちやうんで、こうして出すの気にせず動くことにしました
…！」

「やめっ♡？出すのはいいから今は動くなあっ♡？♡？♡？んおうっ
♡？♡？」

びゅー♡びゅるるる♡ばぢゅ♡ばぢゅ♡ばぢゅ♡

「おっ♡おっ♡おっ♡？♡？♡？♡？また出てる♡？これ以上は
あっ♡？あっ♡？もういい♡？動くなあ♡？おまんこ溺れるか

らあ♡?」

ばっちゅん♡どびゆるるる♡びゅぶっ♡びゅ♡びゅく♡

「ほお♡お♡お♡お♡っ♡?♡?♡?♡?♡?♡お♡ひっ♡?♡お♡っ

♡?♡もう、やめっ…♡?♡ろっ…♡?♡はひっ…♡?♡」

「はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…やりすぎた…。ああやば、まだ出る…。」

「もう、入らない…♡?」

脱力したベアトリクスはアへ顔を晒し、その目は完全に焦点が合っていない。二回しか使われていない穴からは精液がごぼっ♡っ♡と溢れ出てきていた。

「団長やりすぎでしょ…♡ベアったら完全にトンじゃってるじゃない♡」

「流石に疲れました…。」

「ホント…?チンポはまだイけるみたいだけど♡」

そう言いながらゼタが半勃ち状態のチンポを握ってくる。

「ちよ、何してるんですか!?!」

「ん…?あたしのこと本気にさせた罰♡次はあたしの番だから♡終わる頃にはベアも復活するかもね♡あくむ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡」

「そんな、ああっ!」

「ちゅぽっ♡ちゅくくっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡おっ勃ってきたきた♡やっぱりまだまだイケんじゃん♡」

「ああもう…!分かりましたよ、やればいいんでしょう!どうなっても知りませんからね…!」

「やあんっ♡団長に犯される♡」

結局その後、生半可な体力じゃない二人に二回ずつ絞られ、最後に一緒に犯して「団長のチンポ専用のハメ穴に種付けしてえ♡」っと言われて交互に出し、泥のように倒れ込んだのだった。

第7話 狂い咲くリーシャと新しい秩序♡

「団長さん、いい加減にしてください!」
バンツ!と団長室のテーブルを両手で叩きながらリーシャが怒っていた。

「団員に誘われたからといって相手をしてしまうなんて団長としての自覚が足りていません!というかそれ以前に複数の女性と関係を持つなど不純です!」

ここ数日間、毎日のようにリーシャが部屋にやってきて、グランはお小言を頂戴していた。

(流石に参るな…。団員も不満を持ち始めてるみたいだし…。)

「入るよー。あ、リーシャ、また来てたの?」

「副団長さん!そもそも貴女があんな事をしなければ、こんなことにはなっていないんですよ!」

「まあまあ…。あ、そういえばさつきカタリナさんがリーシャのこと探してたよ?」

「ん、そうですね…。話はまだ終わっていませんからね!」

それだけ言い残してリーシャは部屋から出ていってしまう。

「大変だねー、モテる団長は。」

「誰のせいだと思ってるのさ…。」

「全員?」

「はあ…。分かってるよ。」

今更ジータが悪いなどとは言えない。リーシャの言う通り、自制すれば何とか出来たはずなのは事実には違いないのだ。

「でもさー、私が言うのもなんだけど、流石にいろんな子とシすぎじゃない?それに私も含めて同じ子と何回かしてるでしょ。」

「断れないんだよなあ…。やっぱ団長失格かなあ…。」

押せばグランは断れない——一部の女性団員達の間で真しやかに噂されている攻略法である。

「あーどうしよう…。」

「まー、やればいいんじゃない?」

「やるって何を？」

「リーシャと。」

ジータは指でジェスチャーしながらあつげらかんと云つてのける。3回目のセックスを終えた辺りからオープンになってしまった幼なじみを仰ぎながらグランはため息をついた。

「いくらなんでも無理あるでしょ…。リーシャは別に僕のこと好きでもないわけだし。それどころか嫌われてるって。」

「何言ってるの？好きじゃなかったらこんな世話掛けてくるわけないじゃん。本人も気づいてるかは知らないけど。」

「そうかなあ…。」

「ま、私もこのままグランとセックスできないのは困るし。私がお膳立てするから徹底的にヤってよ。グランの溜まつてるおちんぽなら一晩で墮とせるって！」

「酷い副団長だよ…。」

グランを独り占めしようとしていた幼なじみはいつの間にかセックスを推進するようになっていたのを嘆きながら、なるようになれ、と思うしかなかった。



更に数日後、立ち寄った島の依頼をこなす多忙な日々を何とかこなして一段落着いた頃。それぞれ思い思いの過ごし方で休息を取っていた。

「後はこれをリーシャに渡しとけば終わりか…。」

団長室で積み重なった書類の対応も終わり、秩序の騎空団向けの資料を手をリーシャの部屋を訪ねる。

「リーシャ、今いいかな？」

ノックをして声を掛けるも返事は無い。いや、かすかに荒い息が聞こえる。

「リーシャ？」

再びノックするもやはり返事は無く、代わりに耳についた息が気に

なってくる。

(もしかして何かあったのか…？リーシャがいるのに返事をしないなんておかしい…。)

「リーシャ、入るよ。」

部屋に入るとリーシャの姿は無く、ベッドが盛り上がりつつもぞもぞと動いていた。

「リーシャ、大丈夫…？」

「はあ…はあ…。」

ベッドに近づくと、女性らしい甘い匂いが漂ってくる。

(これは…まさか…)

近づけば近づくほど匂いは強くなっていく。目の前まで来ると、水音まで聞こえてくる。

(毛布を取っていいのか…？どうなってるのかはもう十中八九分かっているけど、気になる…！リーシャがそんなことをしてるなんて…！)

「リーシャ…毛布取るよ…？」

やはり返事が無い。意を決して毛布を取ると――

「はあ♡はあ♡んんんん♡♡♡♡はっ♡はあっ♡はっ♡はれっ、

団長、さん…？」

「や、やあ…。」

「団長さんが見える…はあ♡はあ♡団長さん♡団長さん♡んんんん♡♡♡♡♡♡♡♡」

グランが自身の妄想か何かの幻覚だと思っているのか、リーシャは自慰の手を一切止めない。既に下半身の辺りはびちゃびちゃになり、何度も絶頂していたことが分かる。

(なんでこんな…いや、リーシャだって年頃だし、そりやおナニーの1つぐらいしてもおかしくはないけど…。これはちよつと異常だぞ。)

「団長さん♡団長さん♡んあっ♡あっ♡はああっ♡またくるっ♡ああ〜♡♡♡♡♡♡♡♡」

「いっくっ…。」

自分を想って何度も達しているのを見て否応なくグランも興奮してしまおう。

(クリアじゃ治りそうにないな…。仕方ない!)

「リーシャ、しっかりして!」

自身をまさぐっている腕を掴み、目を合わせる。快樂が止まれば正気に戻せるだろう。

「団長さん♡」

「おわっ!?!」

空いていたもう片方の手で掴まれ、ベッドに引つ張り込まれる。

「んうくくくっ♡」

「んぐっ?!?!んっ、んっ、ぷはっ…ちよ、リーシャ!」

(なんだこの感じ…頭がボーツとする…。)

「逃げちゃダメですよ♡はむっ♡んちゆ♡ちゆ♡」

(リーシャのこの変わり様、薬か何かか…?そういうえばこの前ジータが何か言ってたような…)

「んちゆ♡ちゆぶ♡んるっ♡団長さん♡私のファーストキス、どう

ですか♡」

「はあっ…はあっ…リーシャ…!」

(体が熱い…!やりたい…!ああくそ、何を考えているんだ…でも…!)

グランにも移った熱は既にチンポを痛いほど奮り立たせ、ズボンにテントを張っていた。

「団長さんの熱い…♡ねえ、団長さん♡私のことも抱いてください♡いいですよね?もう何人も関係を持つてるんですから♡」

「だめだリーシャ…!はあっ、はあっ…秩序はどうしちゃったんだよ…!それこそ色々な人と関係を持つてる僕となんて…!」

「そんなの建前ですよ♡好きな人が自分以外の人と夜を過ごすなんてこれ以上耐えられませんでしたから♡でも気づいたんです。私も団長さんと繋がればいいんだって♡」

リーシャが媚びた表情で全身に纏わりつきながら、ズボン越しに擦ってくる。既にカウパーでズボンに染みができるほどに硬くなっ

ていた。

(やりたい…!犯したい…!そうだ…リーシャだつて望んでるんだ…やって何が悪い…!)

「はあっ…はあっ…リーシャ…!」

「きやん♡そんないきなり脱がしたら、ひやあん♡や、あああ♡そんないきなり胸とそこをお♡」

「さっきまで自分でシてたから、もうびちやびちやじゃん…!何想像してたわけ?」

「団長さんと恋人になつていっぱい抱きしめてもらうの想像してましたあ♡」

「意外と乙女だね。それで何回イっちゃったの?」

「分かりません♡はああ♡5回ぐらい…?」

「乙女なのに身体はエッチじゃん…!でもこれから僕とセックスしちやったら乙女じゃなくなっちゃうかもね。」

「はん♡はああ♡セ、セックス…♡団長さんと…♡恋人ですよね♡恋人同士ですることですもんね♡」

トリップしているのか、リーシャの言動は所々不安定だ。しかしグランのほうもわざわざ訂正してやる優しさや余裕も無くなっていた。

「僕とセックスしたら明日からは毎日それを想像しながらオナニーするんだよ。チンポでぐちやぐちやにされて何度も何度も中出しされるのをさ…!」

「何度も…♡チンポで…♡んあっ♡はっ♡あああ♡指激しい♡イっちゃう♡またイっちゃいます♡」

「想像しちやった?イつたらすぐ挿れちやうからね。リーシャの処女ぶち破つてチンポの味覚えさせちやうから!」

「団長さんのチンポで…♡私の処女…♡んあっ♡はっ♡イクっ♡イっちゃう♡」

「ほらいけ!イつたらたくさん抱きしめてあげるよ!」

「私イクます♡イク♡イク♡イクうーっ♡?♡?♡?♡?」

ぷしっ♡ぷしっ♡

「ああっ♡はあっ♡イっちゃった…♡団長さんの指で…♡ああああ

っ♡♡」

じゅぶううう♡♡じゅず♡♡じゅず♡

「あぐっ、あゝっ、ああゝっ♡入ってきてるっ♡はあゝっ♡あゝ♡チンポすごい♡気持ちいい♡」

リーシヤは痛がる様子も一切無くよがっているが、結合部から流れる血が処女であることを明確に物語っていた。何かを施されたのは間違いなく、しかしとうに理性の吹き飛んだ2人にはどうでもいいことだった。

「リーシヤの膣内きつつ…いやばいもう出る、ごめん！」
びゅるるる♡びゅる♡びゅぶ♡

「熱いのが♡？中にいい♡？ああっ♡はっ♡はあああ♡んゝっ♡ああゝ♡イグっ♡？これイグっ♡？ああゝあゝっ♡？」

「すげー気持ちいい…！これ止めらんない…！」

「おぐっ♡？チンポおぐにいい♡？私の全部団長さんのものになってる♡？イグ♡？まらイゝっちやう♡？あゝあゝあゝ♡？」

「リーシヤのトロ顔えろすぎ…！また出る！」

どびゅううう♡びゅるる♡どぢゅ♡どぢゅ♡

「あゝあゝあゝあっ♡？？？？？？中で出すのだから♡？あゝあゝっ♡？あああ♡？イグ♡？イグ♡？イグ♡？」

「ほらもつとイカせてあげるよ！」

「突いちやだめっ♡？だめっ♡？イグ♡？それイグ♡？あああゝあゝっ♡？イグゝゝゝっ♡？？？？？」

——1時間後

「じゅるる♡じゅぼっ♡じゅぼっ♡じゅうううゝっ♡♡じゅぼっ♡チンポおいひい♡」

「あーやば…チンポ気に入った？」

「はい♡おまんこじゅぼじゅぼされるの気持ちよくて、何度もびゅーびゅー出せて気に入りました♡」

「じゃあもつと敬意を込めてよ。気持ちよくしてくれるチンポに敬

意を払うのは秩序でしょ?」

「はああ…♡チンポ…♡オチンポ…♡あむっ♡じゆる♡じゅぷ
じゅぽ♡じゆるる♡じゆるるる♡」

「ああ出る…!」

びゅぶううう♡びゅく♡びゅく

「んぶううう♡♡ぎゅ♡♡ぎゅ♡♡ぐっ♡♡ぐっ♡んぶああっ

♡しえーえき、おいひいです…♡♡」

「次はどうしたい?」

「おまんこにオチンポ♡まらじゅぽじゅぽしてください♡」

——3時間後

「はっ♡?あっ♡?はあっ♡?自分で動くの気持ちいい♡?オチンポごりごりって当たってえ♡?」

「それいいよリーシャ!もつと好きに動いていいから!」

「うん♡?こうするとお♡?違うとこ当たっていいのお♡?ああイク♡?イク♡?イクうう♡?」

どびゅううう♡どぐっ♡どぐっ♡

「はああ♡あ♡あっ♡?♡?♡?しえーえき出されるの最高お♡?おお♡おっ♡?♡?」

——6時間後

「ほおっ♡?おっ♡?おっ♡?おっ♡?オチンポイグ♡?オチンポイグ♡?イグううっ♡?♡?♡?しえーえき、しえーえきらしてえ♡?♡?」

「ねえリーシャ…!これからは僕のハメ穴になつてよ…!」

「なるう♡?何でもなるがらあ♡?しえーえき♡?」

「僕がセックスしたいって言ったたら24時間いつでもするんだよ!?!」

「するう♡?するがらあ♡?らして♡?中にいっぱいらしてえ♡」

…♡新しい秩序…♡」

「ちよ、リーシャ、ああっ！」

「昨日あんなに出したのに硬あい…♡はああ…♡」

「リーシャらしくないよこんなの、そうだジータ！ジータがきつと…！」

「私らしいってなんですか？私は私ですよ♡秩序を守るのが私。その秩序が変わっただけです♡団長さんのオチンポで団を一つにまとめる…素晴らしい秩序の完成ですよ♡」

「ほ、本気で言ってる…？」

「当たり前じゃないですか♡団長さんだってこんなにオチンポ硬くしてるくせに♡ほら団長さん専用のハメ穴に入っちゃいますよ♡んっ、はあああ〜♡？♡？♡？挿れただけでいつちやいました…♡」

リーシャは問答無用で挿入するとすぐに腰を淫靡に振り始める。

「オチンポ気持ちいい♡あふっ♡昨日あんなに出したからまだお腹でタップアップしてます♡んああっ♡？」

「リーシャ、ああっ！」

「オチンポ奥に当たる♡昨日は子宮の中に直接、何度も何度も…♡こんな感じに♡♡はあああ♡？入ってるう♡？」

「出ちやうってリーシャ！」

「出してください♡？子宮に直接♡？朝の一番濃いどろっどろの精液♡？びゅーびゅー出していっぱいに♡？私に新しい秩序をください♡？」

びゅるるるる♡びゅーー♡

「はああああっ♡？♡？♡？♡？あっ♡？はあああ♡？しえーえき最っ高おお♡？♡？これで秩序を…♡」

昨日の疲れも残っていたのか、リーシャはグランの上に倒れ込んでしまう。

「すーっ…すーっ…」

「どうすんだよこれ…」

ただ肥大化した問題にグランは頭を抱えたが、リーシャはその上で

幸せそうに眠るのだった。

第8話 グランサイファアの夜の日常♡

「副団長…いえ、ジータさん。なぜこの会議が開かれたか分かりませんか？」

「さ、さあ…。」

グランサイファアのとある一室。何人かの女性団員達が集まり、ボードの前でリーシャが問いかけていた。ちなみにジータだけは椅子に縛り付けられている。

「それは団の秩序を守るためです。何人もの団員が団長さんと肉体関係を持ち、人によっては繰り返しセックスをしています。」

「それはさ、ほら、ストレス解消とか、グランにアピールというか、ね？リーシャだつてシたんでしょ？」

「はい、しました。それはもう一日でたくさん。以前私はセックス自体を防ごうとしていましたが、それは謝罪します。セックスは素晴らしいですから…♡」

自分で言いながらリーシャの頬が少し赤くなる。

「セックスをするなどはもう私も言いません。で…すが!!そもそもセックスをした原因はジータさんが私に薬を盛ったのが元です。何か弁解は？」

「あ、あれはその…リーシャにもセックスの良さを知ってもらいたくてね？ヘルエスさんも何か言ってくださいよお…！」

「確かにわたくしは貴女に夜のための薬をと頼まれて渡しましたが、リーシャさんの記載した資料のほどのものではありません。せいぜい体力と持続力の向上程度の物です。」

「既に調査はあがっているんですよジータさん。カリオストロさんなどからも材料を借り、ドクターの力で独自に開発したものですかね？」

「…はい、すみませんでした…。」

がつくりとこうべを項垂れるジータ。完全に自業自得であり、他の団員達も引き気味である。そしてこの場を支配するリーシャの宣告を待つのみとなった。

「しかし私は別にジータさんを糾弾したいわけではありません。この会議の主題の通り、団の秩序を守りたいだけです。そしてそれはこの2点です。」

そう言うとりーシヤはボードを裏返す。

・薬などを調達、開発した場合は全員にシェアすること
・セックスをした場合は申告し、数量が偏りすぎないようにすること

「1つ目はもう分かりますね?」

有無を言わさないといわんばかりのとりーシヤの口調に全員がジータをチラ見しながら同意する。

「そして2つ目ですが、団長さんとのセックスに対してそれぞれが多様な意義を持っていると私は考えています。まあ大体は似たようなものですが…。互いに抜け駆けしたり回数で嫉妬したりすることが無いようにするためです。」

「そんな正直に言うとは思えないけどねえ。」

「ゼタさん、団長さんにも定期的に確認しますので。」

「ならいいけど。記憶がぶっ飛ばなきや大丈夫か。」

その後も質疑応答や新たな策定も継ぎ足し、ひとまずの方針を固めていく。ただ競うのみで誰もまとめようとしなかった彼女達をりーシヤは秩序に治めてしまっていた。

「ふう、皆さんありがとうございました。まだ荒いところはあると思いますが、団長さんにも共有して進めていこうと思います。…ああ、ところでジータさん。」

「なに?」

「ジータさんは断トツでセックスしているのでしばらく禁止です♡」

「のああああ!!」

室内にジータの叫びが木霊したが、それを助ける者は誰もいなかった。



夜。グランの部屋の前に人影が近づいていた。人影がドアの前まで辿り着くと、中から音が漏れていた。

「あつ♡はあつ♡どうですか団長さん♡気持ちよくできてますか♡んっ♡はあぁ♡」

「ああ、いいよディアンサ。もう随分上手くなつたんじゃない？」

「団長さんのせいでこんなエッチな専属アイドルになっちゃったんですからね♡ほらこうやって腰を前後に動かして…♡っはあぁあ♡？これ気持ちいい♡？♡？」

「ディアンサはチンポ好きだもんね。」

「はあっ♡んっ♡はあ♡もう、好きですよ♡初めてシたときにたくさん教え込まれちゃいましたから♡寂しいときは部屋で一人でシちやつてます♡」

「へえ、どんな風にしてるの？」

「もちろん、団長さんとすること想像して、ですよ♡もう限界って言つても何度も突かれて中出しされてもっ♡と好きにさせられて…♡それからペットになれって言われて毎日♡ご奉仕させられるとか♡」

「そうして欲しいの？」

「ただの妄想ですよ♡昨日の、ですけどね♡あとは5人みんなで団長さんにご奉仕したりとか、イクニアの方達に襲われちゃったりとか…あつ♡チンポ反応しましたね♡大丈夫ですよ♡私が本当にエッチするのは団長さんだけですから♡」

「挑発したらどうなるか教えてあげよっか？」

「突き上げて中出しして好きにしちゃうなんて、そんな酷いこと団長さんはしないですよね♡」

「残念、不正解っど！」

「ばちゅん♡♡」

「んはあんっ♡？♡？そんな、酷いです♡？私は団長さんのことが好きですからあ♡？だから、あぁあん♡？」

「僕のが好きならもっ♡と好きになっても問題無いでしょ？それとも実は嫌なのかな。」

「好きです♥?好きですからああ♥?そんな突き上げちゃ、いつちやいます♥?だめ、あつ、はああああ♥?」

「ところでさ、さつきまでディアンサがエツチなダンスしてたせいでもう出ちやいそうだし、このまま出すね。」

「待って♥まだ心の準備が…♥」

びゅぶゅううう♥びゅううう♥びゅく♥びゅくく♥

「ああああああ♥?♥?♥?♥?♥?はあああ♥?♥?♥?そんな、いきなりい♥?♥?♥?イクうー♥?♥?」

「イイ顔になってるよ。好きになった?嫌いになった?」

「はあつ♥?はあつ♥?もう、知らないです…♥?」

「好きになったならおねだりしてよ。嫌いになったなら抜いてって言うて。」

「いじわる…♥?じゃあその代わりに、その通りにしてくださいね♥?」

「うん、いいよ。」

「じゃあ…♥?私のエツチなここ、団長さんのチンポで突き上げて、溢れるぐらい中出して欲しいです♥?いつでも生ハメOKな専属アイドルにしてください♥?」

「もうとつくになってるくせに!」

「んやあああ♥?♥?はっ♥?あつ♥?はげしっ♥?さつき出されたのが中でちやぶちやぶって♥?ひあつ♥?はああ♥?」

ばちゅ♥ばちゅ♥ばちゅ♥ずじゅん♥じゅず♥

「イク♥?チンポ奥まで届いてイク♥?エツチな音たくさん出て♥

?気持ちいい♥?団長さんの本気チンポ気持ちいいよお♥?」

「まだまだ…!」

「ああ〜〜〜♥?♥?♥?チンポすごいよおお♥?イク♥?イク♥?またイク♥?ああ〜〜〜♥?♥?」

「これからはオナニーするときは僕のことだけ考えるんだよ!」

「はいい♥?これからは団長さんとのエツチだけ想像します♥?」

「もつとエツチなこと勉強するんだよ!」

「します♥?もつといっぱい団長さんとエツチするために勉強しま

す♡?」

「最後にチンポ大好きって言って!」

「チンポ大好きいゝゝゝ♡?♡?♡?」

びゅうううう♡♡びゆるるる♡びゅぶ♡びゅぶ♡

「あはあゝゝゝ♡?♡?♡?♡?♡?はあああ♡?♡?あつ♡?

はっ♡?ああっ♡?イクの止まらない♡?はあっ♡?あっ♡?」

「おっと、大丈夫?」

「はあっ…♡?んっ…♡?ごめんなさい、力抜けちゃったみたいで

す…♡」

「僕の方こそごめん、ちょっとやりすぎちゃったよ。」

「ふふっ、いいんですよ♡ぜくんぶホントなんですから♡」

「ぜ、全部…?」

「さあ?ご想像におまかせしちゃいます♡それより、まだ団長さんの、硬いままですよ♡次はどうしましょうか♡」

覗き見ていた人影は足元に水滴を垂らしながら、いつの間にか部屋の前から去っていた。



「ほお♡♡?お♡う♡?団長殿、少し休ませへ♡?お♡っ♡?お♡

おっ♡?ふうっ♡?」

「一晩好きにしていって約束じゃないですか。」

「それはそうですがあ♡?♡?限度というものがあります♡?こんな獣みたいに後ろから犯して、もう2回も中に出したではありませんかああ♡?♡?」

「互いに責めて先にいったほうが負けって言い出したのはヘルエスさんのほうですよ?まさかあんなに早くイクとは思ってなかったですけどね。」

「はひっ♡?はっ♡?団長殿があんなに上手くなってるなんてえ♡

?あゝあああ♡?またイク♡?イってしまいます♡?ああああああ♡?♡?」

「ううん、いいよ♡団長ちゃん本当におっぱい好きなんだから♡お姉さんのおっぱいでも収まりきらないぐらい大きいおちんちん、挟んであげる♡」

「あゝ、やわらか…。」

「団長ちゃんのおちんちんは熱くて硬いよ…♡んしよ、んっ♡ちゅちゅぽ♡ちゅん♡んっ♡ろう？らんちようちゃん？」

「それ気持ちいいです…。」

「んはあ♡団長ちゃんがいつもおっぱいでさせるから、上手になっちゃったんだからね、パイ♡イズ♡リ♡フェラ♡♡んぽっ♡んっ♡ちゅぽ♡ちゅ♡ん♡ぽっ♡」

「すぐ出ちやいそう…。」

「いいんだよ♡お姉さんのおっぱいにびゅゅっ♡っしてしちゃってもそれともお口に出したい？せくんぶ飲んであげるからね♡」

「じゃあ、両方…。」

「欲張りさんなんだから♡でも団長ちゃんのおちんちんなら平気だもんね♡ほら、まずはおっぱいに…ぎゅゅっ♡♡」

「うああ、出る…。」

びゅぶぶぶぶ♡♡びゅぶぶ♡びゅぶ♡どびゅ♡どぶっ♡

「団長ちゃんのミルクあっっ♡♡おっぱいに染み付いちやいそうれろっ♡れろっ♡はむっ♡んぢゅっ♡♡」

びゅく♡びゅく♡びゅ♡

「んくっ♡んくっ♡くっ♡はああ♡団長ちゃんのミルク濃くて美味しい♡お姉さんにもっと飲ませて♡んじゅ♡じゅぶ♡じゅる♡♡」

「夢中でしゃぶりついてる時の顔エロすぎ…。」

「らっへおいひいんだもん♡ほひゃ、らひて♡ぢゆる♡ぢゆる♡ぢゅば♡ぢゅうううう♡♡」

「また出る…。」

どびゅ♡どびゅ♡びゅるる♡

「んっ♡んっ♡んううっ♡ぶはあ♡ぜんぶ飲んじやった♡」

「搾り取られた…。」

「うふふ、でもおちんちんはまだまだやる気みたいだね♡今度は

こっちのお口にたくさん出して欲しいな♡」

ぱん♡ぱん♡ぱん♡ぱん♡

「はっ♡?あっ♡?はあっ♡?団長さんのチンポ気持ちいい♡?奥までみっちり当たって、団長さんの形にされるの気持ちいいです♡?」

「レオナさんの腰使いやば…!」

「団長さんが私をこんな女に変えたんですよ♡チンポに自分から跨がって腰を揺らしちやう女に♡あっ♡?はあああ♡?」

「じゃあ責任取って相手しないといけないですね…!」

「やあああ♡?♡?そこ突き上げたらだめです♡?んはあっ♡?すぐイっちやいます♡?イク♡?んやああ♡?ああ〜っ♡?♡?♡?」

「締め付けられて、出る…!」

「今だめっ♡?今出されたら♡?今はあっ♡?」

どびゅぶぶ♡♡びゅぶ♡びゅく♡びゅく♡

「んはああああ〜っ♡?♡?♡?♡?イクイク♡?イク〜っ♡?♡?中で出されるとイっちやうのおお♡?♡?はひんっ♡?はっ♡?あああっ♡?」

「はあっ、はあっ、レオナさん凄いエロい顔してますよ…!」

「だって団長さんが中でびゅーびゅー出すからあ♡?幸せになっちゃうんですよ♡?私で感じてくれて愛してくれてるって一番分かる瞬間なんですから♡?んちゅ♡?ちゅ♡?」

「はむっ…んっ…ぷはっ、次はキスしながらですか?」

「今のはたくさんイカせてくれたお礼です♡キスしながらもいいですよけど、まだまだ上で搾り取っちやいますから♡夜は長いんですよ」

「お、お手柔らかにお願いしますよ…。」

「そんなこと言って最後には私のこと啼かせちやうって知ってるんですからね♡本当に酷い人なんですから♡…やああっ♡?ごめんな

さいっ♡?そんな強く突き上げたら、またああ♡?♡?」



「ほら、今日はどっちからハメんの♡」

「こ、この前はゼタが先だったから、もちろん私だよな♡」

「うくん、どうしよっかなく…。ベアさんが上手く誘えたらいいですよ。」

「チャンスじゃんベア♡あたしらこんな四つん這いで拘束されてるから団長任せにするしかないんだし♡こーんな耳まで着けてさ♡」

「わ、わかっているよ…♡団長のチンポ欲しくてぐちゃぐちゃに濡れてる私のおまんこに突き刺して、ぱんぱんして欲しい…♡ワン♡♡♡♡」

「やるじゃないですか…!」

「ああああっ♡?いきなり奥までできたあ♡?これされると、すぐダメになる♡?はっ♡?ああ♡♡?」

「ベアは乱暴なのが好きだもんね♡でも今日のあたしらは雌犬なんだから、忘れちゃだめ♡ワン♡」

「そうですね。忘れちゃったら抜いちやいますからね。」

「わかってる…♡ワン♡んふああ♡?スゴいぱん♡ぱん♡って鳴って、わざとだろおお♡恥ずかしい♡ワン♡」

「こっちの団長専用の雌犬おまんこも弄って欲しい♡ワン♡ワン♡ワン♡」

「そんなにお尻振ってしょうがない犬ですね。うわ、もうぐちよぐちよじゃないですか。」

「ああん♡雄の前で発情したら当然♡ワン♡食べやすいおまんこになる♡ワン♡」

「はっ♡?あっ♡?ああっ♡?チンポ激しい♡ワン♡?弱いとこばっか当たってすぐイカされちゃう♡ワン♡?ふああああ♡?」

「んっ♡あっ♡今日の団長チンポどう?って聞くまでもないか♡ベアったら舌出しちゃって完全に雌犬だ♡ワン♡」

「はあっ♡?はんっ♡?チンポ奥にゴツゴツ当たってしゅごいんだよおお♡?♡?もう、イカされて、はあっ♡?それダメなんだあ♡?」

ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡…ずるっ♡

「はれっ…なんで…♡」

「忘れちゃだめって言ったじゃないですか。ね、ゼタさん。」

「そうだワン♡すぐに挿れ直して欲しかったら…分かるワン?」

「ああ…わ、分かったワン♡私の雌犬おまんこに団長のおちんぽもつとズボズボして欲しいワン♡」

「それだけでいいんですか?」

「はあっ♡はあっ♡種付け♡種付けして欲しいんだワン♡奥まで押し付けてパンパンになるぐらいいい♡?♡?♡?」

ばちゅ♡ばちゅ♡ばじゅ♡ばぢゅ♡

「はひいいいい♡?♡?イグ♡?これイッっぢやう♡?あゝあゝあゝ

あっ♡?かはっ♡?はあゝあゝゝっ♡?♡?」

「うわ、やっぱ…♡団長のチンポでキマつちやつてるじゃん♡こんな状態で中出しされたら壊れちゃうでしょ♡」

「次はゼタさんがこうなるんですから、しっかり予習してくださいね。」

「分かってるって♡年上の女2人捕まえてチンポ堕ちさせるなんて、ホント悪い団長なんだから♡」

「先に襲って来といてよく言いますよ…!」

びゅるるる♡びゅぶぶぶ♡どぐっ♡どぐっ♡どぢゅ♡

「お〃お〃お〃お〃お〃っっ♡?♡?♡?♡?♡?ほお〃っ♡?♡

?お〃っ♡?あゝっ♡?あゝあゝっ…♡?種付け、凄すぎるワン…♡

?お〃っ…♡?」

「あーあ、完全にノックダウンね♡ちよ、団長のチンポまだバツキバキじゃん♡えっぐ…♡それであたしの雌犬おまんこにもマーキングしちゃうんだ♡」

「して欲しいですか?」

「とーぜんでしょ♡ほら見てよ♡あたしの雌犬おまんこ、パクパク

してるでしょ？目の前であんな種付け交尾見せつけられたらこうなっちゃうんだって♡」

「じゃあベアさんと同じように誘ってくださいよ。」

「あたしの種付け待ちトロット口おまんこにい♡団長の…ご主人様のえっぐいデカチンポ突っ込んでえ♡パンパン調教して欲しいワン♡」

ぐちゅちゅちゅぢゅ♡じゅぶ♡ぢゅぶ♡ぢゅぼ♡

「あはあああゝゝゝ♡？きたあゝゝゝ♡？♡？ゴリゴリって奥まで届いて、キクうゝゝ♡？♡？これ知っちゃったらやつぱ他のなんて無理だってえ♡？？」

「ゼタさんって何人ぐらいとシたことあるんですか？」

「なに、気になんの？嫉妬した？安心しなよ♡団長が一番だからさ♡」

「ならよかったですけど…！」

「んああん♡？そんなに心配なら、あたしのこと本気でペットにしてみなよ…♡ご・主・人・様♡」

ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばぢゅ♡じゅご♡じゅ♡じゅぼ♡

「んああああゝゝゝ♡？♡？♡？これイク♡？イクっ♡？♡？これやばい♡？団長のチンポ子宮まで入ってきてる♡？」

パシッ♡

「んいい♡？♡？なにすん…」

パシイン♡

「はひいん♡？♡？」

パシッ♡パシッ♡

「あっ♡？はああん♡？♡？」

「団長じゃなくてご主人様、でしょ？」

「あ、ああ…♡？♡？ご主人様…♡？」

「雌犬のご主人様をお願いしたいことあるんじゃない？」

「は、はい…♡？卑しい雌犬のおまんこにい♡？はああ…♡？♡？ご主人様のあつつくて濃おい精液い♡？たっぷり注いで欲しいワン♡？」

「うんうん、ペットのお願いは聞いてあげないとね…！」

「ああ~~~~♡?♡?♡?あ~~~~♡?はあっ♡?♡?チンポ♡?
チンポすごい♡?羨られちゃう♡?」

「よし、頑張ったペットにご褒美あげますからね!」
どぶぶぶぶ♡♡どぶゆびゆ♡どぶゆ♡びゆ♡びゆ♡

「あはあ~~~~♡?♡?♡?♡?イグツ♡?イググ~~~~♡?
♡?♡?♡?♡?ご褒美すごい♡?♡?あたしホントに団長の
ペットになっちゃうよお……♡?」

■

「リーシャもやっぱりする……んだよね。」

「当然じゃないですか。あの夜に誓ったんですよ?団長さん専用の
ハメ穴になるって……♡♡」

「あの時はジータのせいだ……んぷっ!」

「んちゅ♡ちゅぶ♡ちゅぱ♡ちゅず♡はあっ♡そんなのもう関係あ
りません。私のこの気持ちは本物なんですから♡」

「リーシャ……。」

「でも、今日は普通のセックスがしたいです♡あの夜は全部が滅茶
苦茶で……その、凄い気持ちよかったですけど、良い思い出とは思いつ
らいというか……。」

「うん、やり直そう。僕もちゃんとリーシャとしたい。」

「団長さん……♡ちゅう♡ちゅ♡んむっ♡ちゅ♡んはあ♡団長さんの
オチンポ、もう硬くなってます……♡♡」

「リーシャこそ、もうすごい濡れてるよ。」

「身体の方はもう戻れないみたいですね……♡今から団長さんとセッ
クスするって思ったら溢れて止まらないんです♡早く挿れてくださ
い♡」

「うん、挿れるよ……。」

ずぶぶぶぶ♡♡

「はああ~~~~♡?♡?♡?オチンポがずぶぶぶってえ♡?これだけで
イってしまいそうです♡?はああ♡?はあ♡?」

「しばらく待とうか？」

「大丈夫です♡もうこれが私の普通になってしまったみたいですか
ら♡」

「分かった、じゃあ動くよ。」

「はい♡はあっ♡？んっ♡？あああ♡？やつ♡？はあん♡？オチン
ポ気持ちいいです♡ああん♡？もうイキそ♡？はああ♡？私だめみ
たいです♡すぐイっちゃう♡？ああ〜♡？？？」

ぷしやああ♡♡

「こんなすぐイっちゃうなんてえ…♡？♡？私の身体、オチンポ大
好きみたいです…♡？♡？」

「トロけてるリーシャ可愛いよ…口開けて。」

「んちゅ♡ちゅぶ♡ぢゅんるっ♡ぢゅう♡ぢゅうう♡ぢゅず♡ん
ふあっ♡んぶっ♡んんっ♡んううっ♡♡？」

ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅん♡ぺちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ

「んはあっ♡？はあっ♡？あああ♡？キスしながらオチンポ凄い♡
？私の全部団長さんのものになったみたいで…♡？」

「次で最後までいくからね。」

「は、はい…♡♡ちゅぶ♡ちゅ♡ぢゅる♡ぢゅぶ♡んぶっ♡んっ♡
ぢゅう♡ちゅる♡ちゅう♡んちや♡んぶっ♡ちゅうう♡♡」

びゅうううう♡♡びゅるるる♡びゅぶ♡びゅぶ♡びゅ

「んふううううう♡♡？♡？♡？♡？♡？ふうっ♡？♡？♡？♡？
んんううっ♡？♡？んん〜♡？♡？んはあっ♡？♡？はあっ♡
？はあっ♡？はひっ…♡？はっ…♡？」

「ふううう…どうだった？その顔だと聞くまでも無さそうだけど。」

「きもひよかつらです…♡♡オチンポでぱちゅん♡ぱちゅん♡って
されながらきしゅいっぱいして…♡たくさんびゅー♡♡ってされ

て…♡凄かった…♡」

「良い思い出になった？」

「なりました…♡」

「次はどうしよつか。」

「ん…じゃあ次は…ハメ穴として使って欲しいです♡？こんなに気

持ちよかったのに私の身体は全然足りてないんです♥? いっぱい犯して中に出してくださいね♥?♥?」

第9話 クラリスとビターデートの後で♡

「だんちよーのおちんちん気持ちいいよお♡?あ、そこ♡?だんちよー♡?だんちよー♡?イク♡?イっちゃう♡?イクー♡?♡?」

一人だけの部屋でクラリスの身体がビクビクと震える。しばらくして挿れていたフラスコの先を抜き、横のテーブルに雑に置いて一息つく。

「はああ…またやっちゃった…」

グランの部屋をたまたま覗いてしまった日から、クラリスの一人遊びは激しくなっていた。

(最初はディアンサさんと付き合ってるのかなって思って、辛くて泣きそうだったけどスゴい興奮して…。忘れようと思ったけど気づいたら覗きに行つて、今度はヘルエスさんで…。)

思い起こしていると再び身体は火照り、手は下のほうへと伸びていく。

「はあ♡?あっ♡?んっ♡?はああ♡?ダメ、だんちよー♡?イったばかりだから♡?んああ♡?やああ♡?」

(うちもだんちよーとシたい…けど、どうすればいいのかわからないし…。つていうか、エッチなことだけじゃなくてデートとかさういうこともしたいし…。うう…。)

何度か絶頂した後には決まって自己嫌悪に陥ってしまう。こんなことをしている今も誰かがグランとセックスしているのだと頭では分かっているのである。

「はああ…ししよー…」

何の意味も無い言葉が口から出る。こんなことを相談したらドヤされるに決まっている。

「ん…もう一回だけ…」

絶頂を繰り返すうちに体力を使い切つていつの間にか眠ってしまった。それが最近のクラリスの一日の終わりだった。

「おい馬鹿弟子！聞いてんのか!？」

「わわ、ごめんししよー！何だったつけ…?」

「はあー、お前なあ…。最近ボーツとしすぎだぞ。師匠の授業がそんなに退屈か?」

「そ、そういう訳じゃないんだけど…。ちよつと寝不足で…。」

「寝不足？徹夜は美少女の敵だぞ。やめとけやめとけ。」

「う、うちだつてそうしたいけど…。考え事してたら頭ぐるぐるしちゃつて…。」

「はっはくん、グランか。」

「だだだだ、だんちよーは関係無いし!？」

「今更師匠にグランを想つてることなんざ隠しても意味ねえだろうが。」

「ううう、そうだけどお…!」

口でも錬金術でも敵うはずもなく、クラリスは圧倒されてしまう。

「にしても夜にグランのことをねえ…ああ、なるほど…ハツキリ言うがクラリス、オナニーしてるだろ。」

「つつつつ!!? ななななに言つてんのししよー!!? そんなわけないじゃん!?! セクハラだよ！いくらご先祖様だからつてさあ!?!」

「すんすん…：そーいやちよつと匂うな…。」

「えつつ!?! うそつ!?! ちゃんとお風呂入ったのに!?!」

「嘘だ。」

「あああああつ!?!」

自爆したクラリスは頭を抱えて涙目であり、かたやカリオストロはニヤついている。

「ま、いじるのはこれぐらいにしといてオレ様が手を貸してやろう。」

「手を貸す…?？」

「せっかくバレンタインに頑張った後、進展の無いヘタレの背中を押してやろうつてことだ。」

「ぐっ…悔しいけど言い返せない…。」

「まずはお前の部屋に行くぞ。」

「うえええっ!?!ベ、ベベ、別にここでもいいんじゃないかな?…なんて…。」

「あん?まさかそういう道具でも散らかってんのか?」

「違うし!?!うちそんなの持ってないから!」

「分かった分かった。ほら、グズグズしてないで行くぞ。」

「あーもー!」



「ちよつと匂うな…。」

「やめて、嗅がないでよお、ししよー!」

「別に何の匂いとは言っていないけどな。まあいい。…カリオストロ先生のへタレのためのベッドイン講座☆はっじまつるよー☆」

「ううっ…もう嫌な予感がしてきた…。」

「それじゃあ早速、錬金術で練習台を用意しまーす☆」

「うっ、相変わらず凄い再現度…!」

グランの等身大フィギュアを作り出すと、カリオストロはその正面に移動する。

「さてと、まずはオレ様が手本を見せてやる。よく見ておけよ?」

「ごくり…」

カリオストロは等身大フィギュアの前でモジモジしながら顔を赤らめて目を泳がせながら言葉を告げる。

「グ、グラン…来てくれたんだ…♡その、カリオストロね、グランのこと考えてると胸が一杯になって眠れないんだ…♡グランが団長なのは分かってるけど、止められないの…!だからね、今日だけでいいから、カリオストロのこと、抱き締めてほしいの…♡」

「うわ、ししよーが元々男なの思い出したら、うち怖くなってきたよ…。」

「喧嘩売ってんのか?」

「ごめんなさい…。で、でも、うちにこんな無理だよ…恥ずかしく
ぎるし…。」

「つべこべ言う暇あったらとにかく一回やれ！師匠命令だ！」

「ううっ…やっぱり横暴だー！」

愚痴りながらも逃げられないクラリスは等身大ファイギュアの前に
立つ。

「ああ、あ、あのね、だんちよー。こんな夜に呼んだのはね…うち、
その…だんちよーと…だんちよーのこと…えと…眠れなくて…う
うっ…。だんちよーと…うあーっ!!無理!無理無理!!恥
ずかしすぎて死にそうだよお！」

「ったく、前より酷いな。」

「そんなこと言われてもお…。バレンタインよりもやばいよお…。」

「この際だからハッキリ言うが、他の奴らはこんなステップ飛び越
えてグランとよろしくやってるんだぞ。今のお前は周回遅れの負け
犬状態だからな。」

「…っっ!!」

カリオストロに指摘され、クラリスの脳内にいくつもの情景がフ
ラッシュバックして身体を熱くし、無意識に目に涙が浮かぶ。

「分かってるもん…。今更言わなくてもいいじゃん…。そんなの、
うちだって知ってるもん…。」

「知ってたのか…ちっ、悪い、言い過ぎた。泣くな。泣いたってしよ
うがねえんだから。泣くなら男の前だけにしとけ。」

「ししよーだつて男みたいなものじゃん…。」

「オレ様は美少女錬金術師だ。仕方ねえ、ここは錬金術師らしいア
プローチに変えようじゃねえか。」

「錬金術師らしく…?」

「まあ任せとけ。ヘタレでも絶対に出来る必勝法だからな。」



「クラリス、わざわざ部屋に呼んでどうしたの?」

「あつ、だ、だんちよー！来てくれたんだ！その、お茶用意してあるから、飲んでくれるかな!?ちよつとクッキー出すから…!」

「うん。クラリスが淹れたの?」

「そ、そうなんだ！うちも出来るようになろうかなって!」

「へえ…んっ…美味しいよ。」

「クッキー持ってきたよ!そ、その、変なところとか無い…?何か、熱くなるとか…。」

「ん?特に無いよ。良く出来てるって。クラリスも自分で飲んでみなよ。」

「う、うん…。」

カリオストロの授けた必勝法。すなわち「グランに惚れ薬を盛ろう大作戦☆」にクラリスは猛反対したが、あの手この手で言いくるめられて実行してしまっていた。

(あ、あれ…?ししよーの話だと飲んで最初に見た異性が気になって、きゅ、求愛しちゃうらしいんだけど…。でも、なんかホツとしたかも…。やっぱりそんなズルみたいなダメだもんね。)

後悔と罪悪感で正面からグランを見れなかったが、失敗したことに気づいて気が緩んで普通の談笑へと移ろうと席につく。

「んっ…美味しく出来ててよかったよ!ま、まあ、味見はしてあるけどね!」

「あはは、そりやそうだよね。」

(言えない…味見してないなんて言えない…!あれ、そういえばししよーが何か言ってたような…)

『ああ、そうそう、この薬だが、元々好意を持っていた場合は効果が無いからな。一応、錬金術としての講義だ。』

(もももも、もしかしてだんちよーが何も変わらないのってそういうこと?!えっっ?!うちのこと、えっ!!?)

1つの結論に辿り着いたクラリスは急激に全身が熱くなり、視線がグランに合ったまま動かなくなる。いや、動けなくなっていた。

「どうかした?」

「なな、なんでもないよ!」

「そう？おつ、クッキーも合ってるよ。良く出来てるね。」

「で、でしょー!?最近頑張ってるんだー、あは、あははは…。」

(ダメ、もう無理…!だんちよーがそうだって思ったら頭フットーしそう…!!)

「ああ、あのさ、だんちよー!!」

「ん?どうしたの?」

「うう、う、うちの、うちのこと…!こと…!」

「こと…?」

(言うんだうち…!今度こそ…!)

「うちの言伝で、手伝ってくれないかな!?」

「ことづて?」

「そ、そーなんだ!ししよーから言われたもの買うの忘れてたんだよつーお願いー!」

「うん、ご馳走してもらったしいいよ。」

(ううつ…ダメだったよししよー…。うちには…。)

「じゃあ、遅くならないうちに行こうか。まだ夕方だからお店もやってるだろうし。」

「うえっ!?」



(拝啓、お師匠様。うちは今だんちよーと夕暮れの町を2人きりで歩いていきます。頭が真っ白です。…こんな無理だよおー!!助けてししよー!)

「あの店でいいかな?」

「へっ?あああつ、うん!薬術専門店なら売ってると思う!」

「何買うんだっけ?一緒に探すよ。」

「え、えと、ラクリモサと…」

「お金払っとくよ。後でカリオストロに言っとくから。」

「あああ、大丈夫!うちがもうお金貰ってるから!ね!」

そのまままた悶々としながら、半ば上の空でよく使う薬草や薬品の

購入まで済んでしまう。

「じゃあ、帰ろうか。」

「そうだね…。」

「すみませーん、オマケ忘れてましたー!」

「あ、取りに行きますー!ちよつと待っててね。」

「う、うん…。」

(ううつ、結局うち、何もできてない…。また何話せばいいか分からないままだよ…。うち、全然前に進めてない…。ししよーに言われた通り、うちつて負け犬なのかな…。)

「へいへい彼女さんよお!そんな暗い顔してるぐらいなら、あんな彼氏ほつといて俺らと遊ばない?」

「へっ?」

「買い物帰り?薬術専門店なんて行くような辛気臭い奴じや楽しくないんなら俺らが楽しませてやるぜ?彼氏さんの代わりによお。」

「か、か、か、彼氏!?だんちよーがうちの!?!つつつつ!!ちがつ、えと、嫌じゃないけど、じゃなくて…えと…」

「ほら、来いよ!あいつなんて別にどうでもいいんだろ!」

「うわっ、ちよつと!や、やめ…」

そのとき、クラリスを掴んでいた腕を横から別の腕が捻り上げる。

「僕の大事な子に何してくれてるのかな?」

「ちっ、戻ってきやがったか…」

「こんな草野郎、畳んじまえ!」

「店にはこの子のために来たんだけど…それ、侮辱ってことでいいんだよね?容赦はしないよ。」

「ああ?3対1でイモが何言って…」

チンピラが言い終わる前にグランの手刀が入り、一撃で動かなくなる。

「な、なんだこいつ…!やっちまえ!」

「おらあああ!」

「ナ、ナイフ!?危ない!」

「こんな奴らに僕は負けないよ。」

同時に襲いかかってきたチンピラ達も瞬く間に素手で叩き伏せ無力化する。数多の修羅場を潜り抜けてきたグランには造作もないことだった。

「ごめん、クラリス。大丈夫だった？」

「う、うんっ！でも、うちがブーツとしてたから…。」

「僕の方こそ、少しの間でも夜に女の子一人にさせたのは間違いだったよ。本当にごめん。」

「いいって！そ、それよりさ、その…さつき言ってた”大事な子”って、どういう意味…かな？」

（う、うち言っちゃった…今完璧な流れだよ…！だんちよーだって今だって思ってるはず…！最高のタイミグだよね…!!）

「ん？大事な団員ってことだけど…危ない奴らにできるだけ素性が知られないようにしたかったし。」

「へっ？…えっ？…あー、へー、そうなんだー…そ、そうだよー…あは、あははは…。」

（どういうことなのししよー!!おかしいよ、これ絶対おかしいっ!!うち頑張ったのに!!）

そのとき、グランが目の前まで顔を寄せてクラリスにだけ聞こえる声で話しかける。

「クラリスのこと、正直大体分かるからさ…お茶貰ったときに様子がおかしかったからクリアハーブも囓んでたんだ。ごめん。」

「へっ…!?ききき、気づいてたの…!？」

「カリオストロに何か言われたんでしょ？僕から言っておくよ。そんなことしたって、僕にはそもそもクラリスと…そういう関係になる資格なんて無いって。」

（だんちよーも色んな人と関係持ってるの気にしてるんだ…。そうだよ、うちがもし団長だったら同じこと考えてたかも…。でも…!）

「そんなこと…そんなことないっ!!だんちよーが否定しないでよ…!うち、うち、そんなこと言われたら悲しいよ…!うちのこの気持ち否定しないでよっ…!!好きになるのに資格なんていらなくていいよ」

…!？」

「つつ!!ごめん、クラリス…。」

「うち、だんちよーのこと…!だんちよーのこと、好きだもん!どんなうちも受け入れて、助けて、守ってくれるだんちよーのことが好きだもん!みんなのこといっつも気にかけて大切に思ってくれてるだんちよーのことが好きだもん!うちのこの気持ちぐらい、ぶつけさせてよ…!」

グランは激しく叫ぶクラリスを無言で抱き締める。周囲の視線がとてつもなく痛いのが気にならなかった。

(へ?あれ?だんちよーに抱き締められてる??あ、ああああっ!!)ううっ、うち、言っちゃってる!?うそっ!?やり直したいっ…!ああああっ…!)

「そうだよね…。僕、クラリスを傷つけたくないって思ってたさ…クラリスの気持ちにちゃんと正面から向き合えてなかった。」

「だ、だんちよー…。」

「でも、僕は…クラリスも知ってるかもしれないけど、他の団員とも…」

「うん、知ってるよ…。そ、その、見ちゃったことあるし…。」

「うっ、そ、そうなんだ…。それで、僕はイスタルシアを目指す団長だから、今はまだ特定の誰かと特別な関係になることはできない。それでも構わないなら…もう一度言っただけいい。」

そう言うところグランは一步下がってクラリスを見つめる。

(うち、今ならちゃんとと言える気がする…!だんちよーの気持ちも分かって、うちの気持ちもハッキリして、みんなが進んでるのも分かって、止まってなんかいられないんだ!)

「う、うち!うちは!だんちよーのことが、だんちよーのことが好きです!大好きです!うち、だんちよーともっと繋がりたい!だからうちのこと、抱き締めてください!!」

「ありがとう。」

薄らと涙を浮かべたクラリスを優しく抱き締め、頭を撫でる。近くでは気絶したチンピラが憲兵に運ばれたり、嫉妬や冷やかしかや賛美の

声で溢れたりと滅茶苦茶だったが、グランは気にしなかった。

「うああああっつっ?!?!うううっ、うち、ああああっ?!?こんな、人前で!?めっちゃ恥ずかしい…!!」

「あっはっは、いいじゃない、クラリスが頑張っただけなんだから。」
「いやいやいや!!もーっ!!はやく行こっ!」



「怖かったり痛かったりしたら言ってね?」

「う、うん…。」

グランが顔を近づけると、クラリスは真っ赤な顔をぎゅっとする。

「んっ……!」

唇が触れ合うだけの子供のようで、しかし長い時間そのままのキス。何十秒と続くそれはクラリスを熱くしていく。

(優しい…。見てたのと全然違う…。みんな凄かったのに、うちのこと大事にしてくれてるのが分かる…。これだけでもう、幸せすぎるよお…。)

「はあっ…どうかな?」

「うち、今幸せ過ぎてどうにかなりそう…。ね、もつとしよ?」

「うん…はむっ…。」

「んっ…うっ…ちゅぱ♡んっ…ふぁ…ちゅ♡」

再び長いキスに入り、今度は吸い合うように口を動かす。初めての行為にクラリスは更に熱くなり、無意識に身体をモジモジと動かしていた。

(うち、だんちよーとキスしてる…。夢でも妄想でもないんだ…。もつとたくさんしたい♡キスしたい♡)

「んはっ、はあ…。」

「ふあっ♡はー♡はー♡だんちよー…♡」

「そろそろ触るけど、いいかな?」

「あ、う、うん…♡でも、うち…。」

「もつとキスしたい?」

「あうっ、ダメ…かな？」

「じゃあこっち来て。僕に背中預ける感じでさ。」

グランはベッドの頭の方に背を向けて座り、クラリスがそれに背中を預ける形で座る。

「こ、こうかな…？」

「うん。こっち向いて。んっ…」

「んっ、ちゅ…♡ちゅ…♡はっ、はむっ、んちゅ♡んふあん♡ちゅ♡んふあ♡」

(だんちよーの手、うちの身体触ってる…♡服の上からおっぱいゆつくり…♡うち、ホ、ホントにシちやうんだ…♡)

「ぶはっ…痛くない？服の上からだとあんまり分からなくて。」

「ううん、全然平気だよ♡でも、それなら、ちよ、直接…触る？や、やっぱなんでも…」

「うん、触りたい。脱がしていいかな？」

「う、うん…♡」

(すっごい恥ずかしいはずなのに、うちの心臓の音聞こえないや…。だんちよーの声と感触でいっぱいだよお…♡)

「あっ、ふあっ、はあ♡だんちよーの手、やらしいよお…♡」

「嫌？」

「そういうのずるい…♡ねえ、う、うちの、その、どうかな…？」

「触り心地いいよ。」

「ホント？えへへ、じゃ、じゃあ、もっと触って欲しいな♡」

「もちろん。ほら、こっちも…」

「んむっ、ちゅ♡ちゅう♡ちゅむ、んっ、はあっ♡ちゅ♡ちゅぱ♡あむっ、はっ、ちゅづ♡ふあっ♡」

(キスも段々やらしくなってるよお♡あっ、今舌当たっちゃった、これってエッチなやつだよね…い、いっっちゃえ！)

「れろっ♡れろっ♡ちゅぶ♡ちゅう♡ちゅむ、はあ♡だ、だんちよー…これ、やらしすぎるよお…♡」

「はあっ…クラリス、もっとしたいって顔してるよ。」

「うえっ!?そ、そんなことないもん…♡」

くちっ♡

「ひゃうん♡ま、待って、うち、まだ心の準備が…。」

「すごい濡れてるよ。ほら。」

下着に忍ばせた手を戻し、指に愛液の糸がかかっているのを見せつける。

(うちのあそこ、もうこんなに濡れてたんだ…♡やば、意識したらめっちゃ恥ずかしくなってきたかも…ううっ…!)

「クラリス、大丈夫?」

「ふえっ!?だだ、大丈夫だよ!」

「最初に言ったけど、怖かったらやめてもいいんだよ。」

(怖くないって言ったたら嘘になるけど…一番怖いのはここでやめてだんちよーとそれつきりになっちゃうこと。うち、絶対後悔したくない…!)

「…うち、正直言うとな、いま心が震えてるの。けどね、うち、絶対だんちよーと最後までシたい。だから、うちがビビってもやめないでほしいんだ。」

「…うん、分かった。ほら、もっとこっち来て。」

「んっ、ちゅ♡ちゅぶ♡ちゆる♡ちゅぱ♡んふうっ♡んうっ♡ぢゅぶ♡ちゅ♡えろっ♡れろっ♡ちゅぶ♡ぶはあ♡」

(だんちよーの指入ってきてる…♡くちゅくちゅされて、どんどん溢れてきちゃうよお…♡それにこのエッチなキスもあたまポーツとってきて、気持ちいい…♡)

「ちゅむ♡ちゅう♡ぢゅ♡ちゅぱあ♡はうん♡はっ、あああ♡?だ、だんちよー…♡んぢゅう♡ぢゆる♡ぢゅぶ♡んうう♡はああ♡?うち、うちい…♡」

「イキそう?」

顔を真っ赤にしてコクコクと頷くクラリスを更に攻め立てていく。

「それダメ♡うち、うちもお…♡ああイク♡?いつちやうよお♡?だんちよーの指でイカされちゃう♡?ああああああ♡?」

ビクッ♡ビクッ♡とクラリスの身体が震え、グランの手でイカされたことを示す。内股で座っていた両脚がくつつくように閉じられ、

ポーツとした顔で背のグランを見上げていた。

(イっちゃった…♡今まで何度も一人でシタけど、それより断然気持ち良かった…♡)

「ねえ、クラリス。」

「なに、だんちよー…♡」

「その、最後の確認になるけど、最後までシちゃって大丈夫かな？僕もそろそろ限界っていうか。リードしなきゃいけないのにごめん。」

(あつ…♡うちに当たってるコレ、だんちよーの…♡うちでコーフンしてくれてるんだ…♡)

「うん、お、お願いします…♡」

「じゃあ、ちよつと動くね。」

そう言うとグランはクラリスを仰向けに横たわらせて、正常位の体勢になる。

「脱がすよ。」

「う、うん…♡」

ピンクと白が基調の可愛らしい、しかし確実に濡れているパンツを脱がし、自身も全ての服を脱ぐ。そして既に完全に高まっているチンポをクラリスのお腹の上に乗せ、クラリスに見せつける。

(こ、これがだんちよーの…♡近くで見るとこんなに大きいんだ…♡入るかな…でも、みんな気持ちよさそうだったし…♡大丈夫だよね♡)

「最初は痛いだろうけど、出来るだけすぐ慣れるようにするから。」

「うん、だんちよーのこと、信じてるから。来て…！」

ズププ…♡♡

「あつ…♡くううううつ…!!あゝつ、はあつ、あああ…!!
いつ、あーっつ…!!」

「最後まで、いくから…！」

「うんつ、大丈夫だからつ、くううつ…!!ああゝーっつ…!!…
はああ…はああ…はあ…。」

グランの身体がくっついて止まると、クラリスの悲痛な声も収まり、息を整える。その狭い膣内は100%グランのチンポで埋まって

「うあっ♡はっ♡ああっ♡これっ、なんか気持ちいいかもっ♡はぐっ♡あっ♡あああ♡ね、ねえ、だんちよー♡」

「なに?」

「だんちよーのソレ、な、なんて言えばいい、かな…♡うちのも、さ…♡はあう♡だんちよーの、大きくなつた…?」

「クラリスがそんなこと言うから…!」

今なら好きに呼ばせられる、そう分かつて興奮しない男などいないし、グランも例外ではない。そして同時にクラリスの性質はグランの加虐心を煽っていた。

「じゃあさ、今まで覗き見してた中でクラリスが一番恥ずかしいやつにしてみて。」

「うええっ?!いい、一番恥ずかしいの…?!?ううっ…だんちよーのいじわる…♡」

考えやすいようにグランも一旦止まり、クラリスは恥ずかしそうに口元に丸めた手を当てながら声を出す。

「お、おちんちん…♡じゃなくて、う〜くん…♡オチンポ…♡おちんぽ、かな…♡や、やっぱ恥ずかしいよお♡♡」

「クラリスが言い出したんだからさ、最後までやらないと。それでどうしてほしいの?」

「ううっ…♡うちのあそこ…♡お、おまんこを…♡だんちよーのおちんぽでいっぱい突いて欲しいです…♡♡あううう…♡♡」

「おねだりには応えてあげないとね…!」

ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ぐちゅ♡

「んやあああ♡?♡?だんちよーのおちんぽ深い♡?♡?うちのおまんこ、拡がっちゃうよおお♡?♡?」

「クラリスの膣内狭いけど、ピッタリになるまで拡げちゃうから…!」

「いあっ♡?はああうん♡?だんちよーの形にされちゃう♡?だんちよーの形になっちゃう♡?♡ふやあう♡?んあああ♡?」

(だんちよーにパンパンされるの気持ちいいよお♡うち、絶対今変な顔しちゃってる♡手で隠してるから見られてないけど、だんちよー

もよく見たいし…♡)

「こつちも食べちやおうかな。」

「ふえっ…んやあああん♡?♡?♡?そこ、吸っちゃだめ、ふあああ♡?んっ、ああああ♡?」

「ぶはっ…そこっつて?」

「ううっ…♡お、おっぱいに決まってるじゃん…♡?赤ちゃんじゃないんだからああ♡?♡?」

「でも美味しいからなあ。」

「だ、だめなものはだめだつてばああ♡?♡?はううう♡?」

思わずクラリスの両手はグランの頭を抑えるように動いてしまう。グランはその両手を優しく逆の手で取って掴みクロスさせて抵抗できない形にし、ついでに両腕でおっぱいが挟み込まれてより強調される。

「やつとクラリスの可愛い顔が見れたね。」

「あううう…♡?だんちよーずるいよお…♡?」

「初めてなら、ちゃんと顔見てシたいでしょ?」

「そーだけど…♡もう…♡ねえ、だんちよー…♡?」

「今度はなに?」

「出して…いいからね?うちの中に…全部♡」

「つつ…!!」

「んやあああん♡?♡?だんちよー、激しいよお♡?これ、頭まで響いてイっちやう♡?イきゅ♡?イっちやう♡?」

「全部、出すから…!クラリスの膣内に…!」

「うん♡?出して♡?だんちよーの熱いの♡?うちにいっぱいちゃうだい♡?♡?」

びゅるるる♡びゅる♡びゅく♡びゅく♡ぱぢゅ♡どぶっ♡どぶっ♡

♡
「んやあああああん♡?♡?♡?♡?♡?あああうう♡?♡?♡?♡?やああああ♡?♡?♡?」

うちの中にいっぱい♡いっぱい出てるよお♡熱くて、奥まで
きてるうう♡す♡い♡よお♡(♡♡)

「はひっ…♡?はっ…♡?はあっ…♡?はあ…♡?すごかった…♡?あふっ♡?まだ、イってるよお…♡?」

クラリスの口はだらしなく半開きになり、目もトロンと蕩けて焦点が合っていない。グランはそんなクラリスの頭を優しく撫で、意識がハッキリするまで待つ。

「はあ、はあ…♡んっ…♡だんちよー、ありがとね♡たくさん気持ちよくしてくれて♡」

「うん、クラリスが満足してくれたなら良かったよ。」

「えへへ…♡♡ちゅ…♡んちゅ…♡はあっ…♡うち、今すっごく幸せだよ♡」

軽くキスを交わすとクラリスは嬉しそうにはにかむ。しかししばらくするとクラリスは恥ずかしそうにもじもじとします。

「ああ、あのさ、だんちよー…♡」

「ん?」

「もつと…♡シたいな…♡?なんて…♡?」

「…大丈夫なの?」

「みんなとは1度に何回もシてるでしょ?だから、うちも…♡?」

「次は優しくできないかもしれないよ?」

「いいよ…♡?うちのこと、いっぱい可愛がってください♡?」

【AM??…??】

「ふあ…やっべ…オレ様としたことが弟子の大事なときに寝ちまつた…。上手くいったのか…?」

カリオストロがクラリスに教えた惚れ薬は本物だが、クリアハーブに非常に弱い代物だった。勿論カリオストロならクリアハーブなんて効かないモノを作ることには造作もないが、それは他の参戦者に対してフェアでなさすぎる。

(グランが気づくころが気づかまいが、上手くいく。まさしく「ヘタレでも絶対出来る必勝法」ってわけだ。)

とはいえ、予測不可能なことをしでかす愛しい弟子ともなると流石の錬金術の開祖も不安になる。

「一緒に寝てたりしたらからかってやるか…くくくつ…。」
グランの部屋の方へと向かいながら誰も起きていない廊下で小声でニヤリとする。弟子を可愛がるのも師匠の役得…もとい務めである。

「…一度越えたらブレーキ無しってか？ここまでくると大馬鹿弟子だな。」

カリオストロが部屋の前まで来ると、ドアを開けなくても僅かに性臭と喘ぎ声が漏れてきていた。中の様子は想像に難くない。

「猿かこいつら。」

呆れていると突然バンツ！とドアに何かがぶつかり、ギシギシと音を立て始める。

「おいおい…。」

『あんっ♥？やっ♥？だんちよー♥？これ、聞こえちやうよお♥？』
『まだこの時間はみんな起きてないって…！後ろから突いて欲しいって言ったのクラリスでしょ！』

『そうだけどお♥？ああん♥？これ、おちんぽすごいよお♥？ねえ、うちのおまんこ気持ちいい？』

「オレ様がいるっつーの…。」

カリオストロは水を差さないよう小声で呟き立ち去ろうとし、足を止める。

（いや待て。オレ様以外に誰かが来ると面倒だな。）

「手のかかる弟子だよ…。」

そう愚痴りながら近くの通路を錬金術で壁を作って封鎖しておく。
“工事中だよ☆”と添えておけば後で言い訳もきくだろう。

『イクっ♥？うち、またイっちやう♥？うちのおまんこ、もうだんちよーのおちんぼの形になっちやったよお♥？』

『また出すから…！』

『出して♥？だんちよーの熱い精液♥？うちにマーキングして♥？どくどくしてえ♥？』

「やべ、濡れてきたかも…。オレ様もオカズにさせてもらうか…。」
その後、ジータが問答無用で壁を破壊しようとするまでの数時間、
更に淫靡な空間は続いたのだった。

第10話 エウロペの恋事情♡

「只今戻りました、団長様。」

「やあ、久しぶりだね、エウロペ。ガブリエルさんは何か言っていた？」

「ガブリエル様からは、団長様に今後ともよろしくとお伝えするよう伺いました。」

四大天司ガブリエルの使徒であるエウロペは、時折ガブリエルの元へ行き、グラン達と過ごす中で得た学びを話しているらしい。いつもは2、3日程度留守にするだけだったが、今回は2週間も帰って来ず、心配していたところだった。

「団長様、以前にガブリエル様が仰っていた”人を知るには人として生きるのが最も良い”ということなのですが…。」

「ああ、言っていたね。」

「私は最近になって、わたくし団長様のお側にいたり団長様のことを考えていると胸が高鳴るようになりました。それをガブリエル様にお伝えすると、それは恋だと教えて頂きました。」

「ぶふっっ!!げほっ、げほっ…!」

あまりに唐突な話にグランは飲みかけていた水を吹き出してしまった。星晶獣が恋…をすることは否定しないが、流石のグランも自分がその対象になることは想像していなかった。

「どうかされましたか？」

「い、いや、ごめん。ちよつと驚いただけだから…!続けていいよ。」

「そうですか?それで団長様にもお聞きしたいのです。この胸の高鳴りは、恋なのでしょうが?」

「うーん…:難しいな…。ええと、まず、僕のごとは異性だと思ってる。」

「そうですね…:私は女性型の星晶獣ですから、異性だと思います。」

「僕以外の男性では特にならない?」

「はい、なりません。」

何か切り口はないかと質問してみるも逆に追い詰められてしまう。

適当に嘘をついて誤魔化すこともできるが、それは最低でやってはいけないことだと分かりきっている。

「うんうん、そっかあ…。」

「いかがでしょうか？」

「そうだね…うーんと、特定の誰かに対して強い感情を持つと人は胸が高鳴るんだ。」

「強い感情ですか。」

「うん。ただそれは、恋だけじゃなくて、尊敬とか思慕とか、場合によつては…憎悪とか。これはどつちかっていうと動悸が激しいって言うべきかな。」

説明しながらも結局は何かしらの感情がエウロペから自身に向けられている事を思うと、グランとしても気恥ずかしさが凄まじい。

「私が団長様に憎悪を抱いているようなことはありません。むしろ、とても好ましく思っています。」

「う、うん…ありがとうございます。」

エウロペは普段とあまり変わらない様子だが、あまりにもストレートに伝えられたグランのほうで動揺してしまう。

「やはりガブリエル様が仰っていたように、この気持ちを確かめるには団長様とまぐわうのが一番のようですね。」

「まぐわ…えっ!?!ど、どういう意味合いか分かつてる…?」

「はい。一般的に種が子孫を残すための行為で、しかし時に互いの想いを確かめあう行為であるとガブリエル様に教えて頂きました。」

「ガブリエルさん…。」

ガブリエルの方がエウロペより遥かに人間についてよく知っているとはいえ、やはり人とは一線を画す存在であるためだろうか。教えただことは間違つてはいないが、本来はおいそれと気軽に行える行為ではない。

(いや、人間についてある程度知識があればそれぐらい分かるはずだ。ガブリエルさんはわざとそういう教え方をしたのか…?)

「自然界では優れた雄が複数の雌とまぐわう種は珍しくありません。団長様もこの騎空団の複数の女性とまぐわつておられるようで

すし、同じことなのですよね？」

「いや、ええと…人間は普通は1対1なんだよ…。」

「そうなのですか？しかし団長様は特異点でもありませんし、普通では無いかと思います。つまり、1対多でもおかしくないのではないのでしょうか。」

「うーん、でもなあ…。」

「私はこの気持ちがどのようなものなのか、それを確かめるためにまぐわいたいのです。それとも、このエウロペでは団長様が抱くには魅力が足りないのでしょうか…。」

不安げに尋ねるエウロペは、助けを求める少女のようであり、しかし劣情を沸き立たせる艶やかさもあつた。そんなことはないと言つて抱きしめるのは簡単だが、それは無垢なエウロペを騙すような気がしてグランには出来なかつた。

「エウロペは十分魅力的だと、思うよ。けど、人はそんなふうに分の感情も分からないままに…その、まぐわつたりはしないんだ。する人もいるけど、後悔することになりやすい…と思う。だからもう少し、自分の感情について考えてみたらどうかね。」

「私の感情について考える…なるほど、確かにガブリエル様や団長様に聞くばかりで答えを急いでしまつていたかもしれないですね。」

「分からないことがあつたら誰かに聞くのは間違つてないよ。でも、そういう感情については凄く複雑で…最後は自分で答えを出すしかないんだ。」

「自分で答えを出す…ですか。」

「うん。100%の正解なんて無いから難しいことだけど。人として生きるなら、それもまた大切なことだよ。」

「分かりました、団長様。もつと学んだのちに、自分で考えて答えを出してみることにします。私の相談に乗って頂き、ありがとうございました。」



「カリオストロ様。1つお尋ねしたいことがあるのですが、お時間は宜しいでしょうか。」

「あれ？エウロペさん？この美少女錬金術師のカリオストロに、何か用かなー☆」

「カリオストロ様は様々な知識に富んだ方だと私は思っていますが、恋…とはどのようなものでしょうか。」

「うーんと、恋はねー☆…猛毒、だよ☆」

「猛毒…ですか。そのような危険なモノなのでしょうか。」

「そうだよ。だってえ、恋しちゃったら甘い気持ちでずーっと頭から離れなくなっちゃって、他のことが手につかなくなっちゃうもん☆…だから、猛毒なんだよ。」

「なるほど、頭から離れなくなるのですね。」

「気になるなら、オレ様の弟子のクラリスにも聞いてみたらどうだ？あいつこそ色恋の真っ最中だからな。」



「クラリス様が色恋の真っ最中だと伺ったのですが…。」

「だ、誰がそんなこと言ったの!？」

「カリオストロ様です。恋について聞くならクラリス様がよいと。ですので、こうしてお尋ねさせていただきました。」

「ししよーめくく!!って、恋!?!え、エウロペさん恋してるの!?!」

「いえ、私の感情が恋なのか分からないので、恋とはどのようなものなのかまずは様々な方にお聞きしてみようとしているところなのです。」

「なるほど…。うーん、そうだなあ…。恋をしてるとね、その人の事を考えるだけで心が暖かくなるんだ。ふと気がつくといつもその人の事を考えちゃってる。そんな感じ…かな？あ、あんまり口に出したことはないから照れるなー、こういうの。あははは…。」

「確かに、クラリス様のお顔が先程より火照っていますね。」

「わわっ、言わなくていいから…！恥ずかしいし…！あ、そうだ！も

し恋の想いを伝えるなら、どっかーん☆ってぶつかっていったほうがいいよー！」

「どっかーん…ですか？」

「そう！想いは伝えないと、絶対後悔するからさ！恋の先輩からのアドバイス！」

「なるほど、心でただ思うだけでなく伝えなければ、ということですね。」

「そゆことー！もし、まだ誰かに聞くならジュリエットさんとかどうかな？」

■

「なるほど、恋とはどのようなものか、ですか。」

「はい。ジュリエット様のお考えを聞かせて頂けますでしょうか。」

「そうですね。その人と、願わくばずっと共に歩んでいきたいと思うことだと私は思います。」

「ずっと共に…ですか。」

「ええ。楽しいときも、苦しいときも、面白いときも、辛いときも、全部一緒に共有して生きたい。力を合わせて生きたい。そんなことではないでしょうか。」

「ジュリエット様はその方をとても大事に想っておられるのですね。」

「そうですね…。とても、大事に。多くの方はここまで堅苦しいような考えはしていないのかもしれませんが、その根底にはこういった気持ちもあると私は思っています。」

「ありがとうございます、ジュリエット様。私ももっと多くの方に尋ねて自分の答えを見つけてみようと思います。」

■

「恋…ですか。そうですね、その人のことを毎日何時間でも考えて

いて飽きないですね。声も顔も性格も強さも苦手なことも全てが愛しい。その人の笑顔が自分以外に向けられていると心が落ちつかない。どんなふうにも振る舞えば振り向いてくれるか、どうやって町に誘おうか。その人のためならどんなことでも出来ますし、全てを捧げられますわ。」

「なるほど、ヴィーラ様がどのように思われているか、大変よく分かりました。」

「ええ、よく覚えておいてくださいね。仮に貴女が想う相手がカタリナお姉様なら譲る気はありませんので。」

「そのご心配には及びません。少なくともカタリナ様ではないことは保証いたします。」

「そうですね。では、心置きなく応援させて頂きますわね。」



「そう、恋について聞いて回っているようね。」

「はい。ロゼツタ様は星晶獣でありながらも人として過ごしてきた側面の強いお方ですから、とても参考になるかと思いましたので。」

「そうですね。恋は女を美しくするものよ。」

「恋をするだけで人は美しくなるのですか？」

「ちよつと語弊があるわね。恋をしたら、その相手に振り向いて欲しくなるものでしょう？そのためには、相手が自分を気に入ってくれるよう化粧をしたり、笑顔の練習を試みたり、肌を気をつけてみたりするの。」

「なるほど、自然界でもより美しい見た目の個体が番を成す種は見受けられます。そういうことなのですね。」

「ええ。けれどそうやって美しくなると、今度は恋の相手とは別の人に恋されたりもするの。最終的に誰と一緒にになるか、それとも誰とも一緒にならないのか。恋は時に理不尽で残酷なものでもあるわね。」

「団長様も仰っていました。普通、人は1対1であると。成り立た

なかった恋は失恋となるのですね。」

「あの子に聞いたの？そうね、そういうことになるわね。でも、ここまでは1人の女としての意見よ。」

ロゼッタはそう言うとき少し真剣な顔でエウロペに向き直る。

「ここからは星晶獣としての話。貴女が想う相手人が人であるなら、避けられない宿命があるわ。」

「避けられない宿命、ですか。」

「そう。人には寿命がある。カリオストロちゃんのような超例外的な存在を除いて、人はいつか老いて必ず死を迎えるの。一方で私達のような星晶獣は人に比べれば基本的に寿命は無いに等しいわ。この意味が分かる？」

「いつかは必ず別れの時が来る、ということですね。」

「ええ、そうよ。老いていくその人の一方で、一切見た目の変わらぬ自分。その人が亡くなった後も生き続ける自分。それに耐えられないのなら、私達は恋をするべきではないの。」

「ロゼッタ様には、そのような方がいたのですか？」

「さあ、どうかしらね。女に秘密はつきものよ。でも、最後に決めるのも自分よ。沢山の人に聞いたなら、そろそろ答えは出たのではないかしら。」

「はい。十分に見識は得られたと思います。とても有意義な活動でした。ロゼッタ様、ありがとうございます。」

「いいのよ。女の先輩として当然のことをしただけなんだから。」



そして夜、グランの部屋にエウロペが訪れていた。

「団長様、私は答えを出せましたので、聞いて頂きますでしょうか。」

「うん。」

「私は団長様に恋をしていると、判断しました。一人で過ごしている時はガブリエル様より団長様の事を考えていることが多くなっています。団長様のことを考えていると身体が熱くなります。団長様

ともっとたくさんのご一緒をしてみたいと思っています。団長様の全てが愛しく感じます。団長様に綺麗だと言って欲しいのです。」

「面と向かって言われるとかなり恥ずかしいね…。うん、色んな人に聞いたみたいだね。」

「はい。自信を持って恋をしていると言えるようになりました。しかし、ロゼッタ様に注意もされました。」

「ロゼッタさんに？」

「はい。星晶獣と人とはいつか別れの時が必ず来ると。」

「そっか…。そうだね。」

エウロペはグランに近づいて手を握ると、言葉を続ける。

「それでも私は団長様に抱いて欲しいのです。まぐわいたいのです。恋かどうかを確かめるためではなく、恋をしているからそうしたいのです。」

「本気…。みたいだね。」

「勿論です。星晶獣と人とは子を成すことも当然できません。生きる時間の長さも違います。しかし思い出だけは紡ぐことができ、永遠です。私は団長様との大切な思い出が欲しいのです。」

人でないエウロペが出した人らしい答え。それにグランは応えなければならぬだろう。

「エウロペの気持ち、凄く伝わったよ。エウロペがしたいことに、僕も応える。」

「ありがとうございます、団長様…。」

それを合図にどちらともなく身体を寄せ合い、口付けをする。

「んっ…。んっ…。ちゅ…。ちゅば…。これが、キスなのです。一段と胸が高鳴ってきています。ちゅ…。んちゅ…。はあ♡」

「エウロペの口、凄く柔らかいね。」

「んむっ…。んちゅ…。はあ♡団長様も、男らしいというべきなのでしょう。とても力強く感じます。」

少しずつ肌を重ねながらゆっくりとエウロペを押し倒していく。

「エウロペの…。もう凄い濡れてるね。」

「はい…♡団長様とまぐわうと思うと、身体が反応してしまっているようです♡どうぞ、お触りになってください♡んっ、ああ♡?」

「エウロペは感じやすいんだね。」

「はあっ♡?んっ、はああ♡?そう、なのですね♡んああ♡?団長様の寵愛を受けていると思うと、熱くなってしまうのです♡」

「そんなハッキリ言われると、こっちが恥ずかしくなるよ…!」

「そうなのですか?私は団長様に私の全てを見て頂きたいだけで、ふあああん♡?♡?恥ずかしいことありません♡」

エウロペが言う通り、確かにエウロペは手や腕で身体を隠すようなことは一切せず、全てを晒け出していた。そのことに気がつくところグラ\nンもまた熱くなってしまう。

「服、脱がせてもいいかな。」

「はい、団長様のお好きなようになさってください♡…んっ…どうですか、私の身体は…♡」

「すぐ、綺麗…だよ。」

「団長様にそう言って頂けると、とても嬉しいです…♡どうぞ、好きなだけ触ってください♡」

透き通るような肌に、十分な大きさをもった双球はそれだけでとてもない魅力を放っていた。グランはなんとか理性を保ちながらエウロペを愛撫し、それをエウロペは従順に感受し嬌声を上げる。

(団長様に愛されるのがこれほどまでに甘美なものとは思っておりませんでした♡団長様に触れられるたびに嬉しく、そしてもっと触れて欲しくなってしまう♡)

そのまましばらく続けていくと、エウロペの声が一段と甘いものになり反応が変わってくる。

「だ、団長様♡私、何かきそうなのです♡んはああ♡?これは、はう♡?何なのでしょうか、んああ♡?」

「イキそうなんだね。気持ちよくなると、人は“イク”んだよ。そのままその感覚に身を委ねてみて。」

「は、はい♡?はあ、んっ、ああ♡?これは、はあう♡?きます♡きてしまいます♡はああ♡?あああ♡?♡?♡?」

ぷしやああああ♡♡

エウロペが初めての絶頂を迎えると同時に、大きく潮吹きする。グランは驚きつつも、水の星晶獣ゆえに濡れやすかったり出やすいのかもしれないと合点した。

「はあっ…♡？はあっ…♡？これが、イクということなのですね…♡？とても甘美で心地よく、なにより団長様に与えられたのだと思うと、もっとして欲しくなっています♡」

「いきなり潮吹きまでするなんて驚いたけど…僕もすごく興奮してるよ。」

「潮吹き…？女性器から今のような体液が出ることでしょうか？」

「ああ、うん、そうだよ。出やすさは人によって全然違うけどね。気持ちよくなつたときに出るんだ。」

「また一つ、団長様に教えて頂けました♡しかし、団長様の身体にたくさん掛けてしまいました…。」

「気にしないでいいよ。エウロペが気持ちよくなってくれたって証拠だから。その方が僕も嬉しいし、我慢しない方が気持ちいいからね。」

「そういうことでしたら、また出そうになったときは我慢しないように致します♡その…とても心地よかったです…♡」

エウロペが珍しく恥ずかしがり、それがグランをより一層沸き立たせる。既にグランのズボンには大きなテントが張られていた。

「団長様。団長様の男性器が、とても大きくなっているように見受けられます。脱いだ方がよろしいのではないのでしょうか。」

「そうだね、実は結構苦しかったかも…あはは。」

誤魔化し気味に笑いながらパンツ以外を脱ぐと、エウロペがそこに手を添えてくる。

「エ、エウロペ!？」

「今度は私に団長様を気持ちよくさせていただけじゃないでしょうか。私ばかり与えて貰ってはいけませんから。」

「してくれるなら嬉しいけど、やり方は分かるっ。」

「変なところがありましたら、教えてくださいませ。」

そう言うとグランのパンツを脱がし、エウロペの前に肥大化したチンポが現れる。それを見てエウロペの顔がより愛しいものを見るものになり、すぐに口を付けはじめた。

「ちゅ…♡れろっ…♡ちゅぽっ…♡じゅぶ…♡はあっ…♡団長様の男性器は、このような味なのですね…♡とても遅しくて、興奮します♡大ききも、匂いも…♡」

「なにそれ、上手い…♡なんでそんなに…!」

チンポの先端から裏まで丁寧な舌を這わせていく技量はどう考えても初めて性行為をする女性のモノではなかった。それもこんな浮世離れした美しい星晶獣が持つものとは思えない舌技である。

「ちゅぽ♡お気に召して頂けたなら幸いです♡長い留守の間、ガブリエル様に男性に喜んでもらうためにはと、似た形状の果実で丹念にご奉仕する勉強をつけていたのだと思います♡」

「な…♡そういうことだったの…!♡くあっ…♡くうっ…!」

その事実と確かな技に否応なくグランは更に熱くなってしまふ。自分に奉仕するために何度も練習したであろうことは明白であり、それが今実践されているのである。

「れろっ♡♡ちゅぽ♡んちゅ♡はむっ♡ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅぶ♡んぽっ♡ふうっ♡♡あむっ♡ちゅぶ♡ちゅぽ♡ちゅる♡ちゅるる♡♡」

「それやばすぎ…!♡はあっ…!」

「ぢゅぶ♡ぢゅぶ♡ぶはあっ♡ちゅ♡ちゅ♡んちゅ♡えろっ♡れろっ♡ペろっ♡ペろっ♡ちゅ♡ぴちや、ぴちや、あっ♡♡いかですか、私の唾液も絡ませて…♡じゅぶ♡じゅるる♡」

綺麗な顔を歪ませながら愛しげに奉仕する姿にグランの射精感は急速に高まっていく。

「じゅぽ♡♡じゅぽ♡♡じゅぽ♡♡じゅぶ♡♡じゅぽ♡♡じゅるる♡♡じゅぽ♡えろっ♡♡れろっ♡♡ちゅむ♡タマも…れろっ♡えろっ♡♡」

（ああ…♡団長様の気持ちよさそうなお顔…♡嬉しくなっています♡団長様が先ほど言っていたことがよく分かります♡もつと気持ちよくなつて欲しい♡）

「団長様の男性器の匂いがどんどん濃くなってきています♡射精し
そうなのですか？」

「もう…限界かも…！」

「ふふ、でしたら激しく致しますね♡このまま私にお任せください
♡…あゝむ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅるる♡じゅぶ♡じゅ
ぼ♡じゅず♡じゅる♡じゅぶ♡じゅぼ♡」

「ああ、出そう…！」

「れんぶらひてくらはい♡れんぶのみまふはら♡じゅるる♡じゅる
る♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅぼ♡じゅううう♡じゅるる♡じゅ
るるる♡♡」

どびゅるる♡♡びゅるる♡♡どびゅ♡どびゅ♡びゅるる♡
「んうううう♡♡んぐ♡んぶ♡んきゅ…♡んきゅ…♡こ
くつ…♡じゅるる♡じゅる♡んはあ…♡全部、飲ませていただきま
した…♡」

「エウロペ、それエロすぎるよ…！」

わざとらしく口を必要だけ開けてみせ、中に何も無いことを見せ
つける。間違いなく大量に吐き出した精液は一滴残らず飲み干した
らしい。

「エロい、とはなんでしょうか…？」

「僕を興奮させてるってことだよ…！」

思わずエウロペを押し倒して正常位の手前でギリギリ踏みとどま
る。もう少しで勝手に挿れてしまうところだった。

「それなら、団長様もエロいですね♡私ももうどうしようもなく興
奮してしまっています♡早く団長様の男性器を私の女性器に挿入し
て欲しいと、そればかり考えてしまっています♡」

「正直、今めっちゃくちや興奮しちゃってる…！エウロペがこんなに
エロいと思ってなかったから…！抑えられないかも…！」

「大丈夫ですよ♡私は星晶獣ですから、多少乱暴にしても平気です
ので♡それよりも、私に挿入してください♡」

「初めてでそんなことしたくないからさ…！出来るだけ頑張る…
！」

ずぶ〜〜♡♡

「なんだこれ、飲み込まれる…!」

「はあああああ♡?♡?♡? 団長様の男性器が中に…♡?はああ♡?とても気持ちいいです♡?んはああ♡?」

「あれ、痛くないの…?」

「…?性行為は痛いものですか?」

「いや、初めての女性は中に処女膜つてのがあって、それを破くのか、そもそも慣れてなくて痛かったりするんだけど…。処女膜があった感じは無かったな…。」

「もしかしたら、私が星晶獣だからかもしれないですね。人の形は可能な限り模していますが、本来星晶獣には不要な箇所までは再現しきれていないのでしょうか。」

「なるほど…。」

「ですが、こうして愛し合うのに痛みなど無いほうが私は嬉しいです♡今は言葉を交わすよりも、ただ無心にまぐわいましょう♡」

「そうだね…!」

初めての相手に最も気を使わなければならない点が排除され、最初からエウロペに快楽を叩き込んでいく。

「はあん♡?ああ♡?はああ♡?すごく、気持ちいいです♡?人の性行為というのはこんなにも素晴らしいものなのです♡?はああん♡?♡?」

(団長様に突かれるたびに快感が押し寄せて、なんて幸せな気持ちになるのでしょうか♡♡これが愛し合うということなのです♡私の全てを団長様に捧げられているのが嬉しい♡)

「ああ♡?んはっ♡?はあう♡?んやああ♡?はああ♡?私、すぐにイってしまいそうです♡?あ〜♡?はあ〜♡?」

「いいよ、イきたくなったらイっていいから…!」

「はい♡?はあっ♡?イク♡?イキます♡?潮吹きしてしまいます♡?はあああ〜♡?♡?♡?♡?」

ぶしやあああ♡♡

(またたくさん出してしまいました♡団長様にイかせてもらうのが

気持ちよすぎて、何度でも欲しくなってしまうです♡)

ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡

「あはあああ♡?♡?そんな♡?私イったばかりで、今突かれるとイキ続けてしまいます♡?ああ〜♡?あはあ〜♡?♡?♡?」

「ごめん、エウロペの膣内が気持ちよすぎて、止まらない…!」

「また強いのがきてしまいます♡?あああ〜♡?♡?♡?♡?」
ぷしっ♡ぷしゅ♡

「もう、出すから…!」

「はい♡?♡?出してください♡?団長様の精を全部♡?私の中に♡?はあああ〜♡?♡?♡?♡?」

びゅぶぶぶ♡♡びゅく♡びゅく♡びゅるる♡びゅー♡♡

「ああ〜♡?♡?♡?♡?♡?はっ♡?あああ〜♡?♡?♡?♡?イク♡?イク♡?イク〜♡?♡?♡?♡?」

ぷしゅああああ♡♡♡

(団長様と愛し合う…♡なんと溶け合う行為なのでしようか♡団長様の精で奥まで満たされることで、これほどまでの幸福感に包まれるとは想像していませんでした♡)

「はあ…♡?はあ…♡?団長様の精、全部いただきました…♡?こんなにも出して頂けて、私はとても嬉しいです♡」

「僕もすごい気持ちよかったよ。ありがとう。」

そのまましばらく抱き合っていると、エウロペがグランの胸に手を当てて口を開く。

「団長様。」

「なにかな?」

「私は星晶獣ですから、団長様の隣に最後まで共にするには相応しくないかもしれません。しかし私は、叶うなら時々このように愛し合えるならばとても嬉しく、十分に思います。」

「エウロペ…。」

「ふふ、団長様が他の女性と性行為をするのは構いません。前にも言いました通り、団長様は特別な方ですから。ですが、もしかしたら“嫉妬”というものを知ることができるかもしれませんね。」

「あはは…善処するよ。」

「ところで、団長様の男性器はまだ硬いようなのですが、ガブリエル様によれば普通は1、2回までだと伺っていました。その点も団長様は特別なですね。♡優れた雄の証拠です♡」

「そういうふうに言われるとちよつと恥ずかしいかも…。エウロペがしたいなら…もう1回する？」

「そうですね…私もまたしたい気持ちはあるのですが、一方でこの余韻を噛み締めていたい気持ちもあります。もどかしいものですね。」

「じゃあ、今日はもうゆつくりしようか。またシたくなったら、出来るからね。」

「そのようなことを今から言つてよいのですか？期待してしまいうです♡」

「僕もちよつと考えが変わってきたつてところかな。色んな団員と関係を…持つちやつてき。最初はとにかくダメだつて思つて…僕は団長だし、辿り着けるか分からないイスタルシアを目指してるし。勿論、辿り着いてみせるけど。それでも構わないつて言つてくれるなら、僕はむしろ応えたいつて思うようになったんだ。」

「団長様も色々と悩んでおられたんですね。」

「僕も…人、だからね。」

「ふふ、そうですね。特別でも…人、なのですね。」

そうして2人は抱き合つたまま眠りについたのであった。

第11話 アリーザと5つの試練♡

「燃え上がる体術？」

「そーなんだ！近くの村にその修行場があるんだって！」

補給のために立ち寄った小さな島の町。そこでアリーザが噂を聞いたらしく、目を輝かせていた。グランとしても長旅で鈍っている感覚があり、何か身体を動かせることは無いかと思っていたところだった。

「もしかしたら炎鳴流とも関係あるかもしれないし、行ってみたいんだよねー！」

「僕で良ければ一緒に行くよ。身体動かしたいと思つてたところなんだ。」

「じゃあ早速行こー！」

アリーザとスタンは両思いなのだから一緒に鍛練すればいいのになと思うこともあるが、どうも別々で力を付ける事に慣れてそれが当たり前になつているらしい。スタンもまた一人旅で武者修行をするのに嵌まっているのか、会えることは少ない。

「そういえばさ、团长ついているんなこと出来るけど、足技使うことつて無いよね。」

「あー、確かにそうかも。ダンサーでかなり動くことはあるけど、自分で攻撃するのはほとんど無いね。」

「だよね！今度教えてあげよつか？」

「機会があつたらお願いしようかな。」

「えへへ、約束だよ！」

そんな会話をしながらそれっぽい村に辿り着く。炎を模した古そうな意匠らしきものも所々に見受けられ、間違いは無さそうである。

「おおっ、ここっぽいねー！」

「うん、村の人に聞いてみよう。」

アリーザはよほど楽しみなのか、持ち前の人当たりの良さであつという間に話しかけていく。

「あの、この辺りに“燃え上がる体術”があるって聞いたんですけど、

何か知りませんか？」

「燃え上がる体術？ああ、この村の者なら誰でも知ってるよ。でも、今は誰も身につけてないんじゃないかな。」

「え、どうして？」

「どうしてって…時代が時代だからね。必要無くなったんだよ。」
別の人に話を聞いていたグランはアリーザに追い付き、話しかける。

「どうだった？アリーザ。」

「うん、この村の人はみんな知ってるらしいんだけど、誰も習得してないんだって。必要ないからって言ってたんだ。」

「必要ない…か。どうしてかは言ってた？」

「ええと、時代が時代だからって。」

「凄く危険な技だとか？例えば、霸空戦争時代に使われたりみたいなさ。」

「なるほど、団長それかも！よし、やる気出てきた！…って、どこに行けばいいんだろう？」

「ああ、それならさつき聞いたよ。向こうの方に修行場があるって。」

「おーし、修行だー！」

勢いのままそれらしき高い建物まで辿り着いて中へ入ると、1人のお婆さんが出迎える。

「おや、ようこそ。見ない顔だねえ。観光かい？」

「お婆さん！ここで“燃え上がる体術”の修行が出来るって聞いてきたんですけど、合ってるかな？」

「おやおや、今どき珍しいねえ。あたしやここでずーっと管理しているけれど、修行しに来た子なんて初めてだよ。」

「本当に誰も身につけてないんだ…。ねえお婆さん、それってどんな技なの？」

「そうさねえ…。一言で言えば熱を我が物とすることだよ。」

「熱を我が物に…凄いよ団長！炎鳴流と合わせれば、あたしもっと強くなれるかも！」

「うん、よかったね、アリーザ！」

「ねえねえ、お婆さん！あたしもその修行、受けさせて欲しいんだけど、いいかな!?」

「勿論構わないよ。2人揃ってることだしねえ。」

「2人？」

「そうだよ。2人1組でなきや、この修行は受けられないからねえ。どうするんだい、アンタは。」

「そういうことなら、僕もよろしくお願いします！」

「ふえふえ、良い返事だねえ。それじゃあこつちに来な。」

そう言うとお婆さんは奥の扉の前まで2人を案内する。

「この先が修行場だよ。ただし、いくつか注意があるからね。よく聞くんだよ。」

「はい！」

「まず、この先は5階立ての試練の間になってるんだ。それぞれの階で決められた目標を達成することで次の試練への道が開く。」

「5つの試練……！」

「そしてこの試練は途中で棄権することは認められない。元の道は塞がれるんだ。試練を全て達成する以外に出る方法はない。なあに、そう怖い顔をしなさんな。アンタ達なら大丈夫だよ。」

2人を交互に見やりながらお婆さんはそう告げる。

「この試練を乗り越えたとき、アンタ達は熱を我が物に出来てるはずだよ。」

「ねえ、お婆さんもその試練、乗り越えたの？」

「勿論だとも。とつくの昔だけどねえ。流石にもうこの年じゃ無理だけでもね。」

「よーし、あたしと団長で絶対乗り越えてみせるから！」

「うん、頑張ろう！」



【1階：吸熱の試練】

「ここが1つ目の試練？何だろ、あれ。」

「台座…みたいだね。」

部屋に入るとそこはやや暗く四方が格子に囲まれ、中央にグランの腰程度の高さの円形の台座があるのみだった。

「あ、ここに何か書いてある！ええと、”10分間、中央の台座を2人で向かいあつて両手で掴み続けよ”…だつて。」

「図まで書いてあるし、とりあえずやってみようか。」

指示に従つて台座を挟み、図に合わせて台座の反対側の端に手を伸ばす。

「あたし、届かないかも…！」

グランは多少前屈みになることで難なく台座を掴めたものの、アリーザはなかなか手が届かない。背の低い女性ドラフにはかなり厳しいだろう。

「どうしよ、困つたな…。」

「ちよつと待つてて。」

そう言つてグランはアリーザの近くへ行くと、靴を脱いで足元に置く。

「これ踏んでいいからさ。少しは足しになるよ。」

「え、そんなの悪いよ！」

「いいよ、そろそろ買い替えようなつて思つてたやつだから。」

(これ、確かに結構汚れてるけど、まだ全然使えるやつじゃん…。団長にまた借りが出来ちゃつたなあ。)

「ほら、手伸ばして。僕も手を貸すから。」

「うん…！んーっ！届いた！」

「よし、じゃあ僕も…。っ！」

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ！」

アリーザは何か手が届いたとはいえ、その体勢は超前屈みであり、グランがアリーザの方へ手を伸ばして台座を掴みに行くと思いきり谷間が見えていた。

(つていうか、掴もうと思つたら絶対腕に当たる…！でも、仕方ない

か…!)

意を決して台座を掴むと、それと同時に周囲の格子の向こう側に勢いよく炎が燃え上がる。少し暗かった部屋は一気に明るくなり、より視界が鮮明になる。

「あつつ…!!このまま10分耐えろってこと!?!」

「そうみたいだね、見てみて。」

「え、なにになに?」

「ほら、台座の中央のところ。小さい火が灯ってる。」

「あ、ホントだ…!」

グランを見上げていたためアリーザは気づかなかったが、台座にはぐるぐるとした細い溝があり、その中を小さな火が中央に向かって少しずつ進んでいた。

「これが時計代わりってことだと思うよ。」

「なるほど、じゃあこの火を見守ってればクリアだね!」

しかし、言うは易く行うは難し。周囲の凄まじい熱気は体力を奪い、大量の汗をかかせる。手を離せないがゆえに拭うこともできず、ボタボタと台座や地面に滴り落ちていく。

「はあ…:はあ…:今、どれぐらいかな?」

「どうだろ、3、4分ぐらい?」

円上をゆつたりと回っていく火では正確な時間は掴みづらく、それが余計に焦燥感を募らせる。

「アリーザ、頑張つて!」

「あ、う、うん!大丈夫!」

いつの間にか顔を上げなくなったアリーザに声をかけると、グツと力を入れ直す。

(危ない…:あたし、今危なかった…:気合い入れ直さなきゃ!)

「団長、もう少し…:みたいだね…:!」

「はあ…:はあ…:んぐつ…:だね。頑張ろう!」

励まし合いながら耐え続け、とてつもなく長く思えた試練に終わりが見える。

「団長、火が…:!」

「うん……」

「消えた!!」

それと同時に先の扉が開き、2人はそれを見て手を離す。一緒にぶるんつと何かが揺れたが、グランは何も見なかったことにする。

「ふーっ、大変だったね!あ、そうだ団長、靴、靴!」

「ああ、ありがとう。すっかり忘れてたよ。」

「あー、まだここ熱いね…早く出よ? 次の試練までの階段のほうがいい。まだここ熱いね。」

「うん、そうしよう。」

服をあちこちパタパタとさせながら階段を登るのは本来はかなり目に毒だったが、疲労もあってあまり気にならない。それよりもこの試練の過酷さのほうがグランの頭を占めていた。



【保熱の試練】

「あ、扉の隣に何か書いてある…。」中の魔物を全滅させよ…: だって! よーし、さつきは身体が石になっちゃいそうだったから暴れちやおつと!」

「待つてアリーザ! 相手は炎系の魔物なんじゃないかな?」

「あ、そっか。でも、どうせやるしかないんだからビビってもしょうがないって! 行こ行こ!」

そうしてあっさりアリーザは部屋に入ってしまった、仕方なくグランも追いかける。2人が部屋に入ると、そこにはところ狭しとひんやりしてそうなスライムの大群が蠢いていた。

「え、スライム!? うわっ!」

「こいつら、かなり好戦的みたいだ…!」

近くにいたスライムがいきなり飛び掛かってくるも、2人は咄嗟に蹴り払う。しかし、そのスライムは地面に落ちても以前元気なままである。

「あれ、結構いいところ入ったと思うんだけどなー?」

「そうか、熱だよ！さつきと違ってここは涼しいけど、こいつらを倒すには熱が必要なのかも！」

「なるほど！そういうことなら、炎鳴流の極意を見せてあげるよ！はあああーっ!!」

アリーザが勢いよく足を振ると、それと共に炎が舞う。するとその炎に当たったスライム達はあつという間に蒸発してしまう。

「団長の言った通りみたいだね！やるぞー！」

「うん！」

2人は攻勢を強め、スライムの中に突っ込んでいく。スライムに触れられても殺傷能力はほとんど無いに等しく、むしろひんやりとして気持ちいいぐらいである。

「これで、とどめ！」

「もう全部倒しちゃったみたいだね。」

「うん！あー、楽しかった！」

よほど先ほどの試練で固まっていたのが堪えていたのか、今日一番と言つていい笑顔を見せる。

「あれ、扉開かないね。」

「身体についたスライム払ってこうか。よいしょっと。」

「そうだね。うわ、ベトベトする。んっ…と。」

あちこちに付着したスライムを払い終わると、扉が開く。

「お、開いた開いた！行こ！」

「うん。」

過酷だと思つたのは杞憂だったかもしれない、と思い直していたグランは、2人の頬が上気していることに気づかなかつた。



【3階：暗熱の試練】

「あ、また扉の隣に書いてある…。『暗がりの迷路を進め』…だって。熱と関係無さそうじゃない？」

「入ったら分かるんじゃないかな。さつきの階は予想出来なかつた

し、入ってから考えたほうがいいのかも。」

「団長にしては珍しいこと言うじゃん！あたしもちよつとそう思ってきたところなんだよね！」

ちよつぴり笑いながら部屋に入ると扉が閉まり、完全な暗闇と化す。一切の光が無い空間だった。

「ほ、ホントに何も見えないよ!？」

「アリーザ、離れないようにして。」

「うん……」

思わず互いの肩の辺りを掴み、手探りで周囲をぺたぺたと触る。正面には壁がある通り、迷路なのは間違いないさそうである。

「あたしこういう頭使うの得意じゃないんだよねあ……」

「うーん、こういう迷路って、出口が迷路の外側にある場合は手を端に当てながら進めば必ず辿り着けるんだけど……。」

「え、迷路ってそうなの!？」

「そうなんだ。でも、そうじゃなかった場合……例えば中央にあるスイッチを押さないと壁があるとかだと辿り着けないんだよね。」

「じゃあ、どうするの?」

おそらく不安な顔をしているであろうアリーザの方を向いて考える。ここはあくまで熱の試練であり、熱が試練であるか、役に立つはずである。

「とりあえず、手……繋ごうか。離れ離れになると大変だし。」

「う、うん……」

探り当てて手を握ると、驚くべきことにそこが仄かに明るくなる。

「え、なにこれ……!？」

「もしかしたら……!アリーザ、左手も出して。」

「分かった!」

もう片方の手も繋ぐとそこも明るくなり、少しだけ前が見えるようになる。

「なるほど、2人分の体温があるところが明るくなるんだ。」

「へー、こんな仕掛けあるんだ……!」

感心しながら脱出の糸口を見つけた2人は迷路に繰り出す。基本

的には片手を壁に当てつつ、中行きの手が無いか注意を払いながら進んでいく。

「あ、待って、団長！ここ、狭いけど道かも……！」

「え？あ、本当だ……！」

中側を注視していたアリーザが小道を見つけ、そこを通ることにする。道に近かったアリーザを前にして小道を進むと、アリーザが途中で立ち止まる。

「あれ、行き止まりみたい。ごめん、団長……！」

「まあ、迷路だからね。戻ろうか。」

アリーザの手を引っ張るために腕を上げると、アリーザが声を上げる。

「あつ、ここ何か書いてある！ちよつと手近づけてみせて！高熱が道を開けるだろう……！」

「高熱か……！」

そうは言ってもこんな狭いところでは技は出せないし危険すぎる。グランがそう思案していると、アリーザがグランの手を強く引っ張る。

「こういうこと……じゃないかな……！」

「ア、アリーザ……！」

狭い道に2人が密着して入る形になると、当然その触れ合っている部分が光りだす。

「ほら、開いた！狭いけど、これで進もうよ！」

「そ、そうだね……！」

今の体勢は非常に悪い。なにしろアリーザの胸がグランのスポンに当たって擦れているのである。

（心頭滅却すれば火もまた涼し、だ……！）

熱の試練でなにを、という気がしないでもないが、グランとしては一大事である。絶対に事が起きてはならないのだから。

「あつ、団長が言ってたみたいにスイッチあるよ！」

「押してみよう。」

「うん！」

小道を抜けた先のスイッチを押すと、周囲の壁が無くなっていき、扉が開く。そこから明かりも入って見えるようになる。

「よし、行こ行こー！」

そのままアリーザに手を引かれてグランは次の試練へと向かうのだった。より一層、アリーザの顔が赤くなっているのに気がつかないまま。



【情熱の試練】

3階で手を繋いだまま2人は部屋の前まで辿り着き、ハタと気づいて手を離し誤魔化すように試練の内容を探す。

「ど、どこにも書いてないね…！」

「うん。もしかしたら、1階みたいに中に書いてあるのかも。ちよつと軽く開けてみようか。」

「そ、そうだね！」

戻れるように扉を押さえながら中に入ると、そこには再び大量のスライムが蔓延っていた。

「またこいつら!?!」

「…みたいだね。」

「どうせこいつら強くないし、一気に倒しちゃうね！」

「うん、頼んだよ。」

「全力で蹴散らすよ！鳴神！」

部屋中に火柱が立ち、スライム達を文字通り蹴散らしていく。一網打尽といったところだろう。しかし、先ほどと違う点が1つあった。

「まさか、こうなるとはね…。」

「ごめん、団長…。」

「いや、僕もいって言ったし…。」

2階のスライムとは性質が違ったのか、倒せこそしたものの体液は盛大に飛び散り、2人は思いつきり被っていた。

「まあ、これを払えばいいんだよね…べとべとするく〜。」

「しようがないよ…って、あれ？」

「全然取れないよ!？」

不思議なことにスライムの吸着が異様に強く、全く剥がすことができない。炎を出そうにも自身に向けては出来るわけがない。

「そうだ、試練を見よう…! ええと、”スライムは相方が取ることができる”…!？」

「ええっ!？」

それはつまり全身に触るということであり、本来触れてはいけない場所も触れざるを得ない。

「…しよーがない! あたしがやつちやつたんだし! で、でも、あんまりじろじろ見ちゃだめだからね!？」

「わ、分かっているから…!」

試練のためにもやらざるを得ないのは明白であり、頭、肩、腕、手、足、腹部とスライムを取り除いていく。そのたびにアリーザの吐息が漏れるが、グランは頭から締め出して淡々と進める。

「そ、その、触るから…。」

「うん…。んっ…♡はあっ…♡♡」

胸についたスライムを取り除いていくと、よりアリーザの吐息が濃くなる。

「はくっ…♡んっ…♡はっ…♡♡」

「こっちは終わったよ。その、次は下触るから。」

「分かっているってば…んくっ…♡んう…♡ふう…♡は…♡はあ…♡♡

はああ…♡♡」

下腹部から股までも取り終わり、アリーザの方は完了する。

「っ、次はあたしが団長の…取るね。目は開けちゃだめだから!」

「うん、よろしく…。」

アリーザはグランと同じように当たり障りの無い箇所から取り除いていき、最後に股の辺りが残る。

「さ、触るからね…!」

「うん…。」

チラッと目を開けるとアリーザの顔は真っ赤であり、息を乱してい

た。少し匂いを嗅いでいたりもしているのを見て、すぐにグランは目を閉じる。

(心頭滅却、心頭滅却……！)

「よし、取れたよ……！」

「ああ、ありがとう。」

グランが必死に抑え込んでいる間にどうやら終わったらしい。努めて平静を装い、アリーザには気づかれてはいないだろう。

(あたし、なんか凄いことしちゃった気がする……。)

(危なかった……。それにしても、何か試練がおかしい気がする……。)



【放熱の試練】

「また扉に入る前に書いてないね。」

「うん、入ろう。」

気まずさから2人の口数は少なくなり、事務的なものになってしまふ。さっさと入ると、そこはカーペットが敷かれているだけで何もない部屋だった。

「ええと、あつたあつた。なにに……互いの熱を高めて放出させよ……。だって。どういう意味だろ？」

「……なるほどね。」

グランもようやくこの5つの試練の本当の意味に察しがつく。"熱は熱でも性や愛の熱であり、男女2人が燃え上がるための場所であろう。最初の試練がきつかったのはアリーザがドラフであるためであり、当時はドラフやハーヴェインがこの村にはいなかったのかもしれない。

「ねえ、黙ってるけど団長分かる？」

「あ、あー……うん。ま、まあね。」

「じゃあ早く教えてよー！」

そして問題なのはグランとアリーザは男女の関係でもないし、特にアリーザは想い人がいることである。しかし、試練はクリアしないと

ここから出ることは出来ないのもまた事実だった。

「怒らないでね?」

「ん? どういうこと?」

明確に意識すると、ついアリーザのアピールの強い箇所が目がいつてしまいそうになる。なんとか目線をアリーザの顔に固定し、自身の推理を告げる。

「多分なんだけど、つまり…これはお互いを絶頂させる…ってことじゃないかな。た、多分だよ!」

「ぜつちよう…?え、ぜ、絶頂!?絶頂ってあの!」

「多分…。」

「きゅ、急にそんなこと言われても…!説明してよ!」

「うん、1つ目の試練からだけど…」

グランは考察しながら1つずつ説明していく。1つ目の試練は本来大変なものではなく、体勢的に互いを見て語り合う場であろうこと。2つ目の試練は炎で倒してしまったが、他の試練を顧みれば2人で協力して倒す方法があったであろうこと。3つ目の試練はより密接になるためのものであろうこと。4つ目の試練はより自発的に互いに触れるためのものであろうこと。そしてスライムには何か身体に影響を与える遅効性の効果があったこと。

「何かって…だ、団長、それ…!」

「アリーザこそ…!」

2人共サツと目線を逸らして身体を後ろに向けたものの、股の辺りを指し示しているのは明白だった。グランの方はズボンが隆起して染みができ、アリーザの方も染みどころか液体が足を伝っている。

「ごめん、こんなつもり無いんだけど…!」

「あ、あたしもごめん…!全然、気づいてなかった…あはは…。」

(ど、どうしよ…!収まりそうにないし…!ホ、ホントにするの…!?)

「ア、アリーザ…。」

「ひゃい!」

「とりあえず、どうにか他に出る方法が無いか探さない?」

「あ、う、うん！そうだよね！」

(そうだよ、こういう時こそ冷静にならなくちゃ！)

元来た扉からぐるつと反対側の扉まで、2人は別れて調べていく。しかし無情にも、当然ながら脱出路など無く、扉も頑丈で攻撃してもビクともしない。

「あたた…だめ、動かないよ…！」

「魔法で保護されているんだろうね。硬いのもあるけど、効いてないって感じがする。」

2人して扉の前で立ち尽くしてしまふ。手が尽きたことで集中力が切れると、互いの匂いが鼻につく。

「ね、ねえ…それ、痛くないの？」

「いや、へ、平気だよ!?!全然！」

「その、思ったんだけどさ…！相手を絶頂させれば、いいんだよね!?!」

「え、そりゃあ、そうだけど…けどアリーザ…」

「べ、別に最後までしちゃうわけじゃないしさ！出れないままじゃ困るし!?!元はと言えばよく調べないで行こうって言ったあたしが悪いんだから、気にしないでよ…ね!?!」

「アリーザ。無理しちゃだめだよ。」

「でも、無理でも無茶でもしないと…！みんなだつて夜には待つてるし！」

「それは…そうだけど。」

今日は夜には戻つてパーツと食べようという話になっている。もちろん参加は自由だが、団長のグランがないのは目立ち過ぎるし食事どころではなくなってしまうだろう。

「あたしがいいって言ってるんだからいいの！ほら、まずは団長があたしに触つてよ！」

アリーザはそう言つてグランの手を取ると、自身の腰の辺りに触らせる。

「ぼ、僕から!?!」

「だつて、あたしあんま分からないし…！そりゃ、ちよつとは知つて

るけど、誰かにしたことなんて無いんだから…。それに、男ならリードして欲しいっていうか…。」

「わ、分かったよ…！じゃあ、その、触るから…！嫌になったら、言つてね？」

「うん…。」

2人共これはあくまで必要なことだと自分に心の中で言い聞かせ、距離を近づけていく。グランはアリーザを座らせ、それに寄り添う形になる。

「んっ…♡はっ…♡ああっ…♡はくっ♡あっ♡はああ…♡そこ、ビリッてきて、うあ♡ああ♡」

「ここが気持ちいい？」

「うああ♡そこ、くる♡はああ♡あっ♡あはあ♡団長って、こういうのも出来るんだね、はう♡ああっ♡」

どうやらアリーザはグランが他の団員達と関係を持っていることを知らないらしい。騙しているようで少々罪悪感はあるが、アリーザには言わないほうがいいだろうとグランは判断する。

「はあっ♡はっ♡ああ♡んんっ♡あっ、はあ♡くう♡ああん♡団長、そこ、はああ♡」

（あたしのあそこ、もう凄い音しちやってる♡団長の指でぐちゅぐちゅ掻き回されて気持ちよすぎるって♡もう、やばい♡）

「団長♡ね、団長♡あたし、あはああ♡はうっ♡はああ♡もう♡んくうう♡」

「イキそう？..」

「うん♡イキそう♡はああ♡あっ♡はああ♡イキそ♡ああああ♡♡♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡

「ああああーっ♡♡♡♡♡？♡はあっ♡♡？♡あっ♡♡？♡はああ♡♡？♡はあ♡？♡あたし、イっちゃった…♡♡？」

大量に撒き散らされた体液で辺りのカーペットにはハッキリと染みができ、アリーザはそれを放心した顔で見つめる。

（こんなに落ちやうなんて…♡あたし、最低だよ…♡でも、すごい気

持ちよかった…♡)

「見て、アリーザ。」

「んえ…？あつ…！」

出口の扉の方を見ると、その右脇にある燭台に火が灯っていた。左脇にも同じような火の無い燭台があることから、半分クリアしたのだと分かる。

(そうだ、次はあたしが団長をイカせないと…♡あたしが、団長を…♡)

「団長…♡次、あたしの番だから…♡」

「うん…よろしく…。」

アリーザがグランの前に跪いてズボンを脱がすと、グランのパンツにはどこが先端に分かるほどの隆起と染みができていた。ズボンに染みるほどなのだから当然だが、その強烈な匂いがアリーザを刺激する。

「ここに、団長のおちんちんが…♡♡」

止まらずパンツも脱がすと、既にカウパーが溢れているチンポがアリーザの目の前にあらわになる。

「すっづ…♡♡これをイカれせばいいんだよね…♡」

(おちんちんってこんな大きい♡スタンのものこれぐらい大きいのかな…♡)

「これでいいかな…♡」

「ああ、うんっ…！いいよ…！」

アリーザの手の動きはかなり拙いが、スライムのせいかわかんない。つもより敏感になっており、十分な刺激になっていた。

「すっづ…い熱くて、ぬるぬるして…♡おちんちんってこんななんだ…♡」

「あくっ、あつ、はあつ…！」

「両手のほうがもつと良かったりするかな…♡」

アリーザは握り方や擦り方を様々に変えてグランの様子を伺い、段々と動きが良くなっていく。

(あたしの手もぬるぬるになっちゃってる…♡おちんちんビクビク

してて、これが中に入るんだ…♡)

「あ、そうだ、団長♡こういうのはどうかな♡んっ…しよつと♡ぱいずり?…って言うらしいんだけど…♡」

「気持ちいい…!…っていうか、アリーザが知ってると思わなかったよ…!」

「昔、ママが悪乗りして言ってたから…ってそんなこといいでしょ♡ほら、こういうの、どう♡」

これもやはり拙いが、ぐにぐにと力を入れているために刺激が強く、一気に終わりが近づいてくる。

(団長のおちんちん、あたしのおっぱいでも隠れきらないよ♡確か、ママはすっぽり入ったりして可愛いなんて言ってたのに…♡ママのほうがおっぱい大きいけど、それでもなんか凶悪って感じだし、もしかして団長のって普通じゃないのかな…♡)

「おちんちんがどんどん熱くなってる♡もしかしてイキそうなの?」

「うん、もう、やばい…!」

「分かった♡じゃあもつと頑張つてイカせちゃうから♡」

アリーザが動きを強くすると、ぬちゅ♡ぬちゅ♡と音が大きくなり、熱が高まっていく。

(全部包むようにして…♡気持ちよくなるようにいつぱい動かさないと♡匂いも音も凄くて、あたしも熱くなっちゃうよ♡)

「やば、出る…!」

「出して♡あたしのおっぱいに出していいから♡」

どびゅうううう♡♡どびゅ♡どぐっ♡どぐっ♡どぐっ♡びゅ♡びゅ♡ぢゃ♡びぢゃ♡

「団長の凄い♡♡あたしのおっぱいにこんなたくさん♡熱いよおわ、飛んできた…♡はあああ…♡」

「ごめん、顔に飛んで…。」

「ううん、いいよ♡あたしがイカせたんだし♡」

(団長のおちんちん、絶対普通じゃない♡こんなに出るわけないも♡大きくて熱くて…♡匂いも…♡あたしの身体が勝手に疼いちゃ

うよ♡)

2人して息を整えていると、扉の左脇の燭台にも火が灯り、ついに扉が開く。

「アリーザ、ほら、開いたよー!」

「ふあ…♡あ…うん♡やつと終わったんだね!」

雑に服を直しつつ、扉の先へと向かう。大変だったが、これでなんとか終わりだと思おうと足が速くなる。

「え…なんで…?」

「か、階段…!?!」

しかし、扉の先には見飽きた階段が6階へと続いていた。

「いや、とりあえず、登ろう。」

「うん…。」

まだ足腰が万全でないためゆっくりと登っていく間、どうしても互いの身体が目につく。いや、ついチラチラと見てしまっていた。

(団長のおちんちん、少し落ち着いたみたいだけどまだ大きい…♡男つて1回出したら終わりじゃないの…♡)

(アリーザの身体にかかったままで…見ないようにしないと…!でも…!)



【最上階】

階段を登りきって扉を開けると、そこは四隅に火の灯った燭台とベッド、そしていつもの先への扉とその上に「出口」とだけ書かれていた。

「試練は5つだったんじゃ…。」

「うん…どこにも試練の内容は書いてないみたい。」

確かに入る前にも後にもどこにも書いてはいなかった。流石にそれは注意していたので見落としたはずはない。

「ねえ、団長…♡これってさ…♡最後までしなきゃいけないってことだよね…♡」

「ア、アリーザ…。」

アリーザを見やると、その顔は完全に発情し、自身の格好など気にせずグランに正面を向いていた。

「しようがないじゃん♡やらないと出られないんだからさ♡」

「けど、流石にそれは…！うっ！」

「ね、団長のここだって硬くなってるよ♡あたしのここも触ってみて♡」

アリーザはグランの手を取ると強引に秘所に触らせる。

「ぐくっ…！」

「もうびちゃびちゃになってるでしょ♡あたしのせいでこんなところ来ちゃったんだもん♡しよ♡」

「でも、アリーザはそれでいいの…!?!」

「いい♡誰だつてこの状況だったらやるしかないんだし♡それにその、あたし…多分、処女じゃないから…♡」

「え、どういうこと…?」

「昔さ、修行の加減が分からなくてやりすぎちゃったことあって…。血が出たことあるんだよね。だから多分、そのときに破けちゃったのかなって。」

「そ、そうなんだ…。」

「まあ、そうじゃなくても、あいつにはそう言えばいいからさ！だから…今日のことは秘密にすれば大丈夫だから…しよ♡あたし、もう我慢できない♡」

そう言い放つとアリーザはグランをベッドに押し倒して、グランのズボンに手をかける。

「ちよ、アリーザ！」

「はああああ…♡♡やっぱり団長のおちんちん、大きくなってる♡団長だつてしたいんじゃない♡」

「それはだつて…そうなるよ…！」

「見てよ、あたしの♡もうこんなトロトロになっちゃってるんだよ♡おあずけなんてさせないよね♡」

アリーザは既にパンツを脱ぎ、チンポの上で服をたくしあげてグラ

ンによく見えるようにしていた。胸も服から出すと片手で持ち上げて離し、たぶんつと揺らして分かりやすく挑発する。

「もう、挿れちゃうから…♡♡あぐっ、はああああああ♡♡?♡?♡?♡?ああああ♡♡?♡?」

「アリーザ、そんないきなり…!」

アリーザは加減もなく一気に腰を降ろして根本まで啜えこんでしまう。その股からは血の代わりに体液が飛び散り、身体を大きく仰け反らせる。

(いったああああ♡おちんちん奥までごりつてきて、痛きもちいいよ♡♡頭飛びそう♡♡)

「はあっ♡?あっ♡?はああ…♡?かはっ…♡?ああっ…♡?」

「アリーザ、大丈夫…?」

「へい、き…♡?いつちやった、だからあ…♡?こんなんで、へばったりしないし♡?動くからね♡?」

ばちゅ♡ばちゅ♡ぱちや♡ぶちゅ♡ばちゅ♡

(これ、頭に響く♡すぐいつちやいそう♡動きたびに全部ぐりゆつてなっ♡気持ちいいよ♡イキそうなのに、腰止まんない♡)

「ああっ♡?はぐっ♡?はあ…♡?あたし、またイキそ♡?イク♡?はああ…♡?イグッ♡?うああ…♡?」

「アリーザ、激しすぎ…!」

「だって、気持ちいいんだもん♡?止まらない♡?よお♡?ああ…♡?んくっ♡?は…♡?は…♡?はれ、腰、動かない…♡?」

(腰抜けちゃったかも…♡もつと動きたいのに♡もつとぐりゆつていっばいしたいの♡)

「ねえ団長お♡あたし、動けなくちゃったみたいだからあ♡動いてよお♡あたしもつと気持ちよくなりたいたいの♡」

アリーザは聞いたことのないような猫撫で声でグランを誘惑し、グランもちょうど理性の糸が切れてしまったところだった。

ばちゅ♡ぐちゅ♡ばじゅ♡ずちゅ♡ぐちゅ♡ばちゅ♡

「イグ♡?あ…♡?はっ♡?ああ…♡?イグッ♡?これ、すご

い♡?団長のおちんちんでえぐられてえ♡?おぐっ♡?イグ♡?イガされる♡?」

(気持ちいい♡気持ちいい♡気持ちいいよお♡一番奥まで届いて気持ちいい♡気持ちいいのどんどんくるう♡)

「団長お♡お♡?あ♡あ♡あ♡?もうあだし♡?イ♡ってるから♡?はあ♡っ♡?あ♡あ♡あ♡?それ、ぎもちいい♡?よお♡?」

「もう、限界…!」

「出ひて♡?出していいがら♡?はあ♡ああ♡♡?あ♡あ♡っ♡?もっ、ぎもちよぐしでえ♡?」

びゅるるるる♡♡びゅーー♡びゅく♡びゅぶ♡びゅぶ♡どぶっ♡

「あ♡あ♡ーーーっ♡♡?♡?♡?♡?♡?♡?♡?はあ♡っ♡?ああ♡ーっ♡?♡?♡?♡?♡?♡?♡?イグッ♡?イグうーっ♡?♡?♡?♡?あ♡あ♡ああ♡♡?♡?」

(熱い♡熱いのがいつぱいきてる♡熱いのでイクの止まらない♡団長の赤ちゃん出来ちゃうよお♡)

「はあ♡ー♡?はー♡?あ♡ー♡?はー♡?んぐっ♡?ねえ団長お♡?もっ♡?もっ♡?もっ♡?」

グランはチラつと扉の方を見るも、特に変化は起きていない。

「ほら、まだ足りないんだよ♡?おちんちんだってまだしたいみたいだし♡?いいでしょ♡?ねーえ♡?」

アリーザはまだ痺れているのか大きくは動かさないものの、腰を前後にずちゅ♡ずちゅ♡つとわざと音を出してグランを煽ってくる。

「ていうか、中に出しちやっただけ…。」

「いーよもう♡?やらないと出られないんだし♡?」
ずちゅ♡ずちゅ♡…ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡



「はあ…はあ…はあ…はあ…。アリーザ…扉、開いてるみたい、だよ…。」

「ふあ…♡?うん…♡?」

おそらく夕方であろう時間に扉が開いていることに気づき、ようやく事なきを得る。そこかしこは2人の体液で濡れ放題だが、もう用はない。

「ああ…外に出る前に水浴びもできるみたいだよ。」

「分かった…♡?」

ごぼっ♡とアリーザは精液を洩らしながら立ち上がってグランの側に行く。倦怠感の塊になった2人はぺたぺたと歩き、揃って水を浴びる。さっぱりしたら服を着て何も無かったことにするのだ。

「ねえ、団長…♡」

「なに?」

「あー、まだまだ鍛練が足りないみたいだからさ…♡また今度、修行してもいいかな…♡」

無かったことにはならないかもしれない。

第12話 コルワのハッピー審査♡

「団長さん、ちよつといいかしら。」

「はい、どうぞぞ。」

とある昼下がりに、グランの部屋にコルワが訪ねてきていた。

「デザイナーとして、貴方を調べたいのだけれど、いかがかしら？」

「僕をですか？」

「ええ。身長、腕、腰回り、その他いろいろとね。勿論、今度お礼に服を作ってあげるわ。ジータちゃんが言ってたけど、今度パーティーがあるんでしよう？ビシッと決まるものを用意するわよ。」

「わあ、ありがとうございます！どうしようかなって悩んでたんですよね。」

「じゃあ、早速そこに立ってもらえるかしら。」

採寸しやすいように両腕を広げて立つと、コルワはテキパキと様々な箇所をメモに取っていく。

「最近どう？また筋肉が付いたんじゃないかしら。」

「そうですね、鍛練は欠かさないようにしています。」

「あんまりやりすぎないように……って、私が言うまでもないわね。いい腕、してるわ。」

コルワはグランの二の腕をふにふにと触り、更にメモを加える。あつという間に全身測り終わると、グランの肩をポンと叩く。

「はい、終わりよ。本当、若いのによく仕上がってるわね。」

「流石に速いですね。」

「じゃあ後は……質問タイムね。」

「質問ですか？」

「そうよ……オホン。団長さんが団の複数の女の子と関係を持ってるって噂を聞いたのだけど、本当かしら？」

丁寧だがかなり重みのあるトーンでの質問に、グランは一気に冷や汗が出る。コルワはハッピーエンドを重視する人であり、今の状況はそうならないと踏んでいるのだろうか。

「それは……そうですね。」

「どうしてそうなったのかしら？ 私は団長さんがただ自分の欲望のために誰かを傷つけたり犠牲にするような人じゃないと思っただけで、シヤレにならない人数みたいだから。」

「自分でもよく分からなくなってきたんですけどよ…。最初はジューに襲われて…それから崩壊というか、いろんな子に襲われたり、誘惑されたり…」

「……まあ、そんな気はしてたわ。それで？」

「でも、やられっぱなしじゃ立場もないですし、乗ってしまうんですよ。いつの間にか楽しんでしまっていますし…。」

「団長さんはまだまだ若いものね。でも、いくらなんでも節操がなさすぎるんじゃないかしら。」

「最近はあるまり拒否しないほうがいいかなって思ってるんです。僕はイスタルシアを指す団長だから、辿り着くまでは誰とも一緒にはない。その上でと言うなら尊重したいんです。節操が無いと言われれば、返す言葉も無いですけど…。」

「なるほどね……。」

「コルワは自身の顎に手を当ててしばらく考えると、口を開く。」

「最近ね、ちよつとエッチな下着の注文が増えるのよ。心当たり、あるんじゃないかしら。」

「うっ、あります…。」

2回目以降の子が以前よりも扇情的な格好をしてくることが増えているのは実感していた。透けていたり隠れていない下着だったこともある。

「一体どこの誰が彼女達をたらしこんでるのかと思っただけど、団長さんだったからまあ納得よね。とりあえずは安心だったけど、それがハッピーエンドに繋がっているのかは別。そうじゃない？」

「コルワさんは、認められないってことですか？」

「そうは言っていないわ。世の中にはごく稀に所謂ハーレムを築いて暮らしている人達だっているもの。」

「ハ、ハーレム……ですか。」

「けど、それがハッピーエンドとなるにはたくさん条件があるわ。」

女の子はね、一番じゃなくてもいいって口では言っても、本当は自分だけを愛してほしいって思っているのよ。でもその彼はたくさんの女性に囲まれて自分はその中の一人でしかない。それでも愛しい彼の側にいられるなら幸せと自分に言い聞かせるの。彼が平等に愛しているというのを信じて生きるしかない……ああ、やっぱりちよつとむかついてきたわね……!」

「コ、コルワさん……?」

コルワはいつの間にかグランの話ではなく、「物語」に没頭してブツブツと想像を広げていた。正直言つて悪癖にしか見えないのだが、クリエイター的には必要なのかもしれない。

「あ、ごめんなさい、つい先走つてしまったわね。とにかく、団長さんにその条件を満たす度量があるのかが問題なのよ。」

「度量ですか。」

「そう。まず1つ目はやっぱりお金ね。どんな夢物語を語つたつて、ハーレムともなればたくさんのお金があるわ。でも、この点は心配いらないわね。これだけ有名な騎空団ですもの。」

「まあ、お金には困っていないですね。」

「それじゃあ、2つ目は平等にみんなを愛せるか。どうかしら?」

「うーん、難しい話ですね……。そりゃあ、みんなのことは全員大事ですけど。愛とかつて言い出すと、自分でもハッキリとは言えそうにないです。」

「ふふ、それでいいのよ。人は誰だつて誰かに好意を向けられたり、何かをしてもらつたら嬉しいでしょう?それを積み重ねてきた子とそうでない子を同じだけ愛していたら、それこそ平等ではないんじゃないかしら。」

「なるほど……。そうかもしれないですね。」

グランの答えに満足したのか、コルワは少し笑顔になる。

「そして最後の3つ目。あ、言っておくけど、これ以外にも必要なものはたくさんあるけど、3つに絞つてただけよ?最低限必要な要素を挙げていただけだからね。」

「はい、大丈夫です。」

「で、3つ目だけど……ずばり、夜のベッドね。」

「……はい!？」

「もつと言うと、たくさんの女の子を満足させられる技術、持久力、精力よ。普通の男が与えられるよりも強い幸せを全員に与えられるほどのね。」

「きゅ、急に何を言い出してるんですか!？」

「私は真面目よ。だってそうじゃない?女の子が一番分かりやすく幸せを感じられて、他の男と一緒にになるんじゃない?ハーレムの一人になることを選ぶ一番の理由だもの。勿論、人によつては大家族みたいなのが好きな子もいるだろうけどね。」

「そ、そうでしょうか…。」

「そういうわけだから、団長さんは服を脱いでちょうだい。私が試してあげるわ。」

「いやいや、そうはならないでしょう!？」

「減るもんじゃないんだから抵抗しない!」

「減りますし女性が言うことじゃないです……つて、そんな…!」

「あら、私のほうが服は専門なのよ?」

抵抗虚しくグランはパンツだけを残して脱がされてしまう。ベッドに追い詰められたグランは狩られる側である。

「おとなしく見せなさい…!」

「ちよ、ああつ…!!」

「……全然勃つてないわね。」

「この状況で勃つと思いますか…?」

ムード無し色気無しでは勃つわけがない。グランがそう訴えると、コルワは次の手に出る。

「じゃあ、私も脱ぐわ。」

「ええつ!？」

あっさりと服を脱ぐと白いレースの下着だけになり、グランのチンポに手をつける。

「全然変わらないわね。不能……なはずはないし、どうしてかしら?」

「ですから状況がですね…。大体、コルワさんは僕をどう思ってるんですか。いくらハッピーエンドのためとはいえ、こんなことまでする必要あるんですか?」

「そうね……私は団長さんのことはそれなりに良く思っているけれど、異性として好きかって言われると微妙なところね。」

「じゃあ、やめましようよ。コルワさんは自分のハッピーエンドも考えてください。」

「私の?それはあまり考えたこと無かったわね。けれど、私の目標はたくさんの人をハッピーにすることよ。……あ、良いこと思い付いちやったわ!」

そう言うコルワの目は子供ののようにキラキラと輝いていた。一方のグランとして嫌な予感しかなかった。

「私もそのハッピーを体験してみたら、デザイナーとしてもっと成長できると思うの!お客さんをハッピーにするには、私がそれを深く理解しているほど良いものね!」

「そうなります……?」

「なるわ!良いヒントをありがとう団長さん!そういうわけだから私とセックスしてもらえないかしら?」

「はあ……しませんよ。僕にだって選ぶ権利ぐらいあるでしょう。ほら、服着て出て行ってください。」

「ちよっと!女性が下着になってるのにどかすなんて、恥をかかせるつもりなの!」

「ムードのムの子ぐらい作ってから言ってください。」

グランは勢いのままコルワの脱いだ服を押し付け、着直すように促し追い返したのだった。

「はあ……なんとか、つてとこかな……。」



「ねくえくぐくらんくく♡今日もセックスしようよ♡」

「ああつ!ジータさん昨日も一番最初だったじゃないですか!ね、

団長さん♡今日は団長さん専用のアイドルおまんこにしませんか♡
「わたくしは二番目でも構いませんよ♡たくさん注いでくだされば
…♡」

「お姉さんのおっぱい気持ちいい？もうこんなに熱くなってるもん
ね♡」

「ちゅぱ♡ちゅぱ♡はあああ…：だんちよーのおちんちん美味しい
よお♡♡」

今までに交わってきた団員達が何人も現れ、グランを誘惑したり奉
仕したりする。

「ああん♡団長に触られるの気持ちいい♡ほら、もつと触って♡」

「ずるいぞゼター！なあ、私のおっぱいも揉みくちやにしているか
らあ♡」

「団長さんのチンポびくびくしてますね…♡私も扱いてあげますか
ら、出して下さい♡」

びゅるるる♡びゅる♡びゅぶぶぶ♡びゅく♡びゅく

たくさんの団員達に精液が降り掛かり、歓喜の声を上げる。気だる
さを覚えているうちに一人がグランの上に跨がり、腰を振り始める
…。

「うっ…んん…。」

(昼間にコルワさんにされた話のせいで、変な夢見ちやったな…。) 下半身がぬめっている感触と身体の重さから夢精でもしたのかと思っただが、次第に頭がハッキリしてくる。

ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡

「あ、起きたのね♡団長さん♡お先に、はあん♡？オチンポ戴いちやってる、あああん♡？」

「コ、コルワさん…!？」

コルワの口周りと結合部を見れば、既に2回射精してしまっていることが分かり、グランの血が駆け巡る。

「なんで、こんなこと……!」

「下着を作つてあげるつて言つたら、ちよつと薬を盛るぐらい協力してくれたわ♡んはあん♡?それにしても、このオチンポすごい♡?」

コルワは完全に発情した顔をしており、昼間の色気のなさとは正反對である。そんな顔も出来たのかと思うと、グランもつい熱くなつてしまう。

「ねえ、分かる?寝ている間にこのオチンポ舐めるとき私の気持ち……♡雄臭くて、大きくて、硬くて……♡いつの間にか夢中でしゃぶっちゃつてたのよ♡いやらしい音をたくさん出してらうちに口の中にたくさん精液を出されて、全部飲んじゃったわ♡溢れた分も舐め取つたんだから♡ああ、その時にはもう私のおまんこは疼いてしようがなかつたわね♡だからよく考えずにオチンポ挿れちゃつたのよね♡このオチンポとセックスしたいつて気持ちしかなかつたんだもの♡そうしたらどうなつたと思う?」

「っ……!!」

「痛かつたわね……私、処女だったもの。しかもこんな大きいオチンポだし。でも、奥まで突き抜けた瞬間……♡イっちゃつたわ♡その時はもうこのオチンポとセックスするために女に生まれたんだ”つて直感したの♡みんなが夢中になるのも分かるわ、つて♡けどね、私の認識はそれでも甘かつたつてさっき理解したのよ♡そう、おまんこから溢れるぐらいたくさん中出しされた時……♡みんな夢中なんじゃなくて、依存させられちゃつてるんだつて♡このオチンポと……♡団長さんと……♡セックスしたいだけの雌に変えられちゃつたのよ♡」

コルワはグランのチンポが入っている辺りの自身のお腹を艶かく撫でながら、腰を動かし始める。

「ああああ♡?はあん♡?ねえ、団長さん♡私、今つてもハッピーな気分よ♡女の悦びつてこういうものなのね♡強い雄のオチンポと交尾して種付けしてもらおう♡こんな素敵なことつて無いわ♡ね、団長さん♡」

「くうっ、そう言われましても……!」

「団長さんはこのオチンポで何人の女の子を虜にしてきたのかしら♡5人は下らないわよね♡10人ぐらいいはいつてたりするのかしら♡それとも20人ぐらいい?取っ替え引っ替えセックスし放題よね♡」
「20人なんて、そんなにしてないです…!」

「あら、10人は否定しないのね♡でも何人だろうとちやんと責任取らないとダメよ♡全員を満足させないと♡ほら、言うでしょう?力には責任が伴うって♡」

「そういう意味じゃないと思うんですけど…!ああ、もう!」

「んああん♡?そんないきなり突き上げたらあ♡?イキそうになっちゃったじゃない♡でも、やっとヤル気になったみたいね♡」

「どうせ無理矢理終わらせても、またこうなるんでしょう。だったら、もうやったほうが早いと思っただけです。」

それっぽい言い訳をしつつ、グランの心は子供じみた状態になっていた。やって黙らせればいい。前にジータがリーシャを犯せと言った時の方法が、グランの感情を少しずつ支配してきていた。その感情を正当化するかのような理屈だけがグランの頭には浮かんできくる。

「そんなに私の脚を掴んで、どうするつもりなのかしら♡」

「こうするに決まってるじゃないですか!」

「あはああ♡?♡?あつ♡?はあああ♡?これ、すごい♡?団長さんに突き上げられると、こんなに違うのおお♡?ああくく♡?」

「ほら、これが欲しかったんでしよう!♡こうやって、僕から動くようにしたかったんでしよう!」

「そう、よお♡?はあつ♡?ああん♡?あくく♡?他の女の子みたいに、団長さんに求められてみたかったのおお♡?おうっ♡?はああ♡?」

「でもそれって、コルワさんがただハッピーを知るためですよね?僕の事なんて考えてないですよね?」

「そんなことないわよ♡団長さんも男の子なんだから、綺麗な女性とセックス出来たら嬉しいでしょう♡私、デザイナーだから自分の身だしなみも気を付けてるし♡」

「…:へえ、コルワさんって僕のことそういうふうに乗ってたんで

嬉しそうな顔しちやってる♡強い雄のモノにされるのってこんなにハッピーなことなのね♡)

「はうん♡?はあっ♡?お”うっ♡?お”っ♡?ひいつ♡?おお”っ♡?ほっ♡?ほお”っ♡?んいい”っ♡?まらイグ♡?あ”っ♡?お”っ♡?お”お”く”っ♡?♡?♡?」

(こんなに優しくされたら誰だつて虜になつちやうじやない♡イキながらどちゅ♡どちゅ♡ってされて最後にはまた…♡♡)

「あ”く”♡?♡?ああ”く”♡?♡?はあ”っ♡?んくっ♡?あ”♡?んんう”♡?♡?あ”あ”あ”く”♡?♡?♡?♡?」

「よく見てくださいね。最後ですよ。」

「さい、ごお♡?あ”あ”♡?あ”く”♡?♡?」

どびゅびゅぶぶ♡♡びゅぶぶ♡どちゅ♡どちゅ♡びゅぶぶぶ♡♡

「ほお”お”お”お”っっ♡♡♡?♡?♡?♡?お”お”く”っ♡?♡?♡?♡?おひっ♡?はあっ♡?はああ…♡?あひっ…♡?」

(お腹ちよつと大きくなつちやってるじゃない♡ああ、好きな男性に抱かれるのってこんなに素敵なのね♡オチンポ挿れたままにしてほしいわ…♡)

「ところでコルワさん。昼間言つた条件、僕は合格ですか?」

「んくっ…はあ…♡当然じゃない♡私が心配するなんて杞憂だったわ♡んっ…♡ねえ、それより団長さん♡もつとできるんでしよう?」

「もうこんなにいっぱいになってますよ?」

「分かってるわ♡でも、もつとハッピーになりたいの♡もつと、もつと♡」

そう言うときコルワは自ら腰を振り始めるのだった…。

第13話 幼馴染みと元アイドルと♡

「ついに今日か…。」

グランは自身の部屋で緊張を誤魔化すために独り言を呟いていた。関係を持った団員とは2回目以降も認めるしかないと考えているのだが、如何せんその人数も洒落にならなくなってきている。順番はリーシャが管理しているとはいえ、長期間できなければ不満になりやすい。

そんな折に「じゃあ2人同時にすればよくない？」とジータが軽く言ったのをきっかけに、試しにと今日3Pを行うことが決まったのである。ゼタやベアトリクスとは既にしたことがあるものの、どちらかと言うとなし崩してきな形であった。

今回の2人はくじ引きで決めているらしく、誰なのかはまだグランも知らない。それゆえにグランは余計に妙な高揚感を覚えていた。夜の町のそういう店で女の子を待つのはこういう気分なのだろうか、などとふと思ってしまうが、かぶりを振る。それは失礼極まりない考えだ。

ぐるぐると意味の無い思考をしながら部屋の中を歩いたりベッドに座ったりしていると、コンコン、とノックがされる。

「ど、どうぞ…。」

ベッドに座ったまま声を掛けると、ドアノブが回りドアが開いている。グランはいつになく心臓の音がうるさく感じていた。

「へへー、来ちゃったー！」

「今日は私達なんです。驚きましたか？」

パジャマ姿のジータとディアンサが部屋に入ってきて、すぐにジータはグランの左側に、ディアンサは右側に座ってくる。

「グランってば最初からベッドにいるなんて待ちきれなかったの？」

「いや、なんていうか…まあ、落ち着かなかったっていうか…。」

「ホントに？あつ、ちよつと硬くなってるじゃん♡」

「団長さんのエッチ…♡」

「そりゃなるよ…。」

ベッドで女の子特有の風呂上がりらしき甘い香りで刺激されれば当然である。2人共それは分かっている、からかってきているのだから。

「でもさ…待ちきれなかったのはグランだけじゃなかったりして♡」

「私や副団長さんも待ちきれなかったんですよ♡ほら♡」

そう言うと2人はパジャマを脱いで下着姿に——いや、下着としての本来の役割を果たしていない丸見えの衣装だった。ジータは淡いピンク色でディアンサは薄い白色。どちらも2人の大事な部分を強調する効果だけを持っていた。

「どう?…この下着♡コルワさんに作ってもらったんだよ♡」

「団長さんに興奮してもらうためのエッチな下着なんですよ♡」

「くっ…。」

「ほら、おっぱいもおまんこも…♡グランの好きにしていんだよ♡」

「私達もずっと期待してたから、濡れてるんですよ♡ほら、とろとろですよ♡」

「あ、ずるいディアンサ!ほらグラン♡私のも触って♡とろとろだよ♡」

それぞれグランの手を取ると自身の大事なところに触れさせ、体液でマーキングする。2人のそんな恥態に当てられてグランもすぐに高まっていく。

「ねえグラン♡おっぱいも吸って♡…んっ♡そう♡ああ…♡もっとお♡はああ♡ちゅうちゅうしてえ♡おまんこもちゅくちゅしてえ♡んはああ♡」

「副団長さんのだけじゃなくて、私のもいいんですよ…♡あっ♡はあ♡んうっ♡そこ、舌でコロコロされるとお♡んやああん♡」

2人は少しずつグランに身体を近づけ、甘い匂いと熱気で包まれていく。

「団長さん、キスしたいです♡舌を絡め合うエッチなキス♡はむっ

♡んちゅ♡ちゅぶ♡れろれろ♡ちゅぶ♡ちゅう♡んはあ♡ちゅる♡ちゅば♡」

「ねえ私も♡ちゅ♡ちゅう♡ちゅむ♡んろ♡えろ♡れろ♡ちゅう♡んは♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅる♡」

「団長さんのもうすつごく硬くなってるね…♡ズボン越しても分かるよ♡」

「んはっ…♡本当だ♡そんなに私達とセックスしたいんだ♡」
「っ…!」

「でも私、もつとキスしたいなあ…♡ちゅう♡ちゅむ♡ちゅれろ♡んちゅ♡んちゅ♡ちゅぶ♡ちゅず♡ちゅう♡ぢゅう♡」

「副団長さんのキスに夢中になるなんて団長さんにはお仕置が必要みたいですね♡ズボン脱がせちゃいましたよ♡はああ…♡パンツ越しにカウパー染みて匂いも凄い…♡」

ジータにキスで封じられているうちに、ディアンサはパンツ越しに愛おしげに撫でながら火照った顔でグランを見上げる。結託しているであろう2人の連携プレーで、グランのチンポは既に十分に硬くなっていた。

「それじゃあパンツも…っ♡ああ…♡今日も素敵なチンポですね♡このセンターマイクをたくさんしゃぶって…♡あげないよ♡」
「んうっ!」

「ぶはっ…♡あれ、そんなに驚いてどうしたの?もしかしてディアンサが口でシてくれると思ってた?」

「そ、それは…。」
「正直に言ったら、続きをしてあげるんだけどなー?」

「今日どんなふうにするかは2人で決めてあるんですよ♡だから流れに身を任せてください♡」

そう言われたらグランも観念するしかない。既に何度も肌を重ねた仲なのだから、プレイの一環としてやるべきだろう。

「今日はどれぐらい上手くなってくるのかなって…♡思ったよ。」

「へえ、ディアンサっていつも口でシてるの?」

「いつもじゃないですけど、よくしてますよ♡丁寧に愛情を込めて

してあげると、凄く気持ち良さそうで…♡たくさん出してくれますし♡」

「ディアンサは飲む派？」

「最初は多すぎて出来なかつたですけど、最近は全部飲んじやってますよ♡クセになるっていうか♡…って、私ばかりじゃなくて副団長さんこそどうなんですか？」

「私は時々かなあ…。だって、びゆるびゆる♡って口に出されるとイっちゃうんだもん♡味と匂いでグランのモノにされてるって思うと…♡♡その後はグランの好きにされちゃうからちよつと悔しいっていうか…♡」

「あ、私もイっちゃったことあります…♡団長さん、あの時ですよ♡久々に人前でパフォーマンスした日の夜です♡口の中にびゅー♡って出されたときに…私、イっちゃってたんですよ♡」

グランを挟んで生々しい猥談をしていたかと思うと、ディアンサが耳元で恥ずかしい告白をしてくる。どこまでが決めていることどこからがアドリブなのか分からないが、グランを挑発しているのは間違いない。そして2人はいつの間にかグランのチンポを扱き始めていた。

「ねえグラン♡目を閉じて。」

「目を？」

「これから2人でさつきみたい交互にエッチなこといっぱい囁いてあげますから♡」

「そう♡さつきのは本当の事だったけど…♡今度のは私達のエッチな妄想♡だから目を閉じて私達の声に集中してね♡」

「最後にはちゃんと射精させてあげますから♡」

「わ、わかったよ…。」

今日とはとにかく流れに身を任せることにしたグランは素直に目を閉じる。そうすると2人の口が息づかいが分かるほどにグランの耳に近づいてきていた。

「私の妄想は…：：：グランの妹だよ♡毎日お兄ちゃん好きだよって言っても全然相手してもらえなくて、いっつもお部屋でオナニーし

ちやってる悪い子なの♡お兄ちゃん、お兄ちゃんって言いながら何度もイって疲れて寝ちやうんだ♡」

「私の妄想はね……ライブしてる団長さん、じゃなくてグランさんのファンなの♡巫女のお仕事が無いときにこっそり1人でライブに行つて、グランさくん！って叫んだり手を振ったりしてるんだ♡」

「ある日ね、いつもみたいにお兄ちゃん好きだよって言ったから、かうのはやめなさいって怒られちやうんだ。本当に好きだもん！って言い返したら、じゃあどれぐらい好きなの？って壁ドンされちやうの♡」

「ある日ね、すごく楽しみにしてたライブに行くんだ♡最前列で取れたんだよ。しかもライブ中に私に向かつてウイंकまでしてくれて、幸せだつて思つてたら、ライブ後の握手会で今日1000人目の握手だからって特別に控え室に招待までしてもらつて最高だったんだ♡」

「男の人として好きって答えたら、本気なの？って念押しされて、それでも頑張つて本気だよって答えたらいきなり抱き締められちやうんだよ♡それで僕も本当は好きだったんだって言われてベッドに押し倒されちやうんだよ♡」

「控え室でいろんな話を聞かせてもらつてるうちに、良い声してるからどこかで一緒に歌つてみない？って誘われた私は舞い上がつてあつさりついて行つちやうの♡グランさんのヤリ部屋に連れていかれるなんて思いもせずね♡」

囁きながら段々と2人の手つきはいやらしく速くなっていく。溢れたカウパーでぬちゅ♡ぬちゅ♡と音もわざとらしく鳴らしながら、2人は更に身体を密着させる。

「最初はいっぱいキスしたりしてイチャイチャしてたんだけど、我慢できないってお兄ちゃんがおちんぼ大きくして妹の私に擦り付けてくるんだよ♡なんとか最後の理性で擦るだけんだけど、それでも気持ちよくて2人で喘いじやうんだよ♡」

「部屋に着いたら最初はそれぞれが歌つたり一緒に歌つたりして楽しんでたんだけどね、段々うとうとしてきちやつたの♡そうしたらグ

ランさんが私の身体に触って服を脱がしてきて：♡やめてって抵抗しようとしても力が入らなくて為す術もなく全部脱がされちゃうの♡飲み物に混ぜた薬のせいで動けないんだから当然だよね♡」

「素股で誤魔化してただけど、私がお兄ちゃん：挿れて♡って言ったら、あっさり最後の理性なんて捨てて大事な妹の処女を奪っちゃうんだよ♡ずぶくくってね♡で、挿れたら即な・か・だ・し♡しかもお兄ちゃんはごめんって言いながら腰を振っちゃう最低なお兄ちゃんだけど、妹の私はオナニー狂いの淫乱だからそれでイっちゃうんだよ♡お似合いだよね♡」

「抵抗できない私はグランさんに簡単に生チンポで処女を奪われちゃうの♡勿論ファーストキスも♡憧れの人に無理矢理犯されてシヨックなのに、グランさんは凄く上手くて簡単にイカされちゃって：♡♡そこにとどめの中出し♡それで気持ちいいことしか考えられなくなった私はチンポの言いなりになっちゃっんだ♡」

ラストスパートとばかりに2人の手は射精させるつもりで速さになり、自身の股をグランの腕に強く擦り付けて吐息を荒くしていた。

「淫乱妹のきつくいいおまんこを好き勝手にズボズボしてたくさん中出しするのは気持ちいいよね♡突いたら出して♡出したら突いて♡そのたびに妹の私はイクんだよ♡お兄ちゃんのおちんぽ気持ちいい♡もつとちようだい♡って言ってるんだから、遠慮なんてしなくていいんだよ♡」

「一晩中グランさんのチンポで犯されて何度も中出しされて、途中からは自分で動いちゃうんだ♡チンポ好き♡チンポ大好き♡グランさんの女にしてください♡♡って叫びながら抱きついちゃう♡エッチなキスでも何でも受け入れちゃうんだよ♡」

「ほら、もつと妹の中にいっぱい出して♡いっぱい注いで♡お兄ちゃんの精液で好きなだけ種付けして♡私をおちんぽ漬けにして♡」
「グランさんの女の1人になった私にもつと中出しして♡チンポに服従した私に出して♡おまんこの中に無責任中出しして♡」

「出して♡出して♡私の中にいっぱい出して♡」
びゅーーー♡♡びゅびゅ♡びゅーー♡びちやつ♡びちやつ♡

「ふああああ♡射精すごっ♡この匂いクラクラしていつちゃうよおお♡?♡?ふあああん♡?♡?」

「私も、団長さんの精液浴びながらいつちゃう♡?団長さんの腕でオナニーしながらイク♡?♡?はああああ♡?」

「あぐっ…あつ…はあ…。」

グランは口を開けたまま口端から涎が出ているのにも気づかず脳が溶けるような感覚のまま射精し、辺りに精液が飛び散る。攻めていたジータとディアンサも合わせて絶頂を迎え、性臭が部屋に満ちていく。

「はあ…はあ…。」

「んっ…♡どうだった?グラン♡」

「すごかった…。」

「もう目は開けていいですよ♡」

「うん…。でも、ちよつと見づらいかも…。」

「妄想は妄想なんだから、私達のことちやんと見てよね♡」

「そうですね♡次は本当に中出しエッチするんですから♡」

そう言うと2人は一糸纏わぬ姿で並んでベッドに仰向けになり、無防備に身体を晒け出す。

「ボーツとしてないで、おちんぼ挿れて♡もう待ちきれないんだから♡」

「好きな方から挿れていいですよ♡途中で変えても♡団長さんの好きにしてください♡」

理性などとつくに失くしていたグランは、いきり立ったままのチンポを片方に狙いを定めて一気に突き挿れる。

「ああ〜♡?おちんぼきたああ〜♡?これだけでもういつちやいそう♡?ああっ♡?はあっ♡?いきなりそんな突いちやあ♡?やあっ♡?あああ♡?」

「いきなりそんなに激しくするんだ…♡エッチな音すごい出てる…♡」

「違うからあ♡?これはさっきのでおまんこの準備できちゃったから、んあああ♡?だめっ♡?そんな、んいい♡?そこは、ああ〜♡」

♡♡?♡♡?」

「凄く気持ち良さそうな顔してますよ♡団長さん、いつもこんな感じなんですか?」

「ジータはいつもこうだね。」

「そんなことないもん♡?あああ♡?そこまたあ♡?んくっ♡?ああ♡?おぐっ♡?おちんぼ奥にぐりぐりしたらだめなのお♡?はあゝゝゝ♡?♡?」

「こうやっておっぱいが揺れているのを見るとエッチですね♡結構大きいし♡触りたくなっちゃいます♡」

「だめ♡?今ジンジンしてるからあ♡?また大きくなっちゃうよお♡?はうん♡?はあっ♡?ああう♡?乳首もだめなのお♡?」

「サイズいくつあるんですか?Eはありますよね?もしかして…F?」

「この前、自慢げに91のGとかって言ってたよ。」

「いいなあ…♡私ももっと大きかったら色々と役に立つのに♡あ、ちなみに私は84のCですよ♡現役のときは大きくしないように気をつけてましたけど、今なら団長さんが好きだけ育ててくれて良いですからね♡」

「ディアンサは自分のおっぱいを持ち上げるように触りながらグランに見せつけ、再びジータのおっぱいに手を伸ばす。」

「これ以上副団長さんのおっぱい育てちゃうのも悔しいなあ…。んー……。ココ、触っちゃおうかな♡」

「ひゃううん♡?♡?そこ押しちゃだめっ♡?あぐっ♡?おちんぼで一杯になっちゃう♡?おうっ♡?あゝっ♡?あいゝっ♡?おゝっ♡?押すのダメえ♡?」

「ほら、こうやって両側を抑えると…チンポの形に浮き上がってきますよ♡こんなところまで届いてるんですね♡」

「ディアンサ、上から押されると僕もやばいかも…!」

「私もそれやばいからあ♡?あうゝっ♡?グランも止まってよお♡

?いあゝっ♡?くうん♡?子宮の中までぎちやってるから♡?ほうゝっ♡?」

んならもしかしたらって思ってたんですよ?」

「私だって普通の女の子だもん…♡ねえ、ところでグラン♡今同じこと考えてるでしょ♡」

「そうかも。」

「えっ…?ちよつと、団長さん!?副団長さんも話が違つ…!」

2人は起き上がるとあつという間にディアンサを捕まえ、グランに騎乗位する真上に位置させ、ジータが後ろから拘束する。

「私、体力はあるから、すぐに復活しちゃうんだよね…♡さっきのは効いたからちよつと時間かかっちゃったけど♡悪乗りするイケナイ子はお仕置きしないとね、グラン♡」

「いつもは結構優しくしてるけど、今日は激しくするから覚悟してもらおうかな。」

「ま、待つてください、まだ心の準備が…!」

「だめでーす♡待ちません♡」

ジータは容赦なくディアンサの肩を上から押してグランのチンポへと一気に突き刺す。

「かはっ♡?あつ…♡?はあつ…♡?いきなり、こんな奥まで…♡

?はっ…♡?ああつ…♡?」

「あれ…?もしかしてイっちやったの?おちんぽに弱いのはどっちなあゝ♡」

「だって、団長さんのチンポがっ…♡?んくうっ…♡?はあ…♡?」

「ディアンサ動けないみたいだからさ、代わりに動かしてあげてよ。」

「りよゝかゝい♡」

ジータは後ろからディアンサを掴んだままその身体を持ち上げて落とし、ばぢゅん♡ばぢゅん♡と強烈な刺激を与え始める。

「あぐっ♡?あはっ♡?はひっ♡?あつ♡?はあん♡?これ♡?またすぐ♡?イっちやう♡?んはあん♡?やつ♡?はああ♡?」

「気持ちよくなつてばっかいないで、ピースぐらいしてみたら?ファンがサービス待つてるよ♡」

「はっ♡?いい♡?パイ♡?ス♡?はひん♡?ピース♡?あひっ

♥?はあ♥?ああ♥?」

「そう素晴らしい感じだよ♡次はピースしたまま今何してるのか言ってみて♡」

「はあん♥?はっ♥?いま♥?はあ♥?団長♥?さんの♥?チンポで♥?はひいん♥?おまんこ♥?えぐられて♥?あはああ♥?イカされてます♥?はああ♥?」

「それめっちゃエロ…!」

「でしょ♡じゃあ次はイクニアの人達にご報告してみよっか♡もちろんピースしたままね♡」

「はいい♥?私はあ♥?団長♥?さんが♥?大好き♥?はひっ♥?なんです♥?強くて♥?優しく♥?それに♥?チンポが♥?すごいんです♥?初めてのお♥?エッチで♥?虜に♥?なっちゃいましたあ♥?だから♥?私はもう♥?団長♥?さんの♥?女なんです♥?はああ♡♡?♡?」

「じゃあ最後に良いセリフ用意してあげてるから、耳貸して♡今度はピースしながら自分で動いてね♡セリフは…」

「はっ…♡あっ…♡そんなこと…♡」

「はい、出来たらさっきのは許してあげる♡」

ジータは耳打ちを終えるとディアンサの後ろから離れ、グランの側に回って見守るように座る。

「はっ…♡はっ…♡これからあ…♡アイドルディアンサの…♡生セックス…♡生中出しショーを…♡行きます…♡♡団長さんが出きるまで♡私がいつでも動き続けます♡なのでどうか、見ててください♡」

ばちゅ♡ばちゅ♡ばちゅ♡ぐじゅ♡ぱじゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡

「はあっ♥?あっ♥?はっ♥?チンポ硬くて♥?はひっ♥?すぐイっちゃいそう♥?あああ♥?チンポ気持ちいい♥?はあん♥?私、すっかりエッチな子になっちゃいました♥?んはああ♥?はああ♥?」

「いいよ、もっと続けて…!」

「はいい♥?私がチンポで気持ちよくなってる♡?んん♡」

「そうですね、やりすぎです…♡だから次はお詫びに恋人っぽく甘いエッチしてくれたら許してあげます♡」

「あー！ずるい！順番的に次は私でしょ!?!」

「ちよ、2人共…!」

この3Pはしばらく終わりそうにないと思いつつ、グランは更なる連戦へと挑んでいった。